魔法での幸せ

山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法での幸せ

【Ｎコード】
Ｎ２６６４Ｎ

【作者名】
山

【あらすじ】
・フラユンス・メディア
・川崎　励　（かわさき　れい）

昔、私たちの世界には［魔法］という言葉を全く知らなかった。そして、現在・・・私は魔法世界の王女である。
［お母様～］
と小さい私の子供たちが私のところに来た。

［な～に？］
と私は答えた。子供たちは
［お父様とお母様はどうやって結婚したの？］
と聞いてきたので、私は
［長い話聞ける？］
と笑顔で言った。そして子供たちは
［うん！］
と元気な挨拶をしたので私は今までの話をした。

あの人との出会い（前書き）

小説第2弾です・・

今回はファンタジーことで・・

前は少なかったかな・・っと

おもい今回はがんばって・・

長編でいければいいと思います。

遅れる場合がありますが・・

そこは見守ってくださると助かります。

あの人との出会い

昔、私は魔法も何も持ってない普通の女の子
結構、外で遊ぶのが大好きで、自然が一番好きでした。
そんなある日に、私は3人の男の子からいじめられて
心のそこから
［だれか助けて・・・］
といった時なぜかその3人の男の子は少し足が浮いて
びっくりした。そして1人の男の子が
［1人のかわいい女の子をいじめるのはよくないよ。］
と言って、いきなり浮いたのが突然魔法のように私が
見ていて男の子達は尻をついて怖がって逃げて行った。
そして、私は
［ありがとう。本当に助かりました。］
と感謝しきれないように頭を下げました。
そして男の子は
［気にしないよ、でもなんでいじめにあったの？］
と不思議そうに質問をしていきました。私は
［この小鳥が木から落ちてきて、助けようかとしたときに、
男の子達がいじめてきたの・・・］
と言った。そしてその男の子は
［そっか・・・］
と言った、そして男の子は
［今使ったことはだれにも言わないでね・・この世界には
魔法の言葉知らない人が多いから・・お願いね。］
と笑顔で言った。そして私は、
［もちろんです。助けてもらったのに何もお礼が
できないので・・ごめんなさい。］
と言って、私は男の子の名前が知りたく

［私の名前は川崎励って言うの、励って呼んで。そして
あなたの名前教えて。］
と言った。そして男の子は言った。
［僕の名前はフラユンス・メディアって名前だよ。一応
この世界の住人じゃないだけど・・違う世界で魔法が
使える世界から来たのよ。］
と笑顔で言った。私は驚いたけど、
［もし、名前でユン君って言ってもいいかな？
あと私ともしよかったら友達になりませんか？
私あなたの世界のこともっと知りたい！］
と言った。そしてユン君も
［もちろん、でもうちでもいいの？僕も
まだこの世界に来てあまり知らないことが
たくさんありすぎて困っているのよ。教えてくれない？］
と言った。そして私は
［もちろん。よろしくね、ユン君］
と笑顔で言った。そう、私は今ユン君と
いつでも仲よくしていきたいし、
ユン君の世界のことをもっと知りたい、
そしてユン君と付き合いたいと思った。（第1章終り）

突然の別れそして・・

私たちが出会ってからもう5年になりました。
私はもう中学1年でユン君とは今でも友達関係ですが、
時々あったりして私の学校生活などを
話したりして、生活をしていますが、ユン君の話は
ときどきしか話してくれない。私はもっとユン君の
魔法の世界について知りたい、と心から思うけど
そんなに急いではだめだと思いいつでも話来ないかな
と思う。しかも、ユン君と会える日も決まっている・・
3か月に1回しか会えないのだ。ユン君の家庭は忙しく
いろいろなところを回っているのでユン君と私と会うのは
3か月に1回だけ許してもらえた。だからユン君の話は
いろいろなところの楽しかったところ、不思議なところ
を話してくれるの。それはうれしいだけどまだ私はユン君の
魔法の世界についてあまりしらない・・・そして私は
［次にあったら聞いてみよう］
と思った。次に会える時は私の誕生日で
その日に会えるということなので聞いてみようと思った。
そしてその日・・・私は前に時間と場所を聞いて、
そこに行った。だが・・・ユン君の姿が見えなかった。
でも少し遅れているのかな。と私は思い、少し待った。
だが・・・1時間経ってもユン君は来なかった。
私は心配になった。
［どうしたのだろう・・・］
とするとそこで、1人の若い人が私の前に来た。
［あの・・すいません。川崎励さんでよかったのですか？］
と優しい声で言った。そして私は
［はい、そうですが・・・］

と言った。そして若い人が苦しいそうな声で
［王子様を助けてください・・・お願いします。］
と言われて、私は驚いた・・・。
詳しい話を聞くとユン君は魔法世界での
王子様で、いろいろな世界に旅に行きたいと
言うことで、私が今いる世界に来たり帰ってきたり
してきたと・・・。しかし今日私と会う前にまさか
ユン君がさらわれた、ということでそのことを伝えに
私に報告してきた。ということであった。で私は
［私は・・魔法世界にいけないし・・魔法も使えないのよ・・
どうやってユン君いえ、王子様を助ければいいのですか？］
と言った。そこで若い人が
［貴方様なら大丈夫です。魔法世界に行くのは私と
いけばいいし、魔法はこの杖を差し上げましょう。］
と言った。しかし、私は・・
［王子様はどこにさらわれたの？］
と苦しそうな声で言った。すると
［王子様は魔法が嫌いな魔王のところに
つかまりました・・。しかも魔王のところは
魔法が使えない結界があって、王子様は魔法が
あまり使わない、優しい人なので・・そこに入ったら
魔法で逃げることができないから・・どうか助けてください。］
と私に行った。だから私は、
［私でよければ力になります。まずは・・
何をしたらいいのでしょう？］
と言った。すると若い人はまず・・魔法世界に
行くので当分、いや・・・もうここの世界に
戻れるかどうかわからない・・もし戻ったりできても
魔法世界にはもどれないので・・］
と苦しい言葉で言った。そして私は、

［どうして？］
と答えた。すると答えてくれた。
［王子様は特別なのでこちらの世界とあなたの世界は
何回言っても許してもらえますが・・王子様以外で
こちらの世界とあなたの世界は１回だけ許してもらえるので・・
そうしないと・・多分戦争になってしまい・・・あなたの世界は
戦争に負けてしまうので・・こういう制限がありまして・・］
と言ってくれた・・なので私は・・
［明日まで考えさせてくれませんか？急に出てしまうと
親や友達に心配かけてしまうので・・・］
と言った。若い人はわかりました。では明日迎えに
他の人に来てもらいます。と言って消えてしまいました。
そして私は、親には内緒で行こうと思って、手紙を書いて
行く準備をして家を出た時に父親が
［どこに行くの？もしかして魔法の世界に行ってしまうのかい？］
と言われ、私はびっくりしました。
［なんでお父さんが魔法の世界のことを知っているの？］
と不思議そうに質問をした。
［私は元々魔法世界の住人だったのよ。］
と言い、私はびっくりした。そして、
［私は・・・魔法世界が嫌になったのよ。魔法で
攻撃したりして何にも面白いことがなく
生きていくのが嫌になったから・・・だから、
私は魔法を捨てて、この世界に来たんだ・・
そこで私はここでお母さんとあって、魔法世界のことや
わたしがこっちに来てからも歓迎してくれた・・
だから私たちはお前を生んだんだよ。］
とうれしいそうに言ってくれた。
［だから、お前の事情は知らないが、お前の好きな
人のために行くなら私は止めないが・・しかし、

これだけは言っとく。がんばれ・・そして
幸せに・・・」
と泣きながら言った。そして私も
「ありがとう・・お父さん・・」
と涙が出てお父さんに抱きついた。
そして行ってきます。という時にお父さんが
「お前には1回だけ杖がなくても魔法が使える
なぜならお前はお父さんの子供だから・・
だが・・どうしても助けたい。と言う時に
使うのだよ。あとこれはお父さんからのお守り。」
とお父さんからリストバンドをもらった。
ありがとう。と言い。私はあの若い人が言った
場所に向かった。　（第2章終り）

魔法世界

「ここが魔法世界なんだ。」
と私は驚きながら、ユン君が住んでいた、
お城に案内された。そこに王様が私のところに来て
「あなたが川崎さんだね？」
といわれたので、私は、
「はい、私は川崎励と申します。」
と硬い言葉で言った。すると王様は
あまり硬くならなくて普通に接していいよ。
と言われて、そして王様は
「息子をお願いします・・・」
と悲しい言葉を言って、王様の使いの人に
部屋に案内されました。そして、
「今日はいろいろあって、疲れているかと
思いますので、今日はゆっくりお休みください。
明日から大変ですから・・・」
といわれて、王様の使いの人は部屋を出た。
そして私は・・・緊張して・・
「明日からユン君を助けないと・・・」
と思い早めに就寝した。そして朝になって、
私は準備していたとき、王様が来て
息子を助けるのに1人では危ないから
この2人を連れて行きなさい。
といわれて1人ずつ挨拶をした。
1人目はキトさんと言って、この魔法世界の
中でも上位クラスの魔法戦士さんです。
もう2人目はティオさんと言って、キトさんと
同じで上位クラスの赤魔導士さんで主に回復魔法

が得意らしく、あまり攻撃魔法はしない人です
この2人はユン君のために付けられた魔法兵士さんです。私も一応自己紹介をして旅立つ準備をしていき、そのときに王様が私のところにきて
「息子を助けてください、しかし無理だけはしないでください・・あなた様を無理をしたら息子も悲しむのだから・・それと・・その杖は１０回だけしか使えないからどうしても危ないときだけ使ってください・・それとこれは私から、息子に会ってどうしても危ないときはこれを使うのだ。それまではお守りとして持っていてください。」
と私に袋のようなものを渡されて、私は
「ありがとうございます。ユン君は必ず、助けますので心配しないでください。」
と笑顔で行った。そして王様は
「魔王は息子の魔法の力を利用してこの魔法の世界と君がいる人間の世界を世界征服するのだ・・だが・・息子の魔力はとても巨大なもので魔王にはその魔力をコントロールするにはとても時間がかかるのだろうだが・・多分早くて1年にはコントロールできてしまう・・だからそれまでに息子を解放してください・・お願いします。」
と言って、私から姿を消しました・・・。
そして私はキトさんとティオさんに
「よろしくお願いします。」
と言って。キトさんティオさんが
「よろしくお願いします。これからは川崎様と呼びますね。必ず川崎様を守りつつユン様を

助けましょう。これからもよろしくお願いします。」
と言って。私たちはお城から出た。　（第３章終わり）

魔法世界（後書き）

あらすじに・・
川崎励さんの名前がなかったです。。。
すいませんでした><
のんびり書くのですいませんが・・
よろしくお願いします。
何か感想などがあったら
書いてね（無理に書かなくていいので・・
では・・・

旅のはじまり

私たちが城から出てもう3日立ちます。
初めての旅、魔法世界での生活そして魔法
などいろいろわからないまま旅をしていき
疑問に思ったことはキトさんやティオさんに
聞いたりして大体わかった。そして・・
1つ疑問があったことがあるので2人に
聞いてみました。
「ユン君はどうして私の人間世界に来たの？」
と聞いてみました。そしてティオさんが答えてくれた。
「ユン様は私たちの魔法世界とあなたの人間世界は
門があるのですが・・しかし許されるのは1回のみのは
知っていますよね？」
と私に聞いたので私は
「はい・・確か私にユン君を助けてください。と
行ってくれた、若い人から聞きましたが・・」
と私は答えた。そしてティオさんが
「そうです。あの若い人はユン様の
結婚する人だったのです。」
とつらい言葉で言った。そして
「だけど・・・ユン様は魔法世界と人間世界の門を
通るには1回だけ許しでどっちか門を通ると
二度と戻れないのが間違っている。自分がいつか
その制限をなくすんだ。と人間世界に行って
魔法世界との門を新しく作り直そうと決心して、
人間世界に時々行っていたらしく・・・そのときに
そのときはまだ付き合っていたんだけど・・・
ユン様は何回か人間世界に行ってそのときに

初めて楽しかった。と笑顔で行ってくださった。
その話を聞くと川崎様の話をしていくうちに・・
だんだんと付き合っていた彼女と話が合わなくなり
ユン様が魔王に連れ去られる1週間前にユン様は
次に川崎さんと会ったら告白する。と笑顔で行って
分かれてしまったのですが・・そしてまさかユン様が
魔王にさらわれたときに彼女は自分では何にも出来ない
と思い川崎様を探しに人間世界に行ったのでしょう。」
と話してくれた。そして私は
「彼女はどうしたの？」
と聞いてティオさんが悲しい言葉で
「彼女は・・・もうこの世にはいないのです・・
いるとしたら・・その川崎様が持っている杖だと
思いますが・・・」
といわれて・・私は
「何で・・・？」
と言った。ティオさんは言うのがつらくなり
キトさんが言った。
「それはね・・こちら魔法の世界の住人でも
何回でも通れるのは王様と王女様とユン様と
その使いしか・・許されてないのです。しかし、
彼女はあなたにユン様を助けてほしいという熱心で
私たちに一言を言って、人間世界に来て彼女が
持っている最後の力で杖を作り川崎様を守れるように
そして・・ユン様が元気な姿で帰ってくるように。と
願ったのでしょう・・・」
といってくれた。そして私は
「答えてくださってありがとうございました。
あの若い人と王様のためにユン君を助けます。」
と言い、キトさん、ティオさんは

「無理だけはしないようにしてください。
　これから忙しくなりますから。」
と言って、魔王がいる魔界に行くには
２つのアイテムがいるらしくその
アイテムは迷いの森にある
再生の木の枝と海にいる
人魚姫の涙がいると
聞かされて今私たちは最初に
近いアイテムは迷いの森にある。と
言うことなので歩いていった。
そしてその３日後、私は
「あそこが迷いの森なのですか？」
と言った。キトさんたちは
「そうです。私たちも始めてなので
　気をつけてください。」
と言って私たちは森の中に
入っていった。　（第４章終わり）

迷いの森

あそこが・・・迷いの森か・・・
と私はつぶやいた・・・
そして・・・
迷いの森に入ってから2時間
「迷いましたね・・・」
と私が言ったらキトさん達が
「すいません・・初めて迷いの森に入った
ので・・どこに再生の木の枝があるのかも
分からないので・・・」
と暗い言葉で言われて・・・
「しかたないよ・・でもやっぱり迷いの森だね
どうやって探そうか・・・」
と言ったときにきれいな歌声が・・・
そして歌が聞こえるところに向かっていた時に
なんとかわいい女性が1人で歌ってました。
そして、歌が終わった時に私が、
「あの～すいません。」
と尋ねたところ、
「はい？何でしょう？」
と答えてくれた。そして
「ここの森の中に再生の木の枝っていう
アイテムがあるっと聞いたので・・・
場所知りませんか？」
と質問をしたところ、きれいな女性が
「場所は分かりますが・・・そこには
向かわないほうがいいと思いますよ・・」
と言われ、私がなぜ？と聞いたら

「今、魔族が再生の木の近くにいるので・・
私たちはそこから逃げたのです・・・だから
あなたたちもそこにはいかないほうがいいですよ」
と言われた。でも私は
「大事な人が魔王のいる魔界につかまってるので
再生の木の枝のアイテムがないと入れないので・・
どうにか場所だけでも・・お願いできませんか？」
と聞いたら、その女性が場所を教えてくださった。
そして私は
「ありがとうございました。え～と・・名前は・・・」
と・・名前が分からないので・・聞いたら
「私は・・・ことりって言う名前です。」
と言われて、私は
「ことりさん、ありがとうございました。
ありがとうございました。」
と言い、キトさんとティオさんが
「私たちは魔王を倒さないといけないので
とても助かりました。そしてお礼でここに
いる魔族は退治しますので・・ご安心を
では・・・」
といいことりさんは
「ありがとうございます。でも魔力が高い魔族が
いるので気をつけてくださいね。」
と言い、私たちと別れました。
そして、歩いて３０分ぐらいで
「あそこですね。」
私が言ったら、キトさん達が
「あれが再生の木でしょう、魔族は魔力が高いので
川崎様はここに居てください。そして魔族にあっても
この杖は使わないようにしてくださいね。」

と言われて、２人は魔族に向かった。

（第５章終わり）

魔王の四天王　ゴーレム

キトさんとティオさんは
魔族と戦う中私は・・
「大丈夫かな・・・すごく心配だな・・・」
と思い、二人を見てました。
そしてその中でもでかい魔族が言いました。
「なかなかやるな・・・だが！しかしこの
　魔王クンドン様の四天王の１人ゴーレムには
　勝てないだろう思いしれ！」
と言い、四天王ゴーレムは地属性の技を使い
キトさん達が結構苦戦してたのです。
そして、四天王ゴーレムは
「どうだ・・私は地属性だからな・・
　しかも魔法などは効かん、堅い壁があるからの」
と言い余裕な感じであった、
そしてキトさん達は
「やばいな・・」
と苦戦をしていき私は、
「どうしよう・・どうしたらキトさん達を守れるの？」
と悩んでいたらそこにことりさんがやってきて
「私に任せて」
と言われて、ことりさんはゴーレムに向かって
あの美しい声で歌った。そして四天王ゴーレムは
「く・・なぜだ・・なぜ・・力が入らん・・」
と言い、ことりが
「この歌を歌うと魔族は力が入らないような魔法を
　かけてますので。今ですキトさんティオさん」
と言い、キトさん達は

「ありがとう、ことりさん」
と言い二人は四天王ゴーレムに向かって戦いに
向かいました。そして四天王ゴーレムは
「くそ・・逃げるしかないか・・だが・・
　お前だけは許さんぞ！」
と言い、最大魔力でことりに向かって魔法を打ち
四天王ゴーレムは
「じゃあな！そして消え去れ」
と言いどっかに消えた。
だが・・攻撃魔法はさすがにキトさん達には
止められない距離でこれを食らったら
ことりさんが死ぬと思い私は・・
「キトさん達ごめんね・・杖さん・・お願いです。
　ことりさんを助けて！」
と言い、杖が答えてくれて、ことりさんの
前にバリアが貼られて攻撃魔法とぶつかり
魔法が切れた。そして、私は
「ふう・・・あぶなかった・・ことりさん
　大丈夫ですか？」
と言い、ことりさんは
「ええ・・大丈夫です。ありがとうございました。」
と言われて、私は
「いえいえ、こちらこそありがとうございました。
　キトさんティオさんごめんなさい・・1回使いました・・」
と言ったら、キトさん達は
「気にしないでください、あの強力な魔法では
　私たちのバリアでは守れなかったのでしょう・・
　だから気にしないでください・・まだ杖は9回あるので
　大丈夫ですが・・あまりつかわないでくださいね。」
と言い、私は

「分かりました。今後気をつけます。」
と言った。
そして私たちはことりさんにお礼をして。
再生の木の所に行き、
「これか～・・ごめんね・・再生の木さん
どうしても大事な人を助けるために枝が必要なので
木の枝を折ります・・・ごめんなさい」
と木の枝を折り私たちは迷いの森に出るときに
ことりさんが
「もし・・よかったら・・私を連れてってくれませんか？
さっきのお礼で私もあなたたちの強力をしたいので・・」
と言われて、私は
「私は・・何も答えれないし・・キトさん達はどう？」
と聞き、キトさん達は
「私たちでよければ・・お願いします。まだゴーレム見たいな
四天王がいるし・・ことりさんの援護魔法がないと
今後きつそうなので・・・こちらからお願いしたいので・・
よろしくお願いします。」
と言い、ことりさんは
「ありがとうございます！これからも迷惑かけずにがんばります！
よろしくお願いします。」
といい、私たちも
「こちらこそよろしくお願いしますね！ですが硬い言葉を
言わずに気楽に話してください。」
と言い私たちは迷いの森を出た。
次は海の所に行き次のアイテムの人魚姫の涙を取りに行くために
私たちは向かった。　（第６章終わり）

魔王の四天王　ゴーレム（後書き）

一応ここまでのキャラ紹介
川崎励　（普通の人間）
キト　（魔法戦士）
ティオ　（赤魔導師）
ことり　（援護魔法）
フラユンス・メディア（王子様で属性不明）
四天王ゴーレム（地属性）
簡単に書きました。
あとの四天王は多分
属性は分かるでしょう・・
名前は思いつきで書きます。
多分皆さんが思ってる名前だと・・
では～

番外編　現在のキャラ紹介（前書き）

現在のキャラでの簡単？な
紹介をまとめてみました・・・
いらないと思うので
見たくない方は・・
スルーしてください・・

番外編　現在のキャラ紹介

川崎励　（普通の人間）
彼女は現在中学1年生の１３歳
家族は父、母、弟、妹の５人家族
性格は明るいですが・・あまりはっきり
　言わない人で時々言いそびれることが多い
好きなこと　人と話すこと
好きな食べ物　魚
嫌いな食べ物　ゴーヤ

キト　（魔法戦士）
彼は現在２０歳で魔法世界の王子様の使い
家族は父、母、姉の４家族
性格はがんばり屋、自分が守れなかったり
　力が足りない時は自分で特訓したり
　して現在魔法世界で魔法戦士クラスの
　なかでトップにいる人
好きなこと　不明
好きな食べ物　不明
嫌いな食べ物　不明

ティオ　（赤魔導師）
彼女は現在２０歳でキトと同じく王子様の使い
家族は父、母の３人家族
性格は不明、見た感じは優しい性格だと思うだが・・
　王子様もあまり性格は気にしなく詳細は不明
　しかし彼女も現在魔法世界でトップクラスに
　居る人なのだ・・・性格はあとからの話で
　分かるかも？
好きなこと　本を読むこと

好きな食べ物　野菜
嫌いな食べ物　牛乳
ことり　（援護魔法）
彼女は現在１２歳
家族はいなく生まれたときから1人だったらしく
迷いの森でいろんな人から育ててもらい８歳から
1人生活をしてきたそうだ・・・
性格は優しい性格自分より他の人が困ってたり
　するとそっちのほうを優先するからいつも
　自分の問題を解決が遅くなる。歌の支援系の
　魔法が使えることが分かったのは１０最のときだった
好きなこと　歌を歌うこと
好きな食べ物　リンゴ
嫌いな食べ物　なし
フラユンス・メディア（王子様で属性不明）
彼は現在１５歳で魔法世界の王子様
家族は父、母の３人家族
性格は恥ずかしがり屋で自分で言うより
　他の人から言われるままが多いが
　自分から言ったのが魔法世界と
　人間世界の門を制限をなくしたい
　と言って回ってそこで川崎励とあった
　そして彼は彼女が好きになった。
　しかし・・・告白する前に魔王に
　つかまってしまった。
好きなこと　旅
好きな食べ物　なし
嫌いな食べ物　納豆
四天王ゴーレム（地属性）
魔王クンドンでの手下の中でも四天王の1人

家族はもちろん居ない、
性格は不明（てか魔族だから性格なんてしらね）
魔族の中でも地属性の攻撃魔法は魔法クラスでも
トップになりそうな魔族、地属性なので魔法や
打撃ではあまり効かない体だけど弱点はやったり
水が弱いらしい。しかしキトやティオは水魔法を
使えばいいのにまさか・・使えないのか？っと思う
じゃあ・・キトとティオの魔法は・・何の属性の使い
なのだ？これからも出てきそうだが・・いつ出てくるか
分からない魔族です。最後だけに出てきたりするかもw
好きなこと　不明
好きな食べ物と嫌いな食べ物は魔族は食べなくても
生きれるからなし！
魔王クンドン（闇属性）
家族は魔族の手下（いくらいるのだろう・・w）
性格は不明（てか魔族だから性格なんてしらね）
魔法クラスでは闇属性の魔法を使えるやつは
数人しかいないっと言われる高度な魔法だ
まだ会ってないけどももしかしたらキト達は
すごく苦戦する敵なんでしょう。なぜならあの
魔法世界の王子様がつかまってるぐらいだから・・
もちろん好きなことは不明d
好きな食べ物と嫌いな食べ物は魔族は食べなくても
生きれるからないよw

以上です・・・

多分分かると思いますが一応魔王クンドンの四天王は
地、雷、火、水　属性で行こうかと思います。
では～m（__）m

砂漠地獄

私達は迷いの森を抜けて
魔界に行くために必要なアイテム
人魚姫の涙を取りに行くために
コナー海に向けて歩いて行きました。
そこに行くためにはこのさらさら砂漠を
抜けて、ドラゴンの山を抜けなければならない
砂漠はとても危ないし、体力的にも
きつくここを通る人はあまりいないらしい。
キトさんとティオさんは体力があるのですが、
私とことりさんは全く体力がないのでキトさんが
「ドラゴンの山の前に村がありますのでそこまで
　砂漠を通るかそこの町までに飛行船に乗りますか？」
と私たちに言われて、ことりさんが
「それはいいのですが・・飛行船は高くないのですか？
　それと・・さっき見たんだけど・・次に乗れるのは
　来週ですよ・・急がなくてはいいのですか？」
と疑問があり、それを聞いたティオさんは
「お金のことは何とかなりますが・・・無理して
　川崎さんやことりさんが倒れてはこちらも・・・」
と言われて、私はことりさんに
「ことりさん、砂漠に行くのには体力使いますけど
　私ははやくユン君を助けたいので・・・」
と言ったら、ことりさんは
「私のことなら大丈夫なので早く砂漠を通り抜けましょう」
と言い、私たちは砂漠に行くため準備をして、
出発しました・・・。だけど
やっぱり砂漠は蟻地獄など危険な場所が多くあり

キトさんやティオさんが私たちが助けてもらい
どんどん砂漠の奥に行ってきました。
しかし、そこで魔族のサソリが私たちの所に
攻撃を仕掛けていき、キトさんティオさんが
「私たちが戦いますので、川崎さまとことりさんは
　魔族に気付かれずに前に行ってください。」
と言い、キトさん達はサソリに向かって
戦っていきました。だが・・砂漠は暑いし
体力があるキトさんやティオさんは
体力が落ちながらも戦って勝ったのはいいが、
結構2人も体力が低下して・・私たちは
少し休んでまたドラゴンの山の前の町に向かった
そして町の前に来た時に
「まて！ここを通りたいなら私を倒すことだな」
と言って、現れたのは炎の体をした魔族だった。
そして、魔族は
「確かおまえらか、ゴーレムとたたかったのは
　だがしかし、俺はゴーレムより強いぞ！
　一応俺は魔王クンドン様の四天王の1人
　イフリートだ！」
と言った。私たちは体力があまりないときに
魔族とあってピンチだった。しかし、キトさん達は
「お二人は戦ってはいけません。隙をつくるので
　その時に二人は町に向かって下さい。」
と言われ、キトさんやティオさんはイフリートと
戦った。　（第7章おわり）

四天王イフリート

四天王イフリートとキトさん達の戦いをして、
キトさんは魔法戦士なので技で氷の剣を作り、
イフリートに向かったが、炎と暑さで
氷が溶けてしまい、普通の剣になってしまった。
「効かんわ！この炎に氷など軽くひねってやるわ！」
とイフリートは炎技をかけてキトさんはよけた、
そのときティオさんは水属性の技を呪文をして
「行け！タイダルウェイブ！」
と水魔法はイフリートのところに向かった
これなら炎は水に弱いから行けるっと
みんなが思っただが・・
「そんな攻撃はこのイフリート様には効かんわ！」
と呪文を唱えて、そして
「エクスプロード！」
と唱えて軽い盾をイフリートの前に盾となって
水と炎の技がぶつかり消えていった
「あはは！お前らにはこの俺様には勝てない！
　この技でお前らを倒してやる～」
と言い、呪文が終わって
「ギガフレア」
といい、大きな炎の玉がキトさん達に向かって
打たれた。そしてわたしは
「お願いです。杖さん二人を助けて・・・お願い」
と言い、杖はその言葉を聞いて大雨が降ってきて
炎はキト達の前に当たる直前に消えた。
そして、イフリートは
「くそ・・・覚えてやがれ！次こそお前らを

倒してやるからな！」
と私たちの前に姿を消した。
「大丈夫ですか？」
とことりさんが言って、キトさん達は
「川崎様ありがとうございます。また杖を使ってしまって
本当にすいませんでした。」
と言い、謝った。しかし、私は
「気にしないでくださいあと8回あるし、
あの状況で使わないとキトさん達に
危ないことになったので使ったことは後悔しません」
と笑顔で言った。そして私たちは
町に向かった。そしてついたときに私は少し
くらっと・・・体が倒れそうになって
「大丈夫ですか？」
とキトさんが体を支えてくれて
「ありがとうございます・・」
と言い私は気を失ってしまった。
そして私は風邪っていうより病に
かかってしまった。　（第8章終わり）

病・・・そして修行

「先生、川崎様は大丈夫ですか？」
とキトさんが聞いた。
「この病なら薬を調合すれば・・・
直りますよ。しかし・・作るのに
3日間かかります。それでもいいですか？」
と医師が言った。キトさんは
「病が治るなら3日間でも構いません。
よろしくお願いします。」
とキトさんは言った。そして私は目が覚めて
「キトさんティオさんことりさん迷惑を
かけてすいません・・・」
と涙を流しながら言った。キトさん達は
「気にしないで下さい、こちらが・・・
いろいろと助けてばっかりで申し訳ない
ほどです・・今病を治す薬を作っているので
3日間かかりますが、そこまでここで
ゆっくりして安静にしてください。」
とキトさんは言った。そして、私は
「ありがとうございます・・・。」
と言って。眠った。そしてキトさんは
「これから3日間修行してきますので、
ティオ、ことりさん2人は川崎様のそばに
いてあげてください。」
と言ったが、ティオさんは
「まってください。修行なら私も行きます。」
と言った。キトさんは
「しかし・・・」

と言ったとき、ティオさんは
「いつまでも川崎様の杖の力に守られるのは
いやなのです・・しかも後8回しかないのに・・
しかも、今の私の力ではとても四天王には当然
勝てないと思うので・・・だからこの3日間少しでも
力を上げて川崎様を守れる力を付けたいので
お願いします。」
と頭を下げた。そしてキトさんは
「分かった。私もティオとの気持ちは
すごく分かる。ゴーレムは硬さで負け
イフリートでは力負けをした・・・。
あと四天王が2人いるにもかかわらず、
また川崎様の杖の力で私たちを守ってまで
使ってほしくないので、よし準備していくぞ！」
と言った。そして修行の準備をしてことりや
医者に言った。
「先生、川崎様をよろしくお願いします。
ことりさん。私たちがいない間は、川崎様を
よろしくお願いします。もし、この町が魔族に
襲われたりしたら、このアイテムを使ってください。
何かあったら私たちがわかるようなアイテムなので。」
と言い、ことりさんに渡しました。そして、ことりさんは
「ありがとうございます。私は川崎さんのそばにいますね。」
と言い。キトさん達は
「ありがとうございます。では行ってまいります。」
といい二人は修行に出かけた。そして1時間後私は
目を覚ました。しかし・・キトさん達はいなく不思議に
思ったので、ことりさんに聞いた。
「キトさん達は？いないけど・・買い物に出かけたのかな？」
と私が心配して聞いたら、ことりさんは

「キトさん達は、3日間修行をしに出かけましたよ。
だから心配しないでください。キトさん達は川崎さんを
守る力を付けたい。という気持ちで修行に行っていますので、
川崎さんは今ゆっくり休んでください。」
とことりさんは笑顔で言った。私は
「分かりました。ことりさんも無理しないで
休んでくださいね。」
と言って、私は眠った。そしてことりさんは
「さて私も少しでも川崎さんやキトさん達に
力になれるように援護魔法を鍛えようかな♪」
と元気よく病院の外に出た。その頃キトとティオは
「ここから私はこちらで修行をするが、ティオは
どこで修行をするのですか？」
とキトさんはティオさんに質問をした。ティオは
「私はキトさんや町に影響しないところに行き、
巨大な魔法が使えるようにしときます。」
といい、キトさんは
「分かった。じゃあ3日後ここで集合しよう。
お互いにがんばろう。そして川崎様を守れる力を
手に入れよう！」
と言って、二人は分かれた。キトの方は
「3日間までにこのでかい岩を切らないと
あの硬い四天王ゴーレムには到底勝てないし、
イフリートには力負けするから・・・なんとしても
この岩をあまり負担かけずに切れるとよいが・・」
とキトさんは言って剣の修行をした。ティオの法は
「さて・・私は・・いつもは下級魔法中級魔法しか
使えなかったが・・・そろそろ上級魔法をマスター
しないと・・このままじゃ・・役に立たないし、
川崎様とキトさん、ことりさんにも迷惑がかかるわ。

だから・・少しでも上級魔法を使えるようにして
出来るだけ早く、唱えられればいいですが・・・。」
と心配しながら、ティオはかばんの中から分厚い本を
出した。そしてティオは
「お父様、私は川崎様、キトさん、ことりさんのために
この本を使います。私に力を貸してください。」
と言って、ティオさんは魔法を唱えた。
そして・・・3日間
「ふう・・こんなものか・・今の力では分からないが
少しでも川崎様を守れるようにはなるかな・・」
と心配をしつつ、キトはティオと待ち合わせの場所に
行った。その岩は真二つに割れていてきれいに
分かれていたティオの方は
「これなら・・・どんな相手も攻撃は通るはず・・
この技はなるべくキトさん、ことりさん、川崎様には
離れていただかないと、使えにくい技ですね・・」
と心配しながらティオもキトと待ち合わせの場所に
歩いていった。ティオのいた場所の半径１０ｍは
きれいに何にもなかった。修行前は木がいっぱい
あったのにいったい木はどこに行ったのでしょう・・。
そして待ち合わせの場所。
「ティオ修行は出来たか？俺のほうはなんとか
川崎様、ティオ、ことりさんを守れるような
力を身について、ゴーレムに勝てる自信を
持った。」
と言い、ティオも
「私も守れる力は手に入りましたが・・
上級魔法は使い方次第で皆さんが危ないかも
しれないので使うときはなるべく離れていて
くださいね。」

と報告をして、キトはわかった。と言った。
「さて・・3日間たったからそろそろ川崎様と
ことりさんが心配しているだろうから早めに
もどろう。」
と言い、二人は戻った。しかし・・戻ったときの
町の風景は変わった・・・（第9章終わり）

病・・・そして修行（後書き）

車の免許なので・・
投稿が少し遅れるときが
あるので・・すいませんが・・
なるべく早めにできるように努力します・・・。

町の異変

「これは・・どうなっているのだ？」
とキトさんがびっくりした顔をした。
「とにかく今は川崎様とことりさんを探しましょう。」
とティオさんは言った。
「ああ、そうだな・・無事でいてくれると
いいだが・・」
と心配そうにキトさん達は急いで病院に向かった。
病院に着いたとき、病院は壊されていて、
「川崎様～ことりさんどこにいますか？」
と焦りながら、病院の周りを回っていたら。
「キトさんティオさんこっちへ」
とことりさんが呼びかけて、キトさん達は
ことりさんのところに言って、質問をした。
「これはどうしたのだ？何があったか教えて
くれませんか？」
とキトさんが質問をしたら、ことりさんが
「キトさん達が帰ってくる数分前に魔王の手下が
この町に攻撃を仕掛けてきました。」
と答えた。そしてキトさんは
「なぜだ・・・」
と不思議そうにしていたとき、ことりさんは
「川崎さんなら大丈夫ですよ。今は薬を飲んで
眠っていますが・・。」
と言った。キトさん達は
「そっか・・ありがとうございます。ことりさん」
と言った。ことりさんは、
気にしないで下さい。と言って、

「川崎さんのところに行きましょう。」
とキトさん達に川崎さんの所に案内をした。
二人は私の寝ているところを見て安心したように
ほっとして、キトさんはなぜ・・町に攻撃をしたのか。
と考えていたら、ことりさんは
「多分・・私たちの進行の邪魔をしているかと思います。」
といった。キトさんは
「もしかして、攻撃したのはあの四天王のイフリートか
ゴーレムか？」
と聞いたが、ことりさんは
「分かりません・・・。しかし・・四天王なら町を
破壊するよりもっと違うことに手を出すと思いますが・・」
と言った。キトさん達は
「そっか・・・。」
といった。そして私は目が覚めたときに、
「お帰りなさい」
と笑顔で言った。キトさん達は
「ただいまです。川崎様。お体は大丈夫ですか？」
と聞いたら、私は
「医者からはもう大丈夫だけど後念のために
2日間は休んどきなさいといわれました。」
と言ったら。ティオさんは
「そうですか。では二日後に旅に出ましょう。」
と言って、キトさんは
「ああ、そうだな。俺たちも2日間ぐらいは
休まないとまた川崎様に迷惑かけるからね」
と言った。そして2日間は私はゆっくり休み、
ことりさんは少し援護魔法を強化したい。と
言って。修行にキトさんは町の修復をするために
町の人に協力をした。ティオさんは町の人じゃ

修復が大変なので、今までの報告をするために
一旦王様がいる町に戻る。ということでテレポートを
使って戻った。そして・・・2日後
「川崎様、ことりさん準備はよろしいですか？」
とティオさんが言った。私は
「うん、大丈夫です。ごめんね・・私が病に
かからなければ早めに出発いけたのに・・」
と言った。キトさんは
「気にしないでください。病は突然と来るものですから
仕方ありません。しかも私たちが川崎様を
無理させたことには変わりないのですから・・・」
と言って、町の人がキトさんのところに来て
「あの～すいません・・・」
と言った。キトさんは
「はい、何でしょう？」
と答えました。町の人が
「　あなたは剣を使いなされるのでもしよかったら
これを・・・」
と渡してくれた剣をキトさんが見たとき、
「これは・・・師匠の・・・ドラゴンの剣だ・・
なぜ・・ここにあるのだ・・・」
と町の人に聞いた。そして1人の男性が言った。
「この剣の持ち主はもう・・この世にはいないのです。
前にこの町が魔族の四天王らしき魔族が大勢来て、
この町に通りかかった人が1人で魔族と戦って
魔族は全部倒したのですが・・・しかし、その人は
大怪我をされて・・治したいのですが・・もう・・
遅く・・・そのときに彼が・・もし剣使いの人が来たら
これを渡してくれ。と言って、なくなりました・・・」
と言っていました。だからあなたにこの剣を・・・

「ありがとうございます。大切に使わせていただきます。
師匠あなたはやっぱり優しい人だ・・私も師匠みたいに
ならないといけないですね・・・。」
と涙がでそうになって、私は、キトさんに
「やさしい人だったんだね。」
と聞いた。キトさんは
「ええ・・いつもは特訓のときなどは厳しい方でしたが
終わったときや修行がないときは本当にやさしくしてくれて・・
私は師匠をお父さんみたいな方でしたよ・・
しかも・・私が王子様の使いになったときは最初に
喜んでくれたし・・・本当にうれしかった・・・でも
その後師匠は私に何にも言わずに町から姿を消してしまって
私は・・今師匠にやっと会えてうれしい気持ちです。」
と言ってくれた。私たちはそろそろ準備できたので
町を出ようとしたときティオさんが待ちの方たちに
「あと数日後私たちの町から町の修復と町の護衛のために
数名来ますので、安心してください。」
と言った。そして町の人が
「ありがとうございます～。あなたたちも無理しないで
ください・・。そして無事にまた私たちの町に
いらしてください。」
と言った。そして私たちはお礼を言って、私たちは
ドラゴンの山に向かった。　（第１０章終わり）

ドラゴンの山

「ここが・・・ドラゴンの山ですか？」
と私は質問をした。キトさんが質問に答えてくれた。
「そうです。あそこは昔ドラゴンが結構いたんですが・・
魔王クンドンが現れてから、少しずつドラゴンたちが
いなくなってもう今ではドラゴンがいなくなってしまったが
名前はそのままにしているらしいですね。」
と言った。私はありがとう。と笑顔で言いました。
「しかし・・・ここもドラゴンがいなくなったと思いますが、
もしかしたら・・まだドラゴンがいるかもしれないし、
魔族が隠れているかもしれないので気をつけてください。」
とティオさんは言いました。私とことりさんは
「分かりました。気をつけます。」
と言って、私たちは歩き進みました。
歩いていると1匹のドラゴンが私たちの前に
現れて、キトさんとティオさんは攻撃準備をした時、
「まってください～このドラゴンは襲わないので
攻撃をやめてください。」
と1人の男の子が言ったので、キトさんとティオさんは
攻撃準備をやめた時、男の子が
「ありがとうございます。とても助かりました。」
と言った。そしてキトさんは
「いまだにこのドラゴンの山にドラゴンがいたなんて
しかも人を襲わないということは・・・・
キミはドラゴン使いなのかい？」
と聞いたら、私はティオさんに
「ドラゴン使いって・・」
と不思議そうに聞いてみたら、ティオさんが

「ええ。ドラゴン使いは昔ドラゴンは人に襲うことが
多くそのドラゴンを操れるっということ
言えばいいのかしら。私もあまり詳しく教えてもらって
ないのでなんともいえませんがドラゴン使いとドラゴンは
仲良しって言えばいいでしょうね。」
と答えてくれた。男の子は
「そうです。昔は・・・人がドラゴンを嫌って
ドラゴンは人を嫌っていましたので・・・
仲が悪かったのですが、先祖がドラゴンを
助けることによって、ドラゴンも少しずつ
人を信じることによってドラゴンを
おとなしくさせることが出来るのです。
しかし・・魔族が現れてから・・・もう
ここにいるドラゴンはこのドラゴン
しかいないので、魔族が現れないところに
隠れながら、育てているのです・・・。」
と言った。私は
「ありがとうございます。話をしてくださって
どうもありがとうございました。」
と言って、男の子が
「いえいえ、こちらこそ・・・このドラゴンに
攻撃しなくてとても感謝します。本当に
ありがとうございました。」
と言って。また会いましょう。と言って、
私たちの前から離れていった。そして私たちは
山を降りる前に私たちの前に雷が落とされた。
「きゃー」
と私は・・びっくりして、キトさんは
「川崎様大丈夫ですか？」
と心配しながら、

「誰だ！どこに隠れている！」
と叫んだ。そして現れたのは、
「私は魔王クンドン様の四天王の１人
雷のライオウだ。四天王のイフリートと
ゴーレムから話は聞いたぞ・・お前らは
つかまっている、あの王子様を助けに
いくんだよな。しかし、クンドン様の
生贄となるやつを簡単に返すことは
できんのだ。だからお前らは今後
私たち四天王から戦うことになるぞ
それでもいいのか？」
と言った。私は
「ユン君は・・・いえ王子さまは無事なのですか？」
と言った。ライオウは
「ああ・・・死んだらいけないからな
一応無事とは伝えとくわ、しかし
イフリートやゴーレムが言っていたんだが、
お前はこの魔法世界の住民じゃないだよな
人間世界から来た子供か？」
と聞いてきて、私は
「ええ・・・そうよ・・」
と言った。
「そっか、だがしかし！ゴーレムやイフリートが
人間世界の子供に負けるなんと恥ずかしいわ。
だから私はお前らを足止めしながら、
クンドン様の魔法の完成の時間を作るために
今後も邪魔していくだろう。しかも、
イフリートとゴーレムは前に戦ったより完全に
強くなっているぞ。では今回はこの
ライオウ様と相手をしてもらう、

しかし、全力を出すとお前らが負けるからの
だから半分の力で戦うとするかの。準備は
いいか？」
と言ったときに、キトさんは
「なめるのではないですよ。私たちだって
修行を重ねてお前らを倒してやる。」
と攻撃準備をした。　（第１１章終わり）

四天王ライオウ

「いくぞ！」
とライオウは魔法を唱えた。しかも普段は
唱えると数秒かかるはずだが、すぐに技が出た
しかも空から雷が鳴って、私たちのところに落ちてきた
ティオさんは防御魔法を唱え、私たちのところにバリアを
張った。何とか防いだが・・・ティオさんは
「これで半分の力か・・強力の魔法だ・・・しかし
私たちも負けていられない。ことりさん今回は
あなたの援護魔法をお願いします。川崎様は私のそばに
いてください。キトさん今回私は守るのに精一杯なので
攻撃には入れないので・・すいません。」
と言った。キトさんは
「いや、大丈夫だ。ティオは川崎様とことりさんを
守ってくれ、ことりさんすまんが・・・援護魔法できるとき
でいいからお願いします。」
と言った。ことりさんは
「ええ。任してください。」
と笑顔で援護魔法を唱えた。そのころ、
「あの子達大丈夫かな？ね。ワイバーン」
あのドラゴンの名前はワイバーンと呼んでた。
「そかそか、ワイバーンもあの子達が心配だね。」
と言ったときに突然雷が鳴った。そして
「どうしたのだ・・今日は晴れるはずなのに。」
と外を出たら一部だけ雷がなっていた。そして、
「もしかして・・・あの子達魔族と戦ってるのか？」
と心配になった。そのときワイバーンが
外に出ようとしていたので、男の子が

「そか・・・お前もドラゴンだからな・・
一緒に戦いたいのか？」
と言った。ワイバーンは話せないので、
鳴き声を出して羽を広げた。そして男の子が
「分かった・・・お前はドラゴンたちを殺した、
あの魔族を倒そう！しかし・・お前をしなせることは
できないからね、危なかったらお前だけでも逃げるのだよ。
俺は大丈夫だから、だって俺はお前の使いだからね。
なんとかなるよ。」
と言い、男の子はワイバーンの背中に乗って、雷が激しい
ところに行った。私たちは、ライオウと戦い中、
「おらおら～どうした～もう降参か？」
とライオウは笑いながら攻撃を仕掛けてきた。
「ことりさんむりはしないで、隙が出来たとき、
大技をかけるから。」
と言った。ことりさんは
「分かりました。ですが・・気をつけてくださいね・・」
と言ったとき、大きな火の玉がライオウのところに撃ってきた。
そしてライオウはその火の玉を直撃くらって、
「誰だ！どこにいる！」
と叫んだとき、あの男の子が
「今です。」
と言った、キトさんはライオウに向かって走って、
近くまで言って、大技をかけた。
「いけ！オメガクラッシュ！」
と技をかけてライオウに直撃をした。
「はあはあ・・やったぞ・・・」
と言った瞬間、
「あぶなかったぜ・・・」
とライオウは言った。しかし

「くそ・・この技は本当に直に食らったら
死んでたな危ない。だが・・まさか左上を
きられるほどの威力か・・恐ろしいやつめ、
ここは一旦引くか、しかし、あのドラゴンは
殺さないとな。邪魔をした罰だ！」
と言って、ライオウは技を唱えた。
キトさんは、
「　いかん・・・逃げろ！ライオウはまだ半分の力も
出してない。逃げるんだ！」
と言った。しかしライオウは
「もう遅い。お前らはまたいつかまた会おう。わはは」
とライオウは消えた。そのとき大きな雷がワイバーンの
所に落ちてきてワイバーンは男の子を振り落とし、
直で受けて落ちていった。男の子はティオさんの魔法で
無事だったが・・ワイバーンは死にかけていた。
「なぜ・・お前は・・俺を助けたのだ・・・」
と言って、ワイバーンは声を鳴いて、私は
「多分あなたを守りたかったんじゃないかな？
だって・・ドラゴンは自分しかいないし・・
それでもずーと付き合ってくれてうれしく
だから・・助けたいと思い自分を捨てて
あなたを助けたんじゃないかな。」
と言った。男の子は
「ばか・・・それはお前が好きだったんだよ・・・
だから・・死ぬな・・・生きてくれよ・・・」
と涙が止まらない男の子を見て私は、杖に願って
「杖さんお願い、このドラゴンさんの傷を癒して・・」
と言って杖は答えてくれた。そしてドラゴンの傷は治り、
ドラゴンは眠った。で心配したティオさんは、
ドラゴンの心臓を耳を当てて

「大丈夫ですね・・疲れていて眠っています。」
と言って、男の子は私に
「本当にありがとうございます・・・なんとお礼をしたら
いいでしょう・・・本当にありがとうございました。」
と言った。私は、
「いえいえ・・私は何にもしてないですよ・・・
この杖さんが答えてくれたので・・・お礼なら
この杖さんに。」
と笑顔で言った。男の子は杖にありがとう。と
言った。キトさんとティオさんは
「アト7回ですね・・」
と言って、男の子は不思議そうに
「7回？」
と不思議そうにきいたけど、
「気にしないで」
と返した。そして、私達は魔王に捕まっている
ユン君を助けるために行く準備をして、私は
「がんばってください。応援しますね。」
と言って、男の子は
「魔族と戦うならこれをもってきてください。
これは対魔族用に作られている剣です。私には
とても使えないのでどうぞ・・」
とキトさんに渡してくれて、
「ありがとうございます。大切に使わせいただきます。」
と言った。男の子は
「いえいえ・・しかし、この剣は使い方が難しいのが難点と
威力が高いので使うときは気をつけてください、先祖から
聞いたお話ではこの剣が魔族と戦えるのは5回だけらしいので」
と言った。キトさんはわかった。と言って御礼をした。
私は男の子に

「ありがとうね～また会えるといいね。」
と言って、私は手を振って私たちは旅を続けた。（第１２章終わり）

過去話

町に着いた私たちは次のアイテム人魚姫の涙を
取りに行くためにコナー海に向かうために、
準備をしていて、キトさん達は
「少し時間がかかりますのでここで休んでいて
下さい。戻ってきたら出発しましょう。」
と言って、2人は買い物に出かけた。
ことりさんは、私にユン君の出会いと
ことりさんと会う前の話を聞きたい。
と言われたのでそれまでの話をした。
そして私もなぜ、ことりさんが迷いの森の
中に住んでいたのかを聞いてみた。
そして、ことりさんは話してくれた。
「歌姫族って知ってる？」
と聞いたので私は
「すいません・・・この世界に来たのは
初めてなので知らなくてすいません。」
と言った。ことりさんは
「いえいえ。気にしないで下さい。簡単に
言えば・・そのままの意味なんだよね。
歌を歌う族。つまり歌で魔法が使える
族なんですよ。しかし・・それを利用と
する魔法使いがいましてね・・私が生まれる
前までは普通の歌姫村って言うところに
いたのですが・・・だんだんと私たち歌姫の魔法に
ひかれて、それを使いたい。研究したい魔法使いが
私たちの町を襲ったのです・・・。だから私の両親は
生まれたばっかりの私を連れて迷いの森まで逃げてきて

その迷いの森で私は育てられたのです。しかし・・私が
8歳のときに買い物に出かけて帰ってきたときに魔族に
襲われて・・・死んでしまったのです・・・・。」
その話を聞いてしまった私は・・・
「つらい思い出でごめんなさい・・」
と言った。ことりさんは
「いえいえ。気にしないで下さい。でも、川崎さんたちに
会ったときにティオさんみたいな魔法使いがいたときは
少し怖がっていたんですが・・・しかし、
いい魔法使いさんもいたことですごく安心しています。
だから私も、少しでも川崎さんとキトさんティオさんの
お役に立てればいいなぁ～。と思います。だから今の
思い出を無駄にはしたくないのです。」
と言った。そして・・・ことりさんは少し質問をした。
「一応、私が歌姫族。ということは多分キトさんたちには
もう分かっているので、大丈夫と思いますが・・・川崎さん
もし、王子様が助かったら川崎さんもこの世界で住むのですか？」
と聞かれた。そして私は、
「今は・・・分かりません。なぜなら今はユン君を助けたい
っという気持ちでいっぱいなのです。だけど・・・
もし・・ユン君が助けて私が住む場所に戻れたら
その時は考えますね・・・だけど・・今私は
ことりさんやキトさんティオさんとの
旅の思い出、ユン君との出会いの思い出を
大事にしていきたいです。」
と言ったとき、キトさん達が戻ってきて、
「すいません。遅れました。でわ行きましょうか」
といって私たちは
「分かりました。行きましょう。」
と言って、私たちはコナー海に向かって進んだ

【魔界】
「う・・・ここは・・・」
とユンが気づいたとき
「目を覚ましたか、いかかでしょうか？王子様
ふふふ・・・」
と笑いながら行った。そしてユンは
「お・・お前が・・魔王クンドンだな！」
と言った。そして魔王クンドンは
「そうだ！私が魔王クンドン様だ！」
と言った。そしてユンは
「なぜ・・・うちをさらった。そして何が
目的なのだ！」
と言った。そしてクンドンは
「今の私の魔力ではこの魔法世界と人間世界を
征服できんのだ・・だがな・・お前の魔力を
吸収すればその魔力で２つの世界を我が物に
できるのだよ。わはは」
と言った。しかしクンドンは
「あと５ヶ月でお前の魔力を吸収できる儀式が
できるのだが・・しかし・・邪魔なものがいての
名前は確か・・・３人いて１人目、２人目はお前の
使い魔だろう。３人目は確か川崎励だったかな？
確か人間世界から来た軟弱な人間だがしかし・・
うちの四天王の中のゴーレム、イフリート、ライオウから
あの娘の杖の力は強力な力があって歯が立たないっと
言っていたな。しかし・・・このまま邪魔をされてると
こちらも困るし、後は四天王の１人メディウスが
人魚姫の涙のアイテムを阻止すればいいのだが・・
多分あの小娘が邪魔をするのだろう・・だから
いつでも魔界に来たときのために面白いものを

準備しようかのわはは！そしてみんなが無様な
姿をお前が見てこの魔法世界と人間世界を
我が物にするときの姿を見てみたいものだな」
と言って、クンドンは姿を消した。そしてユンは
「励が・・この世界に来ているだと・・・
無事でいてくれ・・お前が無事だと俺も大丈夫
だから・・無事で会いたい・・しかし・・・
励お前は・・ここに着ちゃいけない・・
クンドンの力は多分うちの魔力でも勝てない
相手だから・・頼む・・こないでくれ・・・」
と願いながらユンは涙を流した。　（第１３章おわり）

人魚姫の涙

「ここが・・海なのですね。」
とことりさんが言ったとき私は
「ことりさん海はじめてみたの？」
と聞いたらことりさんは、
「はい、初めてですね。しかしきれいですね～」
と驚いた顔でしたが、すごく喜んでる姿でことりさんは
「人間の世界でもこんなきれいな海ありますか？」
と聞いた。そして私は
「うん、今のコナー海みたいな海はたくさんあるよ。」
と言った。キトさんは
「このコナー海のどこかに人魚姫の涙のアイテムが
あるはずなんですが・・・どこにあるのか私にも
わからないので・・どうしますか・・」
と言った瞬間突然海の波が激しくなり波が
私たちのところに波が来てティオさんは
「皆さん少し離れてください。」
と言って私たちは少しはなれて、ティオさんは
魔法を唱えました。
「ウインドカッタ！」
と唱えたとき風が波を切るように二つに別れ
私たちは波にのみこまずに無事だった。
その時、どこからか声が聞こえた。
「ほお～私の技を軽く術を破るやつが
いたなんて驚きだわ」
と言ったとき姿を現した。そして
「私は四天王の1人水の使いフェンリル
確か・・・お前らだったか？イフリート達に

お世話になったのは？」
と聞いた。キトさんは
「ああ。そうだ・・」
と言った。そしてフェンリルは
「そかそか。だがうちはいきなり攻撃を仕掛けるのは
好きではないのだ。だからお前たちと戦うから
3日後またここで決闘をしないか？」
と言った。キトさんは
「お前に付き合う必要はない」
と言ったが、フェンリルは
「お前らが探している、人魚姫の涙は私が持っている。と
言ったらどうする？」
と言った。そしてキトさんは
「なんだと・・もしかしてお前がもう人魚姫の涙を
持っているのか？」
と聞いた。フェンリルは
「ああ、うちが持っているさ。だから、決闘で私に
勝ったら人魚姫の涙を渡そうじゃないか。だがしかし
条件があるがいいか？」
と言った。そしてキトさんは
「条件はなんだ・・・」
と言った。そしてフェンリルは
「条件は2つある1つ目はあの小娘の援護魔法は
使わないこと。こちらが不利になるからの。んで
もう1つは必ずもう1人の人間の小娘の力を
使ってもらう。なぜならこの人間の小娘の力は
とても魔力が高い。と聞かされてな私も試してみたい
しかし連発使われると困るから1回だけの条件だが
条件にのるか？のらないか？どうする？」
と聞いたが、キトさんは

「そんな条件のめるか！」
と言ったが、私は
「私はその条件にのります。」
と言った。キトさんは
「しかし・・・川崎様あと7回しか使えないのですが・・」
と言ったが、私はフェンリルに聞いた。
「もし、決闘で私とキトさんとティオさんで戦う中に
1回でも魔法を使えば条件はｏｋですか？」
と聞いた。フェンリルは
「ああ、そうだ。私の条件にのった上で私がまければ
お前らにこの人魚姫の涙を渡そう。だが・・これだけ
言っとくが私も本気は出さないからな。本気を出すときは
魔界に来たときだ、クンドン様の魔法の呪文を完成まで
あと2ヶ月それまでに私たちが本気を出したらクンドン様が
つまらなくなるからの、だからお前らは強くなった
状態で倒すのが楽しみなのだ。あはは。じゃあ3日後
場所はこの場所でなでわ。」
と言って、フェンリルは姿を消した。そしてキトさんは
「本当によかったのですか？あんな条件で・・・」
と聞いた。私は
「私なら大丈夫です。3日間私も体力つくりをしたいので・・
もし・・無理じゃなければ・・体力つくりの特訓を・・
お願いしたいのですが・・・いいでしょうか？」
と聞いた。キトさんは
「分かりました・・・しかし、無理だけはしないでくださいね。」
と言った。ことりさんは
「今回は戦いに参加できませんが・・・無理だけはしないように
お願いします。」
と言った。ティオさんは
「では・・私は3日間魔法の特訓をするので・・

キトさん川崎様をよろしくお願いします。」
と言った。キトさんは
「ああ、分かった。でも無理だけはするなよ。」
と言った。ティオさんは
「はい、分かりました。気をつけます。では」
と言いティオさんは姿を消した。キトさんは
「さて・・私たちも修行しましょうか・・
まだいきなりハードの修行は無理なので
あそこの山を少しランニングで鍛えましょう。」
といい、私は
「はい、わかりました。」
と言った。ことりさんは
「　私も付き合います。」
と言って、キトさんは
「分かった。ことりさんも無理はしないように
川崎さんもきつくなったら言ってくださいね。」
と言った。私とことりさんは
「わかりました。」
と言って私とキトさんとことりさんは
山に向かってランニングをした。
そのころティオさんは
「ライトニング！」
と魔法の技をかけていましたが・・・。
うまくいかず、
「くそ・・私はもっとキトさんやことりさん
川崎様の役に立てないのか・・・」
と言ったとき、1人の男性が近づき
「もっと力を抜いたらいいでは？」
と言った。そしてティオは
「誰だ？」

と振り返ったらティオさんは
「師匠・・どうしてここに？」
と言った。それはティオさんが魔法師に
なる前に魔法を教えてくれた人だった。
「ここは私の修行場なのだよ。修行に来たときに
おまえがいてびっくりしたよ。」
と言った。そして、ティオさんは
「師匠お願いがあります。私を一から鍛えなおして
下さい。お願いします。」
と土下座してお願いをした。そして師匠は
「お前の気持ちはよく分かる。確か3日後に
四天王フェンリルと戦うのだろう？わしで
よかったら力を貸すぞ？」
と言って、ティオは
「ありがとうございます。師匠。よろしくお願いします。」
と言った。私、キトさん、ことりさんは
3日間体力作り。ティオさんは師匠と一からの魔法の特訓を
した。そして3日後師匠は
「よくがんばったの。これなら四天王フェンリルと戦える
だろう。わしもお前らが魔界に行くときに協力するから
それまでもっと力を付けるのじゃよ？」
と言った。そしてティオは
「師匠ありがとうございます。またよろしくお願いします。」
と言った。そして私たちは四天王フェンリルが現れた場所に
向かって歩いた。　（第１４章終わり）

四天王フェンリル

「よくきたな、ほめてやるぞ！」
とフェンリルが言った。そして
「まずはお前ら二人から試したい。小娘は後で
試すから待っとけ。では行くぞ！」
といいながらフェンリルは魔法の呪文を唱えた。
そして水属性の魔法がキトさんとティオさんに
向けて、キトさんは
「ティオ援護を頼む。」
と言って、キトさんは剣を大きく振り
「雷神剣！」
と言い、剣が振り下ろすと雷がなり
水と雷が打つかって消えた。そして
「ほお～やるじゃん」
とフェンリルは言った。そのとき
「ウインドカッター！」
とティオさんが唱えてフェンリルのところに
向かってきたが、フェンリルは軽くよけた。
「なんて速さだ・・・」
とティオさんが言って、フェンリルは
「惜しかったな。大体お前らの力は把握してきた。
そろそろ半分の力を出そうかの」
と言った。そしてフェンリルは呪文を唱えた
「これはまだ本気を出してないだがなだから
お前らにこの技をプレゼントしよう。
行くぞ！ふぶき！」
と言って、よく晴れた天気がいきなり、
吹雪となってキトさんたちに襲ってきた。

「何・・・天気を操る呪文だと・・・」
とキトさんは言った。フェンリルは
「そうだ。我が四天王は自然を操る魔法を
習得をしているのだ。まず私は天気を吹雪に
変える呪文、ゴーレムは土を操る呪文、
イフリートは火を操る呪文、ライオウは
天気を雷として操る呪文を習得しているのだ。
だが、お前ら魔法世界の住民はそれをまだ使えない
らしいだがな。」
と言った。そして吹雪がキトさんとティオさんのところに
向かって突然雪が氷となり攻撃を仕掛けてきた。
「なんだと・・まさかそこまでの呪文だと・・」
とキトさんが言い、ティオさんがここは任せて、
と言って、呪文をかけたそしてティオさんは
「キトさん私のそばにいてくださいね。
ファイアートルネード！」
と呪文をといてキトさんたちの周りに
炎の渦が回って氷は水になり蒸発をした。
「ほお～やるじゃない。だが・・・これはどうだ？」
と言って、氷がひとつに固まりでかい塊で
ファイアートルネードに向かって攻撃をした。
最初は全体が氷から水になったが耐えらなくなり。
そのまま氷の塊がキトさんたちのほうに攻撃をした。
「まさか・・私のファイアートルネードが・・
簡単に破られるなんて・・・」
とティオさんは言った。そしてそのままでかい氷の塊は
キトさんたちに向けられ私は危ないと思い。
「杖さんお願いします。あのでかい氷の塊を壊して！」
と言ったら、杖が答えてくれて、空からでかい隕石が
何個も振ってきてそのうちの１つがでかい氷の塊とぶつかって

粉砕した。そして何個かはフェンリルのほうに向かって
攻撃をした。そしてフェンリルは
「まさか・・・あれは・・クンドン様の技のメテオじゃないか・・
　あの小娘の力はクンドン様の技も使えるのか。
だが・・この氷の盾ならどうだ！」
といいでかい盾がフェンリルの前に出されたが、隕石1つや2つは
壊れないが、同じところを狙っているのでだんだんと氷にひびがでて
氷のたては割れ、そのままフェンリルのところに攻撃をした。
そしてキトさんたちは
「やったのか・・・」
と言ったとき、
「っく・・・なかなかやるな小娘、まさかクンドン様のメテオを
　使うとは・・・正直俺もあせったわ・・・だが・・最大の力を
　使ってもこの傷か・・さすがだ。だが・・・今から本気を出したら
　お前らをすぐに倒してしまうのだろう。だからここは
　一旦引くかの。まあ。お前らの勝ちだわ。だからこれを
　やろう。だが・・あと2ヶ月でクンドン様の最強の魔法が
　完成なされる。そのときにまた会ったときはわれわれ
　四天王を本気でお前らを倒すからな。容赦はしないからな。
　では楽しみに待っているぞ！わはは」
と言って、フェンリルは人魚姫の涙を私に渡して姿を消した。
「大丈夫ですか？」
と私はキトさんティオさんに言った。
「私たちは大丈夫です。ありがとうございました。」
とティオさんが言った。キトさんは
「まだ・・力が足りなかった・・・あと2ヶ月までに
　修行をして力をあげないと・・四天王には勝てない・・」
と落ち込んでいた。ことりさんは
「キトさんなら大丈夫ですよ。だってキトさんだって
　まだ本気を出してないのでは？」

と言った。ティオさんは
「よくお分かりですね・・さすがことりさん」
と言って、私は
「え・・・どういう意味？」
とティオさんに言った。そして
「キトさんは魔法の世界の中でも上位クラスの魔法剣士
なので・・リミッターをはずしてないのです。なぜなら
リミッターをはずすと後からの痛みが一気に来ますので
非常に危険なので危ないときだけの許しが出たので・・
リミッターをはずしたキトさんなら四天王なら倒せると
思いますよ。」
とティオさんが言って、キトさんは
「本当はリミッターを使いたくないだが。なぜなら
リミッターをはずすと膨大な力を使うので回りに被害が
あってもおかしくない、だから今まで使わないように
してきたのだが・・・しかし・・今回でわかった・・
次やるときは・・リミッターをはずさないと・・
多分・・いや絶対に四天王が勝てない・・・」
と言った。私はそれを聞いて
「キトさん無理だけはしないでください。無理をしたら
ユン君、いえ王子様も悲しむことになるから・・」
と言った。キトさんは
「分かりました。無理はしません。だが・・川崎様も
無理をしないでくださいね。」
と言った、私は
「分かりました。」
と言って少し休んでから、私たちは魔界に行くための
場所に向かって歩いて行った。　（第１５章終わり）

現在のキャラ紹介２（前書き）

現在のキャラ紹介１の続きなので

見たくない方は

スルーで・・・

現在のキャラ紹介２

ライオウ（雷属性）
魔王クンドンの手下の中でも四天王の１人
雷を操ることができる。
本気で戦ってみたい相手　魔王クンドン様
好きな言葉　さあ～勝負だ！
嫌いな言葉　負けたとき・・・など

フェンリル（水属性）
魔王クンドンの手下の中でも四天王の１人
水、氷を操ることができる。
本気で戦ってみたい相手　キト
好きな言葉　ほお～やるじゃないか
嫌いな言葉　ない

以上・・・・
今現在中盤になりました・・・・。
あまり文章が得意ではない山ですが・・・

みなさん・・面白いかな？

思いついたことを書きだしてるだけなので

何か誤字脱字などあったりここをもう少し

訂正したほうがいいとかあったらよろしくお願いします。

感想もあったら書いてくださるとうれしいかな？

さて・・・次　（いつになるだろうか・・・）

次からは魔界についた川崎、キト、ティオ、ことりの４人

そこに・・ティオさんの師匠が現れ、５人で魔界に行き

ユン王子様を助けるために行きますが・・・・

どうなるのでしょう・・・そしてユン王子は無事なのか？

それと魔王クンドンは魔法を完成をしてしまうのか？！

では・・・

いざ！魔界へ！

四天王フェンリルとたたかってもうすぐで
２か月になる。私たちはユン君を助けるために
魔界行くところに向かって歩いてキトさん達は
その間に修行などをして進みました。
そして・・・
「ここが・・・魔界に行く扉なのですか？」
と私はティオさんに聞いた。ティオさんは
「ええ・・・そうよここから魔界に行くために
　私たちは再生の木の枝と人魚姫の涙の２つの
　アイテムを手に入れないといけなかったの」
と言った。キトさんは
「みんな準備はいいか？これから・・大変になるが
　大丈夫？川崎様、ことりさん」
とキトさんが聞いてきた。私とことりさんは
「大丈夫です！」
と言った。その時。
「わしも一緒に行ってもいいかな？」
と聞いてキトさんは振り返って
「誰ですか？」
と答えた。そしてティオさんは
「師匠来てくれたのですね！」
と言った。そしてティオさんの師匠さんは
「もちろんさ。どうだ？ティオあのフェンリル後
　お前は強くなったのかい？」
と聞いて、ティオさんは
「修行はしましたが・・・いまだに勝てるか
　自分にもわかりません。しかし・・・

全力でぶつかるだけです。」
と言った。そしてティオさんの師匠さんは
「そかそか、キトさんわしも仲間に入れてくれませんか？」
と言った。キトさんは
「ティオさんの師匠さんなら大歓迎です。こちらこそ
よろしくお願いします。」
と言った。そして私たちは行く準備をした。
「では、そろそろ行きますね。」
と言ってキトさんは２つのアイテムを使って
ワープをした。そして魔界について私は
「ここが・・・魔界ですね・・・なんか暗い・・・」
と言った。ことりさんは
「そうですね・・・。」
と言って、キトさんは
「ここからは前みたいに魔族が少ないわけではない。
危なかったらなるべく私たちの近くにいてください。
そして川崎様はなるべく杖を使わないようにしてください。
お願いします。ことりさんはもしよかったら、援護魔法を
してもらえると助かります。」
と言った。私とことりさんは
「分かりました。」
と言った。そして魔王クンドンの城の中に入る前に声がした。
「やっときたな、もうすぐで私の最強の魔法が完成する。
その前にお前らが私を倒すか、もしくは私が完成するか
競争をしようじゃないか。わはは。」
と言って声が聞こえなくなった。
キトさんは
「急いで行きましょう。」
と言って私たちは、中に入った。
最初はやっぱり魔族が待機されていて、

私たちに遅いかかってきた。キトさんは
「みんな、ここで無駄な体力を使ってはいけないから
なるべく体力、魔力を消費少なくて進むぞ！」
と言い、キトさんは軽い技をかけながら私たちは
奥に進みました。そして・・・目の前に立ったのは
土の部屋と書いてあった。キトさんは
「土の部屋ってことは・・・あそこの中には四天王
ゴーレムがいるはずだ・・ここから本気を出さないと
倒せない相手になるだろう・・・では行くぞ！」
と言い私たちは中に入って行った。　（第１６章終わり）

四天王ゴーレム再び

「よし、みんな行くぞ！」
とキトさんが言ってドアを開けた。
そして・・・中に入ったらゴーレムが
「待ってたぞ！そしてお前らが俺とたたかうのは
これで最後だ！本気を出してお前らをつぶす。」
と言った。キトさんは
「お前に時間を使うのはきびしい、さっさと
終わらしてやる！」
と言い、キトさんは
「ティオ、師匠さんは自分が攻撃をしてるときに
隙があったら魔法攻撃をよろしくお願いします。
ことりさんは援護魔法をお願いします。川崎様は
無理だけはしないようにしてください。」
と言って私たちは、
「分かりました。」
と言った。そしてキトさんは行くぞ！と言って
ゴーレムに向かった。そしてゴーレムは
「さてまずは、どれだけ強くなったのかな
ストーンブラスト！」
と唱えたとき地面が割れ、土の塊が私たちのところに
向かってきて、ティオさんは
「キトさんはそのまま攻撃をしてここは私に任せて！」
と言った。キトさんは
「よろしく頼むぞ！ティオ」
と言って、ゴーレムのストーンブラストをよけながら
ゴーレムに向かったそして、ティオさんは
「ウインドカッター！」

と唱えストーンブラストとウインドカッターがぶつかって
消滅をした。そしてゴーレムは
「ほおやるじゃないかっと」
言った。そしてことりさんは援護魔法を唱え
「チャージ！」
と唱え今です！と言いキトさんはありがとうことりさん。と
言ってゴーレムに攻撃を仕掛け
「岩砕剣！」
と言いゴーレムに攻撃をした。
そして・・キトさんは
「やったか？」
と言ったとき、ゴーレムが
「っふ・・強くなったな・・だが！まだ効かんわ！」
と言ってゴーレムは呪文を唱えた。
「この技は俺もあまり使いたくなかったがなしかし
このままやると負けるからのでは行くぞ！
アドプレッシャー！」
と唱えた。そしてまず土の塊が浮いて粉々になった
土が私たちの前に襲いかかったそしてキトさんは
「みんなを守ってくれ！粋護陣」
と言ってバリアーをはった。そして攻撃後ゴーレムが
「ほお。やるじゃないか・・この技を防ぎるやつが
いたとは・・恐るべきだ・・・」
と言った。そしてキトさんは剣を見た。そして剣は
折れていた・・・。
「なんという力だ・・・だが・・そろそろ終わらせないと
やばいな。」
と言ってあの子供からもらった剣を出した。
「今こそ！この剣の力を貸してもらう。行くぞ！」
と言いゴーレムに向かった。そしてキトさんは

「鳳凰天駆！いけーーー！」
とゴーレムに向かった。そしてゴーレムは
「なんだ・・なんだ・・あの力は・・・」
と言い防御をした。そしてぶつかり、ぶつかった後
キトさんは
「はあはあ・・やったか・・？」
と言った。そしてゴーレムは・・
「っく・・・やばい・・だが・・俺もそろそろ負けを
認めるしかないか・・しかし・・この技でわしは
消える！お前らと相打ちじゃ！だいばくはつ！」
と唱えた。ティオさんは
「あれは・・禁止の魔法・・・やばい・・バリアで
間に合うのか・・」
と言った。私は周りを見た。
「キトさんは結構疲れてるしティオさんも魔力が
少し減ってる。だから私は・・・お願い杖さん
みんなを守って！」
と言った。そして杖が答えてくれた。強力なバリアを
みんなの前に出てだいばくはつを防いだ。
キトさんは私に
「ありがとうございます・・。川崎様」
と言った。少し休んでティオさんの師匠が
「次はわしが行こう。お前達は体力の消費があるから
少し休んでいるといい。」
と言った。そしてティオさんは
「師匠私はまだいけます。一緒にお願いします。」
と言った。師匠さんは
「分かった。」
と言った。そして少し休憩して次の炎の部屋と
書いてあった。

「次は・・イフリートかティオ、師匠さん
無理はしないでください。」
と言ってティオさん、師匠さんは
「分かりました。」
と言って。私たちはドアを開けた。　（第17章終わり）

四天王イフリート再び（前書き）

えーと・・・多分違う意味で

書くところもあるので・・

気にしないでくださいね・・・

四天王イフリート再び

私たちは炎の部屋のドアを開けた。そして
「ほおあの硬いゴーレムを倒したかさすがだな
だが・・・今回はこのイフリート様が相手だ！」
と言った。そして師匠さんは
「この私とティオが相手だ。いいな」
と言った。そしてイフリートは
「よかろう。では行くぞ！」
と言った。師匠はすぐに魔法を唱えた。
「では行くぞい。アイストーネード！」
と言って、イフリートに向かったが途中で
技が消滅した。キトさんが
「なぜ・・」
と言った。イフリートが答えてくれた。
「お前らに入ってなかったがこの部屋は
ほぼマグマで作った部屋なのだ。だから
お前らの水属性の技が俺が弱点なのは
知ってると思うがしかしマグマは水と蒸発
するから俺様にはあたらんさ！どうだ！」
と言って師匠さんはそっか。っと言った。
「ではもう方をつけるかのティオ援護を頼む」
と言って、ティオさんは
「はい、師匠！」
と言った。そしてイフリートが
「レイジングミスト！」
と唱え、ティオさんは師匠の魔法の唱えるのを
待つためにタイダルウェイブと言って、
炎の技を受け止めて師匠はよし行くぞ！

と言って。師匠は魔法の呪文を唱えた。
「いでよ精霊ウンディーネ！」
と言って精霊ウンディーネが出てきた。
「あれが・・・精霊ウンディーネ・・
精霊使いがいるとは・・さすがティオの師匠さんだ」
とキトさんが言った。そして私は聞いた。
「精霊って珍しいの？」
とそれを聞いたキトさんは
「ああ・・まずこの世に精霊を見るのにも珍しいことなんだ
そしてそれを使える人は昔に1人だけいたが・・
ほとんどが精霊を使うのに厳しいからね・・」
と言った。そして精霊ウンディーネは
「マスター命令をお願いします。」
と言った。ティオの師匠は
「存分にあの炎のイフリートを倒してくれ。」
と言って精霊ウンディーネは分かりました。
と言った。師匠さんは
「ティオ精霊ウンディーネにアブソリュートを
打ってくれ。」
と言った。そしてティオさんは分かりました。と
言って。精霊ウンディーネにアブソリュートを
打った。そしてウンディーネはありがとう。
と言ってイフリートの前に立ち。
「これで決めます。アブソウェイブ！」
と唱えた。少しは蒸発をしたのだが・・・
水の威力が高いのでそのままイフリートに攻撃をした。
「なんだと・・このマグマが水に蒸発しないだと・・
うわ！！！！」
と技を食らった。そしてイフリートは負けたぜ・・
楽しかった。と言ってマグマの中に消えた。

そしてウンディーネは
「マスター何かあったらまた呼んでください。」
と言った。そしてティオさんの師匠さんは
「ああ、ありがとう。助かったよ。」
と言って。ウンディーネは
「いえいえ。では」
と言って私たちの前に消えた。
そしてキトさんは
「ありがとうございます。すごく助かりました。」
と言った。ティオさんの師匠さんは
「気にすることはない。ティオもよく頑張ったな
精霊を召喚は時間もかかるし消費も高いから・・
次は援護できないのだ・・すまんな・・・」
と言った。ティオさんは
「師匠は次休んでください。」
と言った。そして少し休んで次は雷の部屋と
書いてあった。次はライオウか・・・
行くぞ！と言って私たちはドアを開けた。　（第１８章終わり）

四天王ライオウ再び

「次は雷のライオウだ。今回は私とティオと
ことりさんで行くぞ！」
と言った。私は多分キトさんは無理に私を戦わせない
ようにしているんだな。と私は思った。そして中に
入って声がした。
「よくぞ！ここまで来たな。これでわしも本気で
戦えるのがすごくうれしい。準備はいいか？」
と言ってキトさん達は準備して私とティオさんの
師匠さんは後ろに待機した。そしてライオウが
「ほお、今回はあの小娘なしでいくのか、しかも
3人でわしをな。なめられたものだ。まあよい
では行くぞ！」
とライオウが言って、魔法の呪文を唱えた。
「ライトニング・ボルト！」
と唱えた。そして雷がランダムに攻撃をしかけて
キトさん達はそれをよけながら攻撃を仕掛ける
準備をした。ライオウが
「おらおら。どうした？こっちがこないなら
こちらから攻めるぞ？」
といい魔法の呪文を唱えた。
「ライトニング・ボルト！」
「ライボール！」
と2つの魔法と唱えライトニング・ボルトは
キトさん達の周りに攻撃をして行動を止め、
そこを雷の塊がキトさん達に向かって攻撃をしかけた。
ティオさんとことりさんはそれを見て、
「バリア！」

と唱えた。そしてキトさんの前に2つのバリアが
はって雷の塊とぶつかったが、バリアは1つ割れ、
もう1つ割れた。キトさんは
「まさか・・・2つのバリアが・・・簡単に割られるとは・・・」
と言って、雷の塊がキトさんに直で当たった。
「っぐ・・・」
と声を出したが・・・何とか倒れず傷だらけで
「やばいな・・・」
と言った。ライオウは
「こんなバリアではわしの攻撃は防げん。さあどうする？
そのまま逃げるのか？わはは」
と言った。ことりさんはキトさんを見てやばい。と
思ったので魔法を唱え。
「エターナルヒーリング！」
と唱えた。そして、キトさんの体の傷が消えていった。
「キトさんがんばって！」
とことりさんが言って、少し立ちくらみをした。
そして、ティオさんは
「大丈夫ですか？」
と唱えた。ことりさんは
「はい・・大丈夫です。エターナルヒーリングは
多く魔力を使ってしまう回復魔法なので・・・
初めて使いました。あはは・・だけど今は
ライオウを倒しましょう。キトさん今から
援護魔法をかけます。」
と言った。キトさんは
「ああ・・・お願いします。ことりさん。
しかし・・・無理だけはしないでください。」
と言った。キトさんはあの男の子からもらった、
剣を抜いて攻撃の準備をした。そしてことりさんは

「では行きます・・・キトさんに・・」
と言って、魔力をためて、一気に
「チャージ！」（力をあげる魔法）
「ヘイスト！」（足を早く動ける魔法）
「シールド！」（打撃、魔法攻撃を守る魔法）
と唱えた。そして魔力を使い切ったことりさんは
「あとは・・頼みますキトさん。」
と言って、倒れた。そしてキトさんは
「ありがとう・・ことりさん。ライオウ！
この一撃でお前を倒してやる！」
といった。ライオウは
「そっか、じゃあわしもこの一撃でお前を倒そうこい！」
と言った。キトさんはヘイストでまだ魔法の効果が続いている
ライトニング・ボルトをよけながらライオウに向かって攻撃を
する準備をした。そして、ライオウは
「わしも・・・最大の魔法を一気に出すか。
さきにお前が倒れるかわしが倒れるか
勝負だ！行くぞ！」
と言いライオウは魔法を唱えた。
「ライトニング・ボルト！」
「ライボール」
と唱えキトに攻撃を仕掛けた。キトさんは
「甘い！」
と言い、軽く攻撃をよけたが、ライオウは
「わはは。この2つはおどりだよ。
これが・・わしの最強の技だ！」
と言いライオウは魔法の呪文を唱えた。そして
「サンダーブレイク！」
と唱えた。その魔法はライボールの5倍ぐらいの
大きな塊だった。それをキトに攻撃をした。

「キトさんまだ終わってないよ！」
と私が言った。そして杖に頼んで
「あの魔法を反射して・・・」
と答えて、ティオさんは
「キトさんなら任せて！」
と言いティオさんは魔法を唱えた。そして
「テレポート！」
と言いキトさんはサンダーブレイクの前に一瞬
消えてそのキトさんの前に大きな盾が現れ
サンダーブレイクを反射した。そして、ライオウは
「ま・・・まさか・・・リフレクターだと・・・
　あの小娘・・・あの技まで使えるとは・・・うわ～」
と自分が魔法をしたサンダーブレイクを直に食らって、
フラフラしているときテレポートから帰ったキトさんは
ライオウの後ろにいてティオさんは
「今です！キトさん！」
と言った。そしてキトさんは
「ありがとう。ティオ、川崎様、ことりさん」
と言った。そしてキトさんは
「これは・・お前に倒すための最強の技のひとつだ！
　食らえ！地空斬！」
と言って大きく剣を振り下ろしてライオウは
地空斬を食らって倒れる前に、
「俺の負けだ・・・さすがだ・・お前らと戦えて
　俺はうれしかったよ・・ありがとうな・・」
と言って倒れた。そして、キトさんは
「お前と戦えてよかった。しかし・・お前が
　四天王ではなく魔族ではなければいい親友が
　できたんだがな・・残念だ・・・」
と言ったが。もうライオウは死んでいた。

そして、キトさんは
「ことりさん大丈夫ですか？」
と言った。ことりさんは
「ええ・・・私は大丈夫です・・キトさんは？」
と言った。キトさんは
「ちょっと無理したかもしれないが・・・少し休んで
行くぞ・・・あまり時間がない・・しかし・・・
ことりさんは無理をしすぎているから・・休んでいて。」
と言ったとき、フェンリルから声が聞こえた。
「ほお、あのライオウを倒すとわな、残すところ
四天王はこの私フェンリルだけじゃ。しかし
お前らはゴーレム、イフリート、ライオウで
体力消耗してるしな・・俺は全快している
お前らと戦いたい。だからお前らにこれを
やろう。少し来てから来るがよい。」
と言って、袋を私に渡して姿を消した。
そして袋の中身を空けるとの木の実のような
ものが５つ入っていた。そしてそれを見た
ティオさんは、
「回復の実ですか・・」
と言った。私はティオさんに
「回復の実？」
と聞いた。そしてティオさんは、
「回復の実とは、そのままのように
疲れた体や、魔力の回復をする実の
ことです。」
と答えた。キトさんは
「そろそろ四天王と戦うのは最終戦に
なりそうだ・・みんないいか？」
と言った。そしてみんなで１つずつ

回復の実を食べて、少ししてから
歩き、そして氷の部屋。と書かれた
ドアの前に立って私たちはドアを
あけた。　（第１９章終わり）

四天王フェンリル再び

「よう、待っていたぞ！」
とフェンリルが言った。そして
「準備はいいか？行くぞ！」
と言ってフェンリルは呪文を唱えた。
「ふぶき！」
「エターナルブリザード！」
と呪文を唱えた。キトさんは
「魔方陣！」
と唱え、ことりさんとティオさんは
「シールド！」
と唱えて私たちの周りに盾がはられた。
そしてことりさんが
「キトさんいきます！」
と言ってことりさんは魔法の呪文を唱え
「ヘイスト！」
「チャージ！」
と唱えた。そしてキトさんは
「ありがとう、ことりさんフェンリル行くぞ！」
と言った。そしてキトさんはフェンリルに
向かって、近くまで走っていき、
「これで終わらせる！行くぞ！」
と言って、剣に呪文を唱えた。そして、
「雷空斬！」
と唱え。フェンリルに切り込んだ。
そしてキトさんは
「やったか？！」
と言った瞬間、フェンリルの声がした。

「ほお～なかなかやるじゃないか」
と声がした。そしてキトさんは
「なんだって・・・雷空斬が効かないだと！」
と言った。フェンリルは
「いや、食らわないっというかわしの鉄壁防御で
防いだだけだ。わしを甘く見たな。」
と言った。しかもフェンリルは
「この鉄壁防御は魔王クンドン様だけが破られた
技なんだ。だからお前らの技は到底この技を
破らない限りはわしを倒せないぞ？」
と言った。そして、フェンリルは呪文を唱えた。
「アイスボール！」
「エターナルブリザード！」
「絶対零度！」
と呪文を唱えたアイスボールは馬鹿でかい氷の塊を
キトさん達に攻撃し、エターナルブリザードは私たちの
周りを氷で動きを封じ、絶対零度は私たちの足を
氷で封じられた。そして絶体絶命でキトさんは
ティオさんに言った。
「これからリミッターをはずす。だから・・ティオ
ことりさんと川崎様、ティオさんの師匠さんを
守ってあげてくれいいな。」
と言った。ティオさんは
「分かりました。ですが・・無理だけは
しないでください。こちらもサポートは
させていただきます。」
と言った。キトさんは
「ありがとう。では行くぞ！」
とキトさんは袋の中から種を出して
口に入れた。そして・・・キトさんの

周りが魔力であふれていた。
「ほお・・まだそれでもいけるのか・・
だが・・アイスボールを防げるのかな？」
とフェンリルが言った。そしてアイスボールは
キトさんの前までいって、キトさんが剣を
振り下ろしただけででかい氷が２つに
割れた。そしてキトさんは
「行くぞ」
と言い。瞬間移動で見れないぐらいに早く
フェンリルの前まで来た。フェンリルは
「なんだと・・あのアイスボールを
軽く粉砕されるとは・・・しかし
この絶対防御がある限りお前は
俺を倒せない！」
と言い、キトさんはあの子供から
もらった剣を引き、呪文を唱えた。
そしてキトさんは
「フェンリル。これでお前を一気に
倒す。覚悟しな。」
と言い、キトさんは魔力を練った。
そして・・・
「爆裂魔法連化斬！」
と言い剣をおろした。そして、
フェンリルの前に絶対防御と
爆裂魔法連化斬とぶつかったが
簡単に絶対防御が壊され、フェンリルに
攻撃が当たった。そして
「うわ～～～～～」
と言って。フェンリルは倒れながら
「参った・・・お前の勝ちだ・・・」

と言って。倒れた。そしてキトさんは
袋から種を出して口に入れ、少しふらついて
「この技はリミッター状態でないと使えない
技だ。しかもリミッターは多く魔力を
消費するし・・爆裂魔法連化斬を使えるには
火属性。雷属性、水属性、土属性、闇属性、
光属性の６つの技の剣術が使えないことが
条件だ・・しかも・・リミッター状態と
この技を使うときは１回しか使えない。
そして・・・使った後かなり魔力が
消費して・・半年後までリミッターが
使えないがな・・はあはあ・・・・」
とキトさんがふらふらして言った。
そして私たちがキトさんの近くに来て、
ティオさんが回復魔法でキトさんの傷を
癒し、キトさんが
「はあはあ・・・ちょっと魔力使いすぎた・・
少ししたら魔王クンドンに立ち向かうぞ！」
と言った。そして私は考えた。
「このまま・・キトさん達に魔王クンドンと
戦っても不利だわ・・どうしよう・・」
と考えていたら、ティオさんの師匠さんが
「どうしたの？」
と言って私は
「いえ。なんでもありません。」
と言った。ティオさんの師匠が
「そっか。」
と言いみんなが魔王クンドンの居る場所に
向かって歩いて言って、私は
「もし・・キトさん達が危なかったら

私が何とかしないと・・・私が・・・
杖さんあと5回しか使えないけど
がんばってね・・・」
と心の中で言った。
そして私たちはクンドンがいる部屋に
向かって進んだ。　（第２０章終わり）

魔王クンドン　前半

「よくきたな、あの四天王を倒すとは
　驚きだ。しかし、このクンドン様には
　勝てるかの？では行くぞ！」
と言い、クンドンは呪文を唱えた。
「ではまずこれから行くぞ！」
と言い、クンドンの手をキトさん達に向け、
「グラビディ！」
と唱えた。そして唱えたとき私たちは
一気に倒れた。倒されてはない。それは・・
「くそ・・からだが重いだと・・これは・・
　無属性の技か・・・」
とキトさんが言って、クンドンが
「ほお～まさかこの技の属性を当てるものが
　いたとわなだが・・これは軽い技だぞ？
　どうしたどうした～もう降参なのか？」
とクンドンは言った。キトさんはなんとか
立てられるが私たちがグラビディの重力に対する
魔法の抵抗がまったく出来ていなく、キトさんは
「ここは俺に任してくれ・・・」
と言った。しかしティオさんは
「キトさんさっきの戦いであなたは相当魔力を
　使っているので無理だけは・・・」
とティオさんが心配そうに言ったが、
「大丈夫だ・・・これでユン王子様が助けられるなら
　無理はするもんだ・・・」
と言い、キトさんは
「この近くにユン王子様がいるはずだ・・

攻撃をしながら探さなくては・・・」
と言い、魔力を練った。そして
「獅子十連覇」
と魔力をクンドンに攻撃をした。そして直撃した。
しかし・・・クンドンは笑いながら。
「ほお・・グラビディを食らいながら
まだわしに攻撃を出来るやつがいたとわな
さすがだ・・だが！しかし、攻撃はあたらんの」
とクンドンは言った。キトさんは
「俺が時間を稼ぐからティオさん達は
ユン王子様を探してくれ・・・しかし
クンドンにはばれないようにしてくれ・・」
と言い、キトさんはクンドンに向かって攻撃をした。
ティオさんは
「私はキトさんの援護をします。」
と言った。ティオさんの師匠さんは
「では私と川崎さんとことりさんでユン王子様を
探そうではないか。」
と言った。ティオさんは
「お願いします。師匠。では」
と言って、ティオさんはキトさんの援護に入った。
そして私たちはユン君を探すために周りを見た。
ティオさんの師匠さんは
「違う魔力が近くに感じるぞ！
右に行けばもしかしたら・・・」
と言い、私たちは右にある部屋に行った。
そして、クンドンは私たちの行動を見て、
「行かせんぞ！」
と言い、呪文を唱えた。キトさんは
「そうはさせん！」

と言って、
「獅子真空斬！」
と技をしてクンドンの攻撃を止めた、そして
「早く行くんだ！」
とキトさんは言った。そして私は
「ありがとう。キトさん」
と言って、私たちは部屋に入った。
そしてユン君が鎖で縛っていて動けない状態で
あった。そして、ティオさんの師匠さんが
「ふむ、これは普通には壊れないようになって
いるな。だが・・・これならどうじゃ！」
と言い、ティオさんの師匠さんは呪文を唱えた。
「風の精霊よ。今こそ我が力を貸してくれ。
出でよ！シルフ！」
と言って、小さなかわいい精霊が出てきて、
「どうしました？マスター」
と言った。そしてティオさんの師匠さんが
「時間がないんだ・・今あの男の子が
縛っている鎖を壊してくれないか？」
と言った。シルフは
「分かりました。マスターでは」
と言って、シルフは呪文を唱えた。
「ウインドカッター」
と呪文を言ったらユン君を傷つけることがなく
きれいに鎖が壊れた。そしてシルフは
「あとは何かありますか？マスター」
と言った。ティオさんの師匠さんは
「いや・・・大丈夫だ。ありがとう」
と言った。シルフは
「いえいえ、ではまた何かあったら呼んでください」

と言って、シルフは私たちのから姿を消した。そして
「本当はクンドンと戦うために魔力を抑えていたが・・
しかし・・この鎖も魔力が高い魔法でないと
壊れないからな・・・すまん・・・なんにも出来なくて。」
とティオさんの師匠さんは頭を下げた。そして私は
「気にしないでください。何にも出来てないのは
私なので・・・キトさんやティオさんことりさん
そしてティオさんの師匠さんみんながんばって
ユン君を助けてくれただけでも私はすごく感謝を
しています。だけど・・今度は私が・・・なんとか
しないと・・いけない番です・・・。」
と言ってユン君のお父さんからもらった袋を開けた。
そして中に入っていたのは指輪だった。それを見て
ティオさんの師匠さんは
「ほお・・これは・・魔力、生命を回復する指輪か・・
これをユン王子につけたらいいよ。後で生命と魔力が
回復するはずだから。」
と言った。そして私は
「分かりました。」
と言って、ユン君の指にはめた。そして私は
ティオさんの師匠さんとことりさんに聞いた。
「ティオさんの師匠さんには少しきついと
思いますが・・・このドアに強力な
シールドってはれますか？もちろん
クンドンにはすぐ割られても大丈夫ですが・・」
と私が言って、不思議そうにことりさんは
「何で？」
と聞いた。そして私は
「この杖が使えるのはあと5回だけなの・・・
しかももうキトさん、ティオさんは魔力を

使いすぎでそろそろきついはずなの・・・
だから・・もう苦しいところを見たくないから・・
私が1回ここにテレポートをしますので・・
キトさん、ティオさんがシールドを割れない強力な
魔力をお願いできないかな・・。と思うのですが・・
だめでしょうか？」
と言った。それを聞いてことりさんは
「わたしはまだいけます！」
と言ったが、ティオさんの師匠さんは
「待ちなさい。ことりさん。ことりさんが
一緒に行っても、足手まといになってしまう。」
と言った。ティオさんは
「でも・・・」
と言い私は
「私なら大丈夫。また元気な姿で帰ってくるから。」
と言った。そしてことりさんは
「分かりました・・でも無理はしないでくださいね。
あなたが怪我をしたら、悲しむ人がたくさんいる
いるから・・お願いね」
と言って、私は
「分かりました。約束します。ではお願いしますね。」
と言って私はキトさん達のところに行った。（第２１章おわり）

魔王クンドン　後半

「ふはははは。もうおしまいか？」
とクンドンは言った。キトさんは
「川崎様はうまくユン王子様を助けたのだろうか？」
と言いキトさんとティオさんはぼろぼろの姿だけど
立ちあがった。そして、キトさんは
「ちょっとやばくなったかな？」
と言って、ティオさんも
「そうですね。少しやばくなりましたね。」
と言ったとき、私が
「キトさん、ティオさん大丈夫ですか？」
と声を出した。キトさん達はびっくりして、
「川崎様戻ってはいけません早くあちらの部屋に
　戻ってください！」
とキトさんは言った。しかし私は
「戻るのはキトさん達だよ。」
と言い、私は杖に魔法を唱えた。そしてキトさん達の
周りに魔方陣が立った。そして
「まさか・・・川崎様・・・」
とキトさんが言った。私は
「うん、あちらに移すテレポートだよ。
　キトさんティオさん今まで私を守ってくれて
　ありがとうね。だけど今度は私がキトさん
　ティオさんを守る番だよ。今までありがとうね。」
と言った。キトさんは
「川崎様！」
と言い、向こうの扉にテレポートをした。
そして、クンドンは

「ほお、次は小娘か」
と言った。私は
「小娘で悪かったね！だけど、私はあなたを倒すよ！」
と言い、杖に願いをした。そしてでた技が
「グラビディ！」
と言った。そしてクンドンは
「何！この技はわしだけしか使えない技。しかし
この技はわしには効かんわ！」
と言ったが、クンドンが倒れそうになった。
「なんだと・・・この技はわしには効かないはず
なんだが・・まさかわしの魔力より上のやつが
いたとは・・・」
と言い、私は休まずに、次の技を願った。
‘「メテオ！」
と言い、隕石がクンドンに攻撃をした。
「なんだと・・・うわ！！」
とダメージが食らっているけど私は攻撃をやめないで
次の技を唱えた。
「アルテマ！」
と唱えた。そしていろんなところからクンドンに
攻撃をした。そしてボロボロなった。そして私は
「クンドンこれで最後よ！」
と言い、私は
「もうこの世から消えなさい！」
と言って杖に魔法を唱えた。
「ブラックホール！」
と言った。そして、１０回使い終わった杖は
壊れてしまった。そしてクンドンの後ろに
次元のひびがわれクンドンに吸い込むように
攻撃をした。そしてクンドンは

「そのまま俺様を次元に閉じ込める気だな。
だが行く前にお前だけはお前だけは・・・
殺してやる！！！！」
と言って、クンドンは呪文を唱えた。
「ダークスピヤー」
と言って黒い槍の物を私の前に攻撃をした。
そしてクンドンは
「俺はいつかこの次元から戻ってきてやる！
だがお前だけは死んでもらうわはは」
とクンドンは次元に消えていった。
そして黒い槍は私のところに来て、私は
「ユン君、今までありがとうね」
と言った瞬間、懐かしい声をした。
「励！！！！」
と言う声がして私の体を押して身代わりに
なったのが・・・まさかの・・・私は・・・
「ぇ・・ユン君・・・なんで・・・なんで・・・
私を・・・助けたりするのよ！」
と私は言った。なぜなら私を押して変わりに
ユン君が黒い槍を食らって即死状態におちて
しまったのだ。そして涙が出た私は・・・
「なんで・・私を・・・・ユン君がいないと
この世界守れないのに・・・なんで・・・
私を助けたりするのよ・・・・」
と涙で私はユン君に言った。そしてユン君は
「決まっているよ・・・はあはあ・・だって・・
俺は魔法世界より川崎励のほうが大好きだから・・
好きな人を守れない男はいやだから・・でも・・
また会えてよかったよ・・・でも無事でいたことが
すごくよかったよ・・はあはあ・・」

と意識が失いそうな目をした。そして・・・ユン君は
「いままで付き合ってくれてありがとう・・
励がいたからこそ俺は・・・この世界と君がいた
世界を交流したい。と思ったから・・本当に
ありがとう・・・。」
と言って、ユン君は目を閉じた。そして・・・私は
「いやよ・・いやよ・・逝かないで・・・・・ユン君
死んだらいやよ・・・死なないで・・・」
と言った。そして周りにキトさんティオさん
ことりさんティオさんの師匠さんがいて、
「川崎様・・・」
とキトさんとティオさんが苦しく言った。私は
「ユン君・・・死なないで・・・戻ってきてよ！」
と涙がユン君の顔に落としたときユン君の周りに
魔方陣が立った。そして私はお父さんが言った
魔法世界の住人であったお父さんの遺伝子・・
それは・・１回だけ魔法が使えること・・・。
そして・・私は・・・
「お願い・・・ユン君を・・・助けて・・・」
と言った。そして、ユン君の傷ついた体は
どんどん傷がなくなっていた。そしてティオさんは
「こ・・これは・・まさか・・あの伝説の
リザレクション！？」
と言った。ティオさんの師匠さんは
「だな・・しかしリザレクションが使えるやつは
１０００年に１人しか使えるやつがいるかどうかの
幻の技だ・・なんせ１回だけの技だししかも
蘇生できるからの・・・わしもみるのは初めてだ」
と言って、ユン君は気持ちよさそうに眠っていた。
ティオさんは

「ちょっと失礼」
といってユン君の脈を計った。そして、ティオさんは
「もう大丈夫です。川崎様」
と言った。そして私は
「よかった・・・よかった・・・ユン君が生きていてくれて
本当によかった・・・」
と涙を流しながら言った。そして私たちは少し休んでティオさんと
ティオさんの師匠さんのテレポートでユン君のお父様がいる。
城へ戻っていった。

っていう話だったけど・・・面白かった？
と子供たちに聞いた。子供たちは
「ママとパパの出会いがすごく素敵な出会いだったんだ。
素敵なお話をありがとう。」
と言って、自分たちの部屋に戻っていった。
私は子供たちが部屋を出た後に
「本当はこれで終わりではないだよね・・・。」
といいながら私は言った。（第２２章終わり）

別れそして数年後

お城に戻った私は王様に
「本当に助かりました・・・あのクンドンを
倒してくれるとは・・しかし・・・つらい旅
でしたね・・大丈夫でしたか？」
と言った。私は
「いえ・・私はなんにもしていませんよ・・。
キトさんやティオさんことりさんがいたから
私はクンドンにかけたと思うし・・
ティオさんの師匠さんの力もあるし・・
それに一番助けてもらったのは・・・
この杖ですから・・・」
と壊れた杖の部品を無くさず持っていた。
そして王様は
「そっか・・・だけどキミのおかげでこの魔法の
世界に平和になった本当に感謝するよ。だから
キミに1つだけ願いをかなえて見せよう。
何がいい？」
と言った。私は・・・王様に聞いた。
「もし・・・お願いできるなら・・・
私を人間の世界に戻してもらえませんか？」
と言った。王様は
「別にそれはかまわんが・・それでいいのかい？
しかし・・・ここにいてもいいしもしよかったら・・
息子と結婚してもいいのだよ？」
といったが・・私は
「いえ・・もう私は魔法が使えないただの人間・・
しかし・・このままいたりしたら・・ユン君に

迷惑をかけてしまう・・お医者さんが言うには
目が覚めるには3日後に覚めるというので・・
その前に私は戻ろうかと思います。」
と言った。王様は
「息子に最後に会わなくてもいいのか？」
と言った。私は
「はい・・あったらもう帰れなくなると思うので
もし帰られるなら明日には帰りたい。と思います。」
と私が言った。そして王様は
「分かった。明日までに準備をしよう。
今日はゆっくりと休むがいい。」
と言って、王様は姿を消した。そして
近くにいた、キトさんティオさんに
「本当にいいのですか？川崎様」
と心配そうに言った。そして私は
「うん・・大丈夫。最後にユン君の顔を
見ただけで私は幸せだよ！」
と笑顔で言った。ティオさんは
「しかし・・・」
と言ったが私は
「ユン君と私はもともと別々の世界の住人だし
私は人間世界での凡人。しかしユン君は
この魔法世界の住人でしかも王子様だよ。
格差が違いすぎるよ・・・しかし、私と
結婚するより、ユン君には気が合う女性が
必ず現れるよ。本当にキトさんとティオさんには
感謝しているよ・・かなり迷惑かけたりしたが
私についてくれて本当にありがとう。」
と私は頭を下げた。そしてキトさんは
「川崎様が決めたことはとめたりしません。

こちらこそ本当にありがとうございました。
いろいろと勉強になったし。いろいろとお話ができてよかったです。」
と言った、私は
「ありがとう。キトさんえーとことりさんとティオさんの師匠さんは？」
と聞いた。ティオさんは
「ことりさんは疲れて自分の部屋で休んでいると思います。師匠はまた旅に出ました・・・もしまたあったら伝えときますね。」
とティオさんが言った。私は
「ありがとう。」
といって自分の部屋に行って、休んだ。
そして・・次の日私は人間の世界に帰る準備をして最後にことりさんに会った。そして
「帰るのですね。」
となきそうになりながらことりさんは言った。そして私は、
「自分の世界でお父さんとお母さんが待っているから帰らないと。」
と言った。そして私は
「ことりさんはどうするの？これから・・・」
と私が聞いた。ことりさんは
「んー・・まだ決めてないですね・・王様がここにいてもいいって言ったので。１回迷いの森に行ってからこちらにお世話になろうかと思います。」
と言った。私は
「そっか～ことりさんもがんばってくださいね」
と私とことりさんは手を握った。そして
「キトさん、ティオさん本当に私のわがままに

付き合ってくれてありがとうございました。
いろいろお世話になりましたが、いい経験になりました。」
と言ってキトさんとティオさんは
「いえいえ、こちらこそありがとうございます。
お元気で」
と手を握って、私は王様に
「ユン君が目が覚めたら。この世界を守ってね。
そしてがんばってください。と伝えてください。」
と言った。そして王様は
「分かった。伝えとくよ。」
と言い、私はみんなの前で頭を下げて
「いままでありがとうございました。
では～またね！」
と元気で手を振って門を超えて私の家の前に
居た。そして私は家のドアを空けて
「ただいま！」
と言って、入って言った。そして・・6年後
私は中学卒業まで家の近くの学校に行き、
高校になったときは思い切って、都会に出て
勉強をして無事卒業をして、家にもどり
畑の仕事をしてきたとき、1人の男の子が
私の前に現れて一言言った。
「探したよ・・・励・・」
と言ったとき私は顔を開けたらまさかの
「え・・・ユン君どうして・・・」
と言った。ユン君がまさかの目の前にいた。
そしてユン君は言った。
「なぜって言われてもね・・向かいにきたのよ。」
とテレながら言って、ユン君は私に

「僕のお姫様になってもらえませんか？」
と恥ずかしながら言った。しかし私は・・
「ごめんなさい・・私は・・魔法が使えないし・・
今は・・・家のことでいっぱいなの・・ごめんなさい」
と言ったとき、お父さんが現れ、
「励、魔法世界に言ってきな。家のことなら大丈夫だから」
と言った。私はしかし・・・と言ったが、お父さんが
「このユン君はお前が高校に行ったときにうちの家を
見つけてな、聞いてきたんだよ。だから俺が場所
教えようか？と聞いたが、いえ・・まだ未熟だから
もうすこしたってからマタきます。と言ってな」
そして、お前が高校卒業して家の手伝いはうれしいだが、
お前の幸せをとるならお前が魔法世界に行ったほうがいいに
決まっている。だから行って来い！」
とお父さんが言った。私はユン君に
「もう魔法が使えない女だし・・・なんにも出来ない女だよ？
それでもいいの？」
と言った。ユン君は
「魔法が使えなければ魔法の世界に来てから少しずつ
使えるようになればいいしそれでもだめならそれでいい
励がいないと俺もだめになりそうなんだ・・」
と恥ずかしそうに言った。そして、ユン君は
「この私と結婚してくれませんか？励様」
と言った。私は
「様はつけなくて励でいいよ。こちらこそよろしくお願いします。」
と言ってキスをした。そして私励は魔法の世界と人間の世界で
ユン君を一番幸せにしたい。と思いました。　（第２３章終わり）

別れそして数年後（後書き）

一応ユン君を助けるまでの
お話はこれで終わります。
ですが・・・まだ終わりませんよ！
しかし・・次を書くには
時間がほしいので・・・
早くて・・・１０月ぐらいに
なりそうです・・・。
すいません・・・＞＜
では。もう少し早く
更新できるように頑張ります。
車の学科のテストが合格したら
書けるかな・・・（ポソ

楽しい幸せ・・しかし・・・

そして・・・ユン君から
「結婚してください。」
と言われたときからもう3カ月
まだ、結婚には早すぎるから
お互いに彼女彼氏として
付き合っていた。
ユン君は今魔法世界と私がいる世界の
門の制限をなくすように努力を尽くしてる
そして、前に私はユン君のために
魔法世界に行って戻ることができなかったが
王様（つまりユン君のお父様）から
自分の世界に戻ることができたが私は
まだ結婚してないので出入りが許されてはなく
私はユン君が3日に1度来てくれるので
自分の世界でお父さんの農業の手伝いを
してきた。そして3日前にユン君が
「もうすこししたら、やっとお互いの世界を
入るのを1回切りがなくなる。しかし・・
条件付きになりそうだが・・まあ・・
うちの夢もそろそろ叶えそうだな。
もうすこし待っててね励」
と言った。私は
「いつでも私はユン君の帰りを待ってます♪」
と笑顔で言った。そして数日後
私は畑の仕事が終わり、そろそろユン君が
帰ってくると思いそろそろ家に戻った。
そしてユン君が近くに現れ私は

「ユン君〜！」
と笑顔でユン君のところに走っていたが・・・
そこに1人の天使のような人が現れたそして
「すいませんが・・・」
と言われ、私は意識を失った。
ユン君はあわてて
「お前は誰だ！励に何をしたんだ！」
と言った。そして天使のような人がユン君に
「すいません・・ですが・・・私は
フラユンス・メディア。あなたに用があって
ここに来ました。しかし・・もしかしたら
話を聞いてくれないと思い彼女の記憶を
もらいました。話だけでも聞いてくれませんか？
彼女には何もしませんので。」
と言った。そしてユン君は
「分かった。俺に話したいことはなんだ？」
と言った。そして
「ありがとうございます。まず私の名前は
パージアスと呼んでもらいたい。多分
分かると思いますが天界の1人です。
我々は昔私たちの天界での武器や装備
を保管してたのですが・・・何者かが
突然私たちのところに現れ保管してた
武器や装備を取られてしまったのです。
場所は分かりますが・・・私たち天使では
入れない結界があり、その結界を壊せる
強い魔力のある人がいないといけないので・・
ご協力できませんか？もし全部回収できたら
もちろん、この彼女の記憶は返しますよ。
だが・・全部忘れていては困りますので、

もしご協力できればこの子の自分の名前と
あなたの記憶だけは返しましょう。
どうですか？」
とパージアスは言った。そしてユン君は
「分かった。強力をしよう。だが・・
もし励に何かあったらお前らを許さない
からな！いいな！」
と強い魔力を感じたパージアスは
「ありがとうございます。では彼女に
自分の名前とあなたの記憶だけは
返しましょう。一応回収してほしい
武器や装備はライトウェポン、
ライトクリスタルソード、
ライトランス、ライトダガー
ライトシールド、ライトヘルム
ライトアーマー、ライトリスト
の８個をお願いします。」
と言って、パージアスは
「では。また会いましょう。」
と姿を消した。そしてユン君は
私をユン君の肩に乗せて
歩いて行った。（第２２章おわり）

楽しい幸せ・・しかし・・・・（後書き）

お待たせしました・・・
やっと・・４回目にして
合格しました・・・
のんびり書くので
なるべく1日ずつできれば
いいかなっと思いますが
なるべく?日に更新できるように
がんばりたいです。
誤字脱字があるかもしれませんが
見守ってください（汗）
それか感想に書いてくださると
すごく助かります。では～

新しい旅立ち

「そっか・・・また励を世話になります。」
と励のお父さんはユン君に頭を下げた。
「いえ・・こちらこそ・・励さんの記憶を
取られてしまって・・本当にすいません・・
しかし・・必ず記憶を戻しますので
心配しないでください。」
とユン君は言った。ユン君はパージアスと
話した後、私の家に連れて行ってくれた。
そして、私を見たお父さんはユン君に
「どうしたんだ？なにかあったのか？」
と質問してきたので、ユン君が事情を
話してくれた。そして私が目が覚めて
ユン君が
「励大丈夫か？」
と言ってくれて、私は
「うん、私なら大丈夫・・・あちらの方は？」
と励のお父さんのほうを指していた。
それを見て励のお父さんがびっくりしていた。
まさか・・記憶喪失？ではないかと・・。
だからユン君は励のお父さんに何かあったか
説明をして、お父さんが理解をしてユン君は
「励さんを1度魔法世界につれて行っても
いいですか？」
と聞いた。そして励のお父さんは
「わかりました。娘をよろしくお願いします。」
と言って、ユン君は
「励、今からうちの家に帰ろう。」

と言って、私は
「うん！」
と言った。そして私たちはユン君がいる世界に
行った。そして魔法世界についたとき
キトさん、ティオさんがユン君のところに来て
「おかえりなさい。ユン王子、川崎様」
と言った。そしてユン君は
「ことりさんは？」
と聞いたのでティオさんは
「ことりさんは子供に歌を聴かせていますね。
あとから来ると思いますが。」
と言った。そして私は
「こちらの方々はユン君の知り合い？」
と言って、キトさん達は驚いてた。そして
「キト、ティオ後からうちの部屋に来てくれ
ことりさんも呼んでくれたらうれしいかな」
と言って、ユン君が私に
「うん、この方々はね知り合いというより
昔からの親友だよ。励もすぐに仲良くなるから
安心して。」
と言った。それを聞いて私は
「分かりました。はじめまして川崎励です。
よろしくお願いします。」
と頭を下げて、キトさん達も
「私はキトと申します。よろしくお願いします。」
「私はティオと申します。よろしくお願いしますね。
川崎様」
と二人も頭を下げた。そしてユン君は
「励、少し疲れただろう。君の部屋に行こうか。」
と言って私は

「うん！」
と言った。そして歩く前にユン君がキトさん達に
「ことりさんが戻ったらうちの部屋に来てくれ。」
と行って、歩いて行った。
そして私が疲れて眠った後、キトさんティオさん
ことりさんがユン君の部屋に来て、ユン君が
「来てくれてありがとう。今から話ことと
　これからのことを一気に話すね」
と言い、励がパージアスに記憶を取られたこと
それを返すの条件に必要な武器や防具を
回収することなど話したそしてキトさんは
「分かりました。では私たちも付き合います。
　ユン王子様だけじゃ心配なので・・」
とキトさん達は行くことを決心したが・・
「だめだ！いつまたクンドンのように魔法の世界を
　狙ってくる奴がいるからその時が来てもいいように
　君たちは待機してもらう。いいね。」
と言われ。キトさんは
「分かりました・・・ですが・・ユン王子1人では・・
　危険すぎるでは・・」
と心配そうに行った。ユン王子は
「僕なら大丈夫だよ。1人のほうが。。安心だしね
　自分の技は時々みんなにも被害が起きやすいから
　あまり・・ぞろぞろしてたらやばいと思うんだ。
　僕が回収するときは励を頼むよ。励はもう魔法も
　使えないただの人間だから・・一緒にいたら
　危険も多いから・・・だからキト、ティオ、
　ことりさん励を頼みます。」
とユン君は頭を下げた。
「分かりました。ではいつユン王子は出かけますか？」

と言った。ユン君は
「早く励の記憶を返したいから・・明日には出るよ」
と言い、キトさんは
「分かりました。ではお気をつけて・・・」
と言った。出る前にティオさんは
「もし何かあったらこれを使ってください。」
と言ってユン君に渡した。そして
「ありがとう。」
と言った。では。と3人は部屋を出た。
準備をして。この日は早く出た。そして
朝6時ユン君は城の外に出たとき
「どこにいくの？」
と言われ振り向いたとき励がいた。
「励どうして？」
と言われ私は
「今日は早く起きたらユン君がどこかに
行こうとしてたから・・・ねえ・・
私を置いてかないよね？」
と心配そうに言ったので、ユン君は
「分かった・・励には負けたよ・・・
これから危険が多いことがあるけど
それでも行くか？励」
と聞いたので私は
「ユン君が行くなら私は危険でもがんばる！」
と言ってユン君は
「分かった一緒にいこ励」
と言った。私は
「うん！少し待っててね着替えてくる！」
と言い、城の中に入った。
「これから忙しくなるけど大丈夫かな？」

心配そうにユン君はため息を吐いてしまい
自分もびっくりしてまわりを見たけど
誰もいなかったんでほっとしてた。
「ユン君お待たせ！」
と私はユン君のところに来た。そして
「じゃあいこうか！」
ユン君は言った。私は
「行こう！」
と言って私たちは旅にでた。
そして・・・私はこれから危険な体験を
目にしたのだ・・・・（第２３章終わり）

新しい仲間　セイ・ライザ

旅に出てもう3時間ユン君が
「励疲れてないか？」
と聞かれたので私は
「うん、私なら大丈夫！」
と笑顔で言った。ユン君は
「そっか、もう少ししたら休もう
だけど今日は野宿になるけど
大丈夫？励」
と言われたから、私は
「うん。生まれて初めて野宿するから
少し心配だけどユン君がいるから
大丈夫よ。」
と言われ、ユン君は
「分かった。もし不安のときは言ってね。
何かあったら励を守るから」
と言って歩いていてユン君は心の中で
「やっぱり・・うちの記憶だけしか
覚えてないのか・・早めにすべてを
回収して励の記憶を戻さないと・・」
と思った時1人の男の人が現れ
「お～、ユンさんじゃないですか！」
と言った。そしてユン君は
「あなたは・・セイさん。お久しぶりです。」
と言ってセイさんは
「会うのは3年ぶりか？」
と言ってユン君は
「そうですね～ってことは今回も？」

と言ってセイさんは
「はい。この近くに珍しいアイテムがある
遺跡があると噂で知ったので行く途中です。」
と言って私はユン君に
「こちらの人は？」
と聞いたのでユン君が
「ああ、ごめんごめん。励には話したことが
なかったね。えーとこの方はセイ・ライザさんで
セイさんのお父さんがうちの王様と仲良しだったん
だけど励の居る世界に1度行ってそこで普通の人と
結婚して生まれてきて僕がいろいろと励がいる
世界に来た時にお世話になった人だよ。セイも
父親の遺伝子で魔法が使えるけどセイは遺跡マニア
なんだ。だから励の世界に来た時にいろいろな
遺跡を案内してもらったんだ。」
と言って、セイさんが
「確か・・あなたは川崎さんですね？はじめまして
セイ・ライザです。セイっと呼んでください。」
と言った。そして私は
「こちらこそ、よろしくお願いします。セイさん」
と言って頭を下げた。そしてユン君は
「今回はどこの遺跡にいくつもり？」
と聞いたので、セイさんが
「えーと・・確か・・土遺跡ですね。まだ行ってない
遺跡は土遺跡、水遺跡、火遺跡、氷遺跡、雷遺跡
クリスタル遺跡、泥遺跡、無遺跡ですね。
ユンさん達は？」
と聞かれたのでユン君は
「セイと同じ遺跡に行くつもりだよ。」
と言われて、セイさんはびっくりして

「本当ですか?!じゃあ・・もしよかったら・・・
一緒に行ってもかまいませんか?」
と聞いたのでユン君は私に
「励一緒に行ってもいい?」
と聞かれたので私は
「うん!ユン君がいいなら私はいいよ!
セイさんよろしくお願いします。」
と言ったのでセイさんが
「ありがとうございます。こちらこそよろしく
お願いします。川崎さん、ユンさん」
と言って私たちは最初の遺跡土遺跡に向かって
歩いて行った。そして夜
「励明日は早いから早く寝てね。」
とユン君が言ったので私は
「うん、分かった!じゃあもう寝るね
おやすみなさい。ユン君セイさん。」
と言って私はテントの中に入った。
そしてセイさんはユン君に
「ユンさん何かあったのですか?」
と言われ、ユン君は何もかも話してくれて
セイさんが驚いて、
「そうですか・・・大変だったのですね・・
まあ・・うちでよければ協力をしますので
川崎さん記憶を早めに戻すために一緒に
がんばりましょう!」
と言ってくれた。ユン君は
「ごめんね・・迷惑掛けるかもしれないが
よろしく頼む・・」
と言った。セイさんは
「気にしないでください。ユンさんは

前に世話になったので今度はこちらが
助ける番です。明日は早いから私も
寝ますね。」
と言い、ユン君も
「そうですね。これからもよろしく
お願いします。セイさんではうちも
寝ます。」
と言って二人は横になりきれいな星の
下で眠った。　（第２８章終わり）

土遺跡

気持い朝が迎えて私は起きて
テントの外に出たら
「おはよう励よく眠れたか？」
「おはようございます。川崎さん
お体は大丈夫ですか？」
と言われて、私は
「おはようございます。ユン君セイさん
よく眠れました。元気いっぱいです！」
と言って、私たちは朝ごはんを食べて
土遺跡に向かって歩いて行った。
そして夕方に土遺跡についたけど
「夜は危険がいっぱいあるから
今日はここで野宿しよう。
明日朝にいこう。」
とユン君が言って、セイさんが
「そうですね。夜の遺跡は危ないので
明日朝に行きましょう。」
と言い、晩御飯をためて早めに就寝した。
そして・・朝
「みんな準備がいいか？」
とユン君が聞いたので
「うん、大丈夫！」
「はい、大丈夫です。」
と私たちは言った。そして
「よし！行こう！」
と言い私たちは遺跡の中に入った。
中は土で固められた遺跡で

いろいろなトラップをユン君や
セイさんが解除していき奥に進んでいった。
そして最後に宝箱だけの部屋に入り
私たちは宝箱のそばに行った。そして
「これは・・さすがにあの天使が言った
結界が貼られてるな・・・さすがに
それを解除するにはうちの魔力がいるのか・・」
と言って、ユン君は魔法を唱えた。
「デスペル」
と唱えた。そして結界が壊され宝箱だけ残され
ユン君はその箱を開けた。そして中に入ってたのは
「これがライトウェポンか・・・」
とユン君は言った。それを聞いてセイさんが
「確か・・ライトウェポンは天使が使う武器で
一振りでも危険な武器なので天使はこれを
使うときは危険な時しか使ってはならないらしいですね」
と言った。そして二人は
「そうなんだ・・・」
と言い、私たちは外に出ようとしたとき
「その武器を置いていけ！」
と言い現れたのが丈夫なモンスターが現れ
「警備システムか・・しかも・・ガーディアン
めんどくさいモンスターが現れたか・・」
とセイさんが言った。そしてユン君は
「励少し離れててくれ。セイ少し時間を稼いでくれるか？」
と言ってセイさんが
「もしかして、やるつもりか？」
と言って、ユン君は
「ああ、特にガーディアンはこれを使わないと
倒せないからな。お願いします。」

と言った。セイさんは
「分かった。だが、本当はあまり使ってほしくはないけどね」
と言って、セイさんは呪文を唱えた
「ストップ」
と唱えて、セイさんは
「足止めぐらいにはなるでしょう。
頑張ってくださいユンさん」
と言ってユン君は
「ありがとう、セイではそろそろ行くますか！」
と言って、ユン君は魔力が上って行き
「チャージ！」
「チャージ１！」
「プロテク！」
「ヘイスト！」
「シャープネス！」
と一気に呪文を唱え構えすばやくガーディアンの
前に行き、一振りする前に
「弾空拳」
と言ってガーディアンを殴ったら一気に
粉々になった。そしてユン君が
「ふう、じゃあ行こうか」
と言った。そして私たちは何もなかったように
土遺跡を出た。　（第２７章終わり）

町に行く途中（前書き）

タイトル思いつかなかったので・・・・

これにしました・・・><

町に行く途中

私たちはライトウェポンを手に入れて
土遺跡から出ようとしたとき
「ふう・・・」
とユン君は言った。そして私は
「ユン君大丈夫？」
と心配した。ユン君は
「うん、大丈夫だよ励久しぶりに
使ったから・・・疲れただけさ
心配してくれてありがとう」
と言った。そしてセイさんは
「ユンさんの格闘魔法はこの世で
ユンさんしか使えない特別な職
なんです。」
と言い、ユン君は
「この職は自分なりに考えた新しい
格闘技を生かした職なんだけど・・
他の人に教えても出来ないのよね
だから・・いまだに使えるのは
うちだけなのだ・・だけど・・
あんまり使いたくないだよね」
と言った。私はなぜ？と聞いた。
セイさんが答えてくれた。
「さっきも言ったようにこの格闘魔法は
まだユンさんしか使えないのが１つ
２つめは格闘なので自分の精神も使うし
肉体強化も必要、しかも近距離技が
多いから遠距離技の人と組むと

遠距離技を食らってしまうこともあるんだ」
と説明してくれた。そしてユン君は追加で
「それもあるだけど・・チャージを使わないと
技が出ないしチャージも段階があって今回は
相手が硬いから第２段階で抑えられたから
すごく助かったほう。しかし・・一応チャージは
第５段階もあるが５段階は絶対に使いたくない。
最低でも第４段階で止めるつもりだよ。」
と言った。そして私は
「チャージを使うと・・疲れが来るの？」
と聞いた。ユン君は
「いや使い方を間違えなければ疲れは来ないよ
だけど・・・今回は・・久しぶりに使ったから・・・
疲れただけだよ・・・ごめんね心配かけて。
でも大丈夫だよ。危ないときはこれで励を
助けるからね」
と言った。セイさんは
「もうすぐ町がつくから頑張ってください。」
と言った。私は
「分かりました。」
と言って私たちは町に向かった。（第２８章終わり）

休憩

そして私たちは町に着いた。
「まずは、宿を取りましょう」
とセイさんが言った。そして
私たちは宿に着いてユン君は
私に聞いてきた。
「励は1人で寝る？」
と聞いてきたので私は
「私はユン君と一緒に寝たい」
と言ったのでセイさんが
「ユンさんと励さんはやっぱり
仲良しですね～いいですね」
と言った。そしてユン君は
「恥ずかしいことを言わなくていい。
まあ・・一応付き合ってるからね・・」
と恥ずかしいそうに言った。
そしてセイさんは
「じゃあ二部屋で私は1人で寝ますので
ゆっくりしていってくださいね」
と言った。そして宿主に
「二部屋お願いします。」
と言い、お金を払い部屋に向かった。
そして、部屋に入る前にユン君が
「今から明日の買い物に行くけど
セイと励はどうする？」
と聞いたのでセイさんは
「私は町を回りながら見てきますよ」
と言い私は

「ユン君と一緒に行きたい。」
と言った。ユン君は
「分かった。じゃあまた後で」
と言い部屋に入った。そして少し休んで
私とユン君は旅で必要な食料を買い出しに
向かった。そして歩いてる時に私が
「かわいいな～あの猫ちゃん」
と言った。そしてユン君が
「触ってきなよ励僕はここにいるから」
と言って私は
「ありがとう～ちょっとだけ言ってくるね！」
と笑顔で言って私は猫のところに向かった。
そしてパージアスがユン君の前に現れ
「回収は順調ですか？ユンさん」
と聞いた。そしてユン君は
「ああ、１つ目は回収した。」
と言った。そしてパージアスは
「全部そろったら返してくださると
助かります。ああ、それとこのままじゃ
荷物になると思いますのでこのアイテムと
このアイテムを渡しときます。これは武器や
防具を小さくしたり元の状態に戻すアイテムで
このアイテムは収納するやつで最高１００個まで
入れることは可能です。この２つはあなたに
上げましょう。あ、このアイテムは食料を使うときも
大丈夫ですよ。」
と言った。そしてユン君は
「あ・・ありがとう」
と言った。そしてパージアスが暗い顔で
「明るい話はここまでにして。そろそろ

今日あなたに会って話があるのです。」
と言い、ユン君は
「何の話だ？」
と言った。そしてパージアスが言って
「私たちの武器や装備を盗んだ犯人が
分かりました。それは・・堕天使です
堕天使は天使が大嫌いで私たち天使が
保管してた装備や武器を取って封印
したのでしょう。しかし・・最近
知ったのはただ単に封印してたわけではなく
封印して堕天使が装備や武器を使えるやつが
現れたら回収するつもりだったそうです。
しかし・・最近知ったのは２つで
１つ目がその装備や武器を使えるやつが
武器装備を回収に来るはずです。そこまでなら
私たち天使が相手にできますが。もう１つが
問題で１つ目を回収したやつが武器と装備の
使い方を間違えると一振り使うと世界が崩壊
する危険性があるのです。」
と言った。ユン君は
「なんだと・・・」
と言ってパージアスが
「お願いします。今知ったのは元々使えないやつが
儀式で装備や武器を１０か月で使えるようになり
それを世界崩壊につながるし、ある武器で異次元
に行けたりするやつがありまして。前にあなたの
知り合いか分かりませんが魔王クンドンが異次元
に行ったのを覚えてますよね？堕天使は
魔王クンドンをこの世界に戻すつもりなのです。」
と言った。ユン君は

「それを絶対に阻止しないとな・・」
と言って、パージアスは
「ですが・・それを使うのは全部の武器装備を使った
時しか使えない技なので１つでもかけてたら
使えませんのでご安心をください。もし全部そろって
危なかったらユンさんあなたがこの武器装備を壊して
ください・・。」
と言ってユン君は
「それでいいのか？」
と言って、パージアスは
「はい・・・そのときは私たち天使も承知してますので
まあ・・・全部壊れたら私たちは生きていけませんがね
では・・頑張ってください。こちらも協力はさせて
いただきますので・・では」
と言って、私が戻ってきて
「ただいま～やっぱり猫かわいい～」
と言ってユン君は
「おかえり～励それじゃあ買い物に行こうか」
と言って私は
「うん！」
とユン君と歩いて行った。　（第２９章おわり）

水遺跡

買い物を済ませて、宿に戻って
夕ご飯を食べて早めに就寝した
私たちは朝を迎えた。そして
「みんな準備はいい？」
とユン君が言った。私たちは
「うん、大丈夫」
「こちらも準備は大丈夫です」
と答えた。そして私たちは
次　ライトクリスタルソードが
ある水遺跡に向かった。向かってる
途中でセイさんが
「ユンさん次警備システムでこの前の
　ガーディアン見たいな敵が現れたら
　私に任せていただけませんか？」
とセイさんは言ってユン君は
「いいのか？セイ。無理にしなくていいだぞ」
と言ったが、セイさんが
「私も魔法を使ったのはこの前が久しぶりで
　本気を出すのに十分な敵なので・・・
　しかも、ユンさんに無理をさせたくないので
　今回は私が行きますね。」
と言った。ユン君は
「ああ、任せた。サポートはするから何かあったら
　言ってね。」
と言い私たちは歩いて1日かかったそして・・・
「ここが水遺跡ですね」
とセイさんがいいました。ユン君は

「ああ、ここが水遺跡だ行くぞ！」
と言い私たちは入って言った。
そいて入った時私たちは目の前を見て
「こりゃ・・さすが・・水の遺跡・・
道が・・・」
とユン君が言ってセイさんが
「普通の足では渡らせてくれないのですね。
ですが・・魔法使いなら通れるように
なってますね。」
と言ってセイさんが魔法を唱えた。
「この水を凍らせてもらおう。絶対零度！」
と言い水が一気に氷になって私たちが渡れる
道ができた。そしてセイさんが
「行きましょうか」
と言って、私たちは氷の上を歩いて行った。
そして宝箱が入っている門の前に立って
結界があったのでユン君は
「デスペル」
と言い、結界が破れて、門の中に入った
そして宝箱がありあげてみて
ライトクリスタルソードを手に入れて
袋に入れた。そしていきなり現れたのは
水の塊のようなモンスター。
「ウォーターか・・・めんどくさい相手だな」
とユン君は言った。セイさんは
「まあ、何とかなるのかな？では最初に」
と言い呪文を唱えた。
「ライトニング！」
と唱え雷がウォーターに直撃して
やったか？と思ったら傷がなかった。

「やっぱり普通の魔法攻撃や打撃などは
吸収するのか・・・やっかいだ」
とユン君は言った。セイさんは
「大丈夫ですよ。２分で終わらせますので。」
と言い私たちに
「今からの技は全体攻撃なので二人には危ないから
バリアーをはらせていただきます。」
と言い呪文で
「バリアー」
と唱え、さらに呪文を唱えた。
「動きを止めさせていただくダイアモンドダスト！」
と唱え一気に雪でウォーターは凍った。そして
この技はユンさんにも初めて見せる技かな？そして
「相手にこの技を使うのも初めてだ。行くぞ。」
と言って、呪文を唱えた。
「ジャッチメント！」
と言って光のさばきが固まったウォーターに
直撃をして粉々になった。そしてセイさんが
「デスペル」
と言い、バリアーを解いて私たちに
「さて、遺跡から出ましょうか。」
と言い私たちは歩いて行った。　（第３０章終わり）

現在のキャラ紹介３（前書き）

前と同じで紹介だけなので
見たくない方はスルーで。

現在のキャラ紹介３

フラユンス・メディア（王子様で属性全属性）
彼は現在１８歳で魔法世界の王子様
家族は父、母の３人家族
現在川崎励と付き合ってる。昔はただ単に
助けた普通の女の子だったが。だんだんと
励のことが好きになって告白する時の一週間前に
ユンが魔王クンドンにつかまった。そして
付き合ってた１人の女性が励に助けてください。
と言って、励が魔法の世界に行き、キト、ティオと
旅に出て、途中でことりと出会って３人でいろいろ
経験をしてユンを助けたが、最後にクンドンの攻撃を
食らって死んだが励の最後の魔法で生き返った。
そして３年後に告白をした。そして現在パージアスに
励の記憶を取られたから取り返すために旅で武器や装備を
回収をしている。
得意な技　格闘技　（しかし・・あまり使いたくないらしい）

川崎励
ユン君と付き合ってるおんなのこ
もう魔法は使えないがユン君は
一緒にいてほしいというので
自分もユン君の隣にいることが楽しく
ユン君が１人で旅に出るとき私だけ
おいていくのがいやになり危険があっても
私はユン君の隣に居たいっと思い現在
旅に出ている。

セイ・ライザ
セイ・ライザの父親は魔法世界の住人で
父親が魔法世界にいることがいやになり
励が居る世界に行き、そこで出会った
女の子に出会い結婚して生まれた子供
セイは親が遺跡マニアで良く話を聞かされてて
自分も遺跡体験したいと思い、いろいろな
遺跡に旅立ったときにユンと出会った。
そしてユンの魔法世界にも遺跡があるっと
言うことでセイは行きたい！っと思い
親に説得して魔法の世界に行った。
そして現在遺跡を探してる途中で
偶然にあったユンとあって一緒に
行動してうれしかったようだ。
彼の得意技はなく　全魔法が使えるけど
光属性の技を使える人はセイ、ユン、キト
っと後数えられるぐらいしかいない
珍しい技なのです。

キャラ紹介終わり。。
パージアスはまた次回に・・w

新たな仲間？

水遺跡を出た私たちは次に
向かう火遺跡に向かって
歩いていました。
「うちらはなんとか動けるけど
励がね・・」
とユン君は心配しました。私は
「どうして？」
と質問をしました。セイさんが
「火遺跡は水遺跡のように普通の
人が通れないように作られてる
遺跡で氷遺跡、雷遺跡、無遺跡
クリスタル遺跡、泥遺跡も同じで
氷なら滑りやすく、雷なら近づけない
ようにしたり、泥なら動けなくしたり
などがありますね。クリスタル遺跡や
土遺跡などは何にも起きませんが・・」
とセイさんが教えてくれた。そしてユン君は
「俺とセイなら少しなら火の耐性できるが
励は魔法使いじゃない普通の人間だから
危険なんだやけど程度ではすまないからな
どうするかな・・・」
とユン君が考えてた時いきなりセイさんが
「危ない！」
と言って私たちは攻撃をよけたそして
「ほお～遠距離攻撃をよける奴がいたとはな」
と声がしたのでユン君は
「誰だ！」

と叫んだ。そして、1人の女性が現れ
「すまんすまん。本気で当てるわけじゃ
なかったんだ。ただ・・私の力が
どこまで通用するか調べたかっただけ
なんだ。」
と言いセイさんは
「あなたの名前は？そして多分弓使いですね？」
と聞いた。そして彼女は
「ほお・・さすが・・そうだ私の名前は
クリスっと呼んでくれればいいかな？
職は弓使いだけどただの弓使いではない
魔法弓使いだな。もう1つの職は耐性を
作る職人だ。」
と言いセイさんが、
「珍しいですね・・初めて聞きましたよ」
と驚きだった。そしてクリスさんが
「君たちは今からどこに行くつもりなんだ？」
と聞いた。そいてユン君は
「今から火遺跡に行くつもりだ。」
と答えた。そしてクリスさんは
「やめとき。うちの知り合いの魔法使いでも
あそこの火遺跡に入ることが不可能だった。
まあ。私の耐性装備を作れれば関係ないだがな」
と言って。セイさんが
「それはつまり・・・火の耐性装備を付ければ
魔法で浮かさなくても普通に歩いて渡れるの
ですか？」
と質問をしてきたのでクリスさんが
「ああ、実際にその知り合いの人に作って
やらせたら普通に行けたが結界があって

破れなく泣きながら帰って行ったさ」
と言って、セイさんが
「もしよかったら・・・その装備を作って
もらえませんでしょうか？」
とお願いしてたのでクリスさんは
「ん～別にいいけど・・・ただし・・
こちらもお願いしたいことがあるだけど
いいかな？」
と聞いてきたのでセイさんは
「何でしょう？」
と聞いた。クリスさんは
「さっき私の力を確かめてみたいっと言ったが
それを今ではなくていいから終わったら相手を
してほしい。もしよかったら仲間に入らせて
ほしい。君たちはこれで終わり？ではないよね？」
っと聞いたので、セイさんは
「私だけでは決めれないのでユンさんや川崎さんに
決めてもらわないと行けなので・・・」
とセイさんが私たちに向かって聞いたのでユン君は
「どうする？励。自分は仲間は1人でも多く必要だと
思うけど、励はどうしたい？」
と聞いたので私は
「私なら気にしないで。ユン君が決めていいよ。」
と言ったのでユン君は
「じゃあクリスさんこちらから改めてよろしく
お願いします。旅はまだ続きますがこれからも
よろしくお願いします。」
と言ってクリスさんは
「ありがとうございます。ああ、あとさん付けは
やめてくれ・・恥ずかしいから・・あはは・・

こちらこそよろしくお願いします。がんばって
働きますので。」
と言って私たちは新たな仲間クリスさんが入りました。
そして、ユン君は
「あともう少しで火遺跡の近くに行くからそこで今日は
野宿しよう。クリス明日までせめてクリスと励だけでも
いいから火の耐性装備を作ってくれないか？」
と言ったのでクリスさんは
「大丈夫ですよ。てか・・・すぐできますが・・・」
と言ってクリスさんが呪文を唱えた
「バーニング・シールド！」
と唱えクリスさんが
「これでよし。あとは普通に歩くだけでいいよ」
と言い、私たちは
「ありがとう」
と言った。クリスさんは
「いえいえ、気にしないで」
と言って私たちは火遺跡の近くで野宿をして
明日に向かって早く就寝した。（第３２章終わり）

火遺跡

私たちは朝早く起きて朝食を食べて
火遺跡に入る準備をした。そして、
「みんな準備いいか？」
とユン君は質問をしたので私たちは
「大丈夫です。」
と答えた。そしてユン君が
「では入るぞ！」
と言い、中に入った。そしてマグマの
ようなところを歩いてみたら私が
「あ。。暑くない・・」
とびっくりした様子だったのでクリスさんが
「でしょ～バーニング・シールドはマグマ
だって、あまり効かないのよしかも
体熱くないでしょ？これがないと熱く
倒れる人がいるから、この技がないと
こういう場所行けないのよね～」
と言った。そしてセイさんが
「バーニング・シールド以外にも使えるの？」
と聞いた。そしてクリスさんは
「うん、私はそういう呪文できるから
大体ならできるよ。なんで？」
と質問返しされたのでユン君は
「クリスにはいってなかったが、このたびは
遺跡の中にある回収しないといけない
武器装備があるんだ。今回の火遺跡の他に
あとは・・氷遺跡、雷遺跡、クリスタル遺跡、
泥遺跡、無遺跡があるんだ。」

と言ってクリスさんは
「ふむふむ。まあ多分氷遺跡とクリスタル遺跡なら
何にもしなくてもいけそうだけど、雷遺跡、泥遺跡
無遺跡は私の呪文があったほうが楽かもね。
そこは任せてよ。」
と元気な態度で示した。そしてユン君は
「ありがとう。」
と言った。そして結界がある場所について
ユン君が呪文を唱え
「デスペル」
と唱えて結界が破られクリスさんは
「まさか結界が破れる人がいるなんて・・
びっくり・・」
と言って、セイさんは
「多分あの結界を破れるのはユンさんだけだね
この技を習得できる方はいないし。。」
と言った、そしてユン君が
「うちも王子になってからがんばって覚えた
技だよ。あ、ついでにデスペル使えるのは
俺と王様だけ。だけどデスペルも条件があって
すぐに使えるっていうわけではないんだ。」
と言った。そしてそれを聞いたクリスさんが
「へぇ～あんた王子様なんだ・・」
と質問したからユン君が
「一応王子だけど・・普通に接してくれればいいよ
王子だけどまだまだ未熟だからね。あはは」
と笑いながら宝箱がある場所まで行って、
中身を空けるとライトランスが入って行った。
そしてユン君が、
「さて戻ろうか」

と言った瞬間、出てきたのは赤い玉のような敵が現れた
そして、クリスさんが
「あれは・・ボム・・しかしやっかいだ・・
あれの技を食らうと私の呪文のバーニング・シールドを
してても大やけどを起こすぞ！」
と言って。ユン君は
「励、クリス離れててていてセイ協力してくれ」
と言った。そしてセイさんは
「分かった。あれを使うのだな？」
と言って、ユン君は
「ああ、あれを使ってみる価値がありそうだ」
と言ってセイさんが呪文を唱えた。そして
「ダイアモンドダスト！」
と言ってボムが少しずつ氷の塊になって行き
ユン君が呪文と唱え
「チャージ１」
と唱え少し魔力を練って
「零空弾」
と言い、ボムに向かって思いっきり殴る時
「いけー！」
と言ってボムに向かって殴ってそして
粉々になった。そして私たちは外に出ようと
したとき粉々になったやつが溶けて行き
少しずつ１つに固めようとした。そして
クリスさんが
「あれは芯を狙わないといけないのよ
芯は狙うからセイさんもう１回
ダイアモンドダスト使える？」
と言ってセイさんは
「ああ、任せて」

と言ってセイさんは呪文を唱えた
「ダイアモンドダスト！」
と唱え固まろうとしていた部分が
凍って行き、クリスさんが弓を
打つときに呪文を唱え
「凍大牙」
と言って普通の弓の矢がでかく
鋭い矢になってボムの芯を狙って
「いけー！」
と叫んで見事に芯にあたり再生することなく
私たちは火遺跡から出た。（第３３章終わり）

疑問？質問？

新しい仲間クリスさんと一緒に
次のライトダガーを回収するために
氷遺跡に向かって私たちは歩いて行った。
そして近くまで行ったので
「今日はここで野宿しよう。励ごめんな
　氷遺跡が終わったら町で休むからな」
とユン君が私に行った。私は
「私なら気にしないで。ユン君に無理言って
　連れてってもらったから、野宿とか大丈夫
　だよ～気にしないでユン君」
と私は笑顔で言った。ユン君は
「そっか。」
と言った。そして私は早めに就寝した。
そしてクリスさんが
「ユンさん少し話が・・・」
と質問をしてきたのでユン君とセイさんは
不思議そうに見たけどユン君が
「いいよ。うちでよかったら答えますが。」
と言った。そしてクリスさんは
「ユンさんは何のために遺跡のアイテムを
　回収してるのですか？」
と聞いてきた。そしてユン君は
「元々アイテム集めは興味ないのよ。
　だけど・・・」
と苦しそうな言葉で
「今励は俺の記憶だけ持ってるんだ。
　昔俺が魔王クンドンにつかまって

励が1人でここにきてうちの使い魔の
キトやティオと一緒に行動した記憶
途中で会ったことりさんの記憶、そして
自分の親の記憶を天使に取られてしまった。
だから天使が遺跡にあるアイテムすべて回収
したら、励の記憶を戻すっと言う条件で遺跡を
回ってるのさ。」
と言ったときセイさんは
「私は元々遺跡マニアでね。励さんがいた世界で
遺跡を探検したら、ユンさんに会っていろいろ
こっちの魔法世界にも遺跡があるっと言うことを
聞いたので、親に説得して1回しか行けない門で
こちらに来て、まさかユンさんも遺跡を巡るっと
言うことで私も一緒に連れてってもらってるのです。」
と言った。そしてクリスさんが
「話ありがとう。そっか・・川崎さんはこっちの世界の
住人じゃなかったんだ・・不思議だと思ってたんだ
こっちの世界で魔法を使わない人なんて見たことが
なかったから・・・でも話を聞いてやっぱり君たちと
一緒に行動しててよかったよ。ありがとうユンさん
セイさん。これからもよろしくお願いします。」
と頭を下げた。そしてユン君は
「こちらこそこれからもよろしくお願いします。
だけどね・・1つだけ間違ってるよ。励は
例のお父さんはこっちの住人だったから遺伝子で
魔法が使えるはず。しかし・・・長年励があっちの世界に
いたときに魔力がたまって3年前に一気に魔力を使って
しまったから・・・今は使えないだけだと自分は思う。
だから・・励に魔法を教えたら魔法が使えると思うんだ。
まあ・・・本人の記憶は自分だけの記憶しかないから・・

記憶が戻ったら聞いてみるよ・・・自分は大体だけど
魔力を見分けることができるし魔力があるかも少しは
分かる。例えば・・・セイはうちのティオクラスの魔力
つまり・・この自分との戦えるぐらいのレベルかな
クリスは・・・ことりさんぐらいのクラスの魔力
つまり自分と戦えるぐらいはならないけどうまく技を
使えば自分が負けそうになる魔力だね。しかし・・
クリスさんと会ってから数日がたつけど魔力の力が
上ってるのはすごいと思うよ。」
と驚きのようにユン君が言ったので、クリスさんは
「ありがとうございます。そうなんですか・・
もっとがんばってみんなの役に立ちたいです。」
と言った、ユン君は
「そうそう。励には言ってないけどこれだけは守ってね。」
と言ったのでクリスさんは
「何でしょう？」
と聞いたのでユン君は
「絶対に1人で勝とうとはしないこと。例え勝った時の瞬間に
相手がどう攻めてくるかわからないからね。まあ1人で
行きたいときは行ってもいいけど無理だけはしないように
そうしないとね・・励が・・後から怖いのよ。あはは」
とユン君は苦笑しながら言った。クリスさんは
「分かりました。守りますね。その約束では・・
私も寝ます。おやすみなさい。」
と言ってテントに戻った。そしてセイさんが
「ユンさんクリスさんは何か隠し事を持ってるのでは？」
と聞いた。ユン君は
「俺も感じてるだけどまだ大丈夫みたいだよ。
セイ、大丈夫と思うけど何かあった時は
励を頼む。うちは励が守ってくれれば助かるから

何か隠し事があってもいつか話してくれるさ」
と言った。セイさんが
「分かりました。そのときは川崎さんを守ります。
ですが・・無理なことをしたら・・川崎さんが
悲しむからユンさんも無理なことはしないでくださいね」
と言われ、ユン君が
「分かった。危ないことはなるべく避けることにしよう。
だけど・・もし魔王クンドンが現れたときは・・
最終手段を使わせてもらうがな・・・」
と言ってユン君たちは夜を過ごした。　（第３４章終わり）

氷遺跡

「よしみんな、準備いいか？」
とユン君が言って、みんなが
「大丈夫です。」
と言った。遺跡に入る前に
クリスさんが呪文を唱えて
「ブリザード・シールド！」
と唱え、クリスさんが
「これでよし！いいよ～」
と言って私たちは氷遺跡に入った。
そして、寒さが感じなく私たちは
歩いていき私は
「寒くない・・・しかもきれい～」
と言った。クリスさんは
「もちろんさブリザード・シールドは
寒さは感じなくする呪文だからな
もちろんバーニング・シールドを
使ったときは暑さ感じなかったでしょ？」
と聞いたので私は
「そういえば、そうだった。すごいなぁ～」
と関心したように言った。そしてクリスさんは
「ありがとう。川崎さん。」
と言って私たちは歩いて行って、結界の前に
行って、ユン君が
「デスペル」
と言って結界が割れて私たちは部屋に入り
宝箱の前に立ったそして中を開けたら
ライトダガーを袋の中にいれて帰ろうと

したとき魔物が現れた。そして魔物が
話しかけてきた。
「そこのお前たち、アイテムを置いていけは
言わないからちょっと話だけでも聞いてくれ」
と言って、ユン君たちはその言葉を聞いてびっくり
してセイさんが
「分かりました。話とは？」
と聞いてきたので、魔物が
「ふう・・良かった・・お前たちがすぐに
攻撃しなくてとても助かった・・えーと
まず、名前から言うわ、私はキャラロット
と呼んでほしい。そして・・私から頼みが
ある・・聞いてくれるか？」
と聞いたのでユン君は
「戦わないなら助かるけど頼みについて
考えないといけないから一応聞いてそこから
考えよう。」
と言った。キャラロットは
「ありがとう。俺の頼みはここから出してくれないか？」
と言った。そして私たちは
「え・・・」
と唖然した。キャラロットは
「まあ・・唖然は仕方ないけど・・理由はな
遺跡ができたときに何者かが私をここに
封印されて・・出たいだけど出れないし
アイテムを部屋から出たら私を操るやつが
お前たちに攻撃をしてしまうのよ・・
だから・・私の封印を破ってほしい・・だが・・
何かないか？頼む・・・」
と言ったので私がユン君に

「ユン君・・・助けてあげて・・かわいそう・・」
と言ったので、ユン君がキャラロットに聞いた。
「外に出たらキャラロットはどうするつもりだ？」
と聞いたので、キャラロットは
「もう私の仲間がいないしな・・できれば・・
お前たちの仲間になりたい・・だけど最低
ここから出れればいいのよ・・・・」
と言った。そして何か決心したようにユン君が
「お前の封印を1つだけ解除することができる」
と言った。キャラロットは
「おお！！それは何でしょうか？」
と言って、ユン君が
「それは私たちの中で精霊の契約をすればお前は
自由になれる。しかし・・危ないときに呼び出したり
することもあるがな・・」
と言った。そして・・キャラロットは少し考えて
「そっか・・だけど・・あなたたちは・・強いからな
私と契約してくれる人が・・・いないですね・・
まあ・・私が制御してるうちに倒してください・・」
と言った。しかしユン君は
「大丈夫さ契約なら1人いる。励お前が契約して
やってくれ」
とユン君が私に行って
「ぇ・・私は・・魔法使えないのよ・・」
と言って、ユン君は
「大丈夫、契約は魔法使う人が多いけど
使えない人でも契約はできるのさただし
励がキャラロットと契約したいっと言うならな」
と言って私は
「それなら私がやってもいいよ。よろしくね

キャラロットさん」
と言って、キャラロットは
「ありがとうございます。これからあなたを
マスターと呼びますね・・ありがとうございます。」
と言ってユン君は
「励このリングをつけて今から呪文で契約の呪文を唱える
から」
と言って私はリングをつけてユン君は呪文を唱え
「ラヴィッシュ」
と唱えた。そしてユン君は
「契約終了これで普通に出れるよ。励もし
危険なことがあったらリングにキャラロット出てきて
っと言ったらでてくるはず。まあやってみないと
分からないから一度自分たちは外に出てみよう。」
と言って私たちは外に出てみた。そして私は
「キャラロット出てきて。」
とリングに願ったら私たちの前にキャラロットが出てきて
キャラロットは
「おぉ・・・すごい・・やっと・・外に出れた・・
本当にありがとう」
と涙が出てきてユン君は
「このリングは精霊と契約ができるアイテムなんだ
だけど普段は契約は魔法使いの魔力が削られる
から契約するときは精霊を決めることが多いけど
このアイテムは3つまで精霊の契約ができるし
精霊はこのリングの中に入ることもできる。
しかし・・魔力がないが・・体力は消耗が
激しいから危ないときだけ使うこといいね励」
と言って私は
「うん。分かったよろしくねキャラロットさん」

と言ってキャラロットは
「よろしくお願いします。マスター」
と言った。そしてユン君は
「あ、そうそうこれだけ言っとく出なくても
精霊はテレパシーが使えるはずだから
話したいときはテレパシーを使うといいよ
それなら疲れないから。まあうちとセイと
クリスは魔法があるからいいだけど励が
魔法使えないし今後危ないことがあるあら
心配だったんだ。だから契約してくれて
本当に助かった。」
と言ってキャラロットは
「いえいえ、こちらこそ私を外に出してくださって
ありがとうございました。これからはマスターが
危険なことがあったら守りますのでよろしくお願いします。」
と言った。そして私たちは氷遺跡で戦うことがなく、
無事に次の遺跡に向かって歩いて行った。（第３５章終わり）

懐かしい味？

私たちの新たな仲間キャラロットさんが
仲間に入って私たちの旅は楽しい旅に
なってきました。私の使いとして
キャラロットさんが仲間になって
私とキャラロットさんは話をしていた。
「キャラロットさんは今まで1人で
あそこに閉じ込められたけど悲しく
なかったの？」
と私はキャラロットさんに質問をした。
キャラロットさんは答えて、
「そうですね。悲しいっと言うよりも
誰も私のことを助けようとして
くれなかったのが悲しかったかな・・
だから・・今回も・・駄目だと思って
ましたが・・・まさか・・私と一緒に
連れてってもらえるとは夢にも思いま
せんでした・・・本当に助かります。」
とキャラロットさんは私たちにテレパシーを
して、ユン君は
「気にしないでくれ、元々うちとセイで
励を守りながら戦うと大変だったし
クリスが入ってもいつ危険があったら
励を守ることができないかもしれない。
そして・・・旅の途中でうちが知ってる
精霊と契約しようかと思って、このリングを
持ってきたのはいいが・・まさか・・早めに
契約できるとは・・うちも驚いたよ・・

キャラロット。無理に戦わなくてもいいから
励を頼む・・お願い。」
と言ってキャラロットさんは
「こちらこそ。契約したこととマスターと
契約できたのでそれは守らせていただきます。」
と言って、私は
「ん～マスターはやめてほしいかな？ちょっと
恥ずかしい・・・wしかも私は何にもできないから
迷惑かけてしまうよ・・・」
と恥ずかしながら私は言った。そしてキャラロットさんは
「じゃあ・・私はなんといえばいいのですか？」
と言ったので私は
「ん～じゃあ～私のことは励って呼んでね♪。うちは・・
キャラロットさんをキャロさんって呼んでいい？」
と言ったのでキャラロットさんは
「分かりました励。もちろん励が呼びやすい呼び方で
構いませんよ。」
と言った。そして雷遺跡の近くについてユン君は
「ここで野宿をしよう。」
と言い休憩をして私は料理をした。そして夕飯
「みなさん～今日は私たちの世界でよく食べる
カレーライスを作ってみたよ～。ただ・・
魔法世界ではカレー粉がなかったから・・・
代用として作ってみたから辛すぎたらごめんね」
と私は言ってみんな食べてみた。そしてセイさんが
「懐かしい味ですね～私も昔のころ母親からよく作り置き
して結構食べてましたね～結構おいしいですよ川崎さん」
と言ってユン君は
「カレーライスと言うのか・・・初めて食べた・・
結構おいしい・・励はよく作るの？」

と聞かれたので、私は
「う・・うん・・一応ね・・女の子だから・・
しかも・・いつかユン君に作ってあげたかったし・・
いつか結婚とかしたら・・料理作れないかもしれないから
早めに食べさせたかったの・・・」
と恥ずかしそうに私は言った。そしてクリスさんは
「これはおいしいですね。私も結構好きな味です。
川崎さん今度私にも作り方教えてください。」
と言ったので私は
「うん、いいよ～今度一緒に作ろう♪」
と言ってユン君は
「励もし城に戻ったりしてまた料理とかしたかったら
遠慮なく言ってね」
とユン君が言ってくれたので私は
「うん、ありがとう～まあ・・カレーライスも
おいしいけど、私たちの世界でまだまだおいしい
料理がたくさんあるよ～今度作ってあげるね～
まあ、なるべく食料が減らないような料理を
作りますので～」
と言ってセイさんが
「川崎さん。肉じゃがとか作れますか？」
と言ってきたので私は
「うん、大体の料理は作れるから肉じゃがも
代用でいいなら作れると思うけどなんで？」
と質問をしたのでセイさんは
「肉じゃがはおばあちゃんの得意料理なんだ
しかし・・母親は肉じゃがを作るのが苦手で
あまり食べれなかったから・・・いつかごちそう
してください・・」
と言ったので、私は

「そっか～じゃあ今度作ってあげるね～楽しみに
　しててくださいね～」
と言って私たちはご飯を食べた。そして
食器を洗って私たちは早めに明日の準備をして
明日に向けて早く就寝をした。　（第３６章終わり）

雷遺跡

朝が迎えて私たちは朝ごはんを食べ
雷遺跡の中に入った。入った時クリスさんが
「一応入る前にライトニング・シールドを
かけましたが・・絶対に雷に直接あたらないで
ください・・」
と言ったので、私たちは
「分かった」
と言った。そして雷に当たらないようによけて
結界のところに行きユン君が結界を解いて
私たちは宝箱の近くまでに言った。
そして、中に入ってたのはライトシールドが
ありユン君が
「これで5個目か・・・あと3つですべて
回収する・・・」
と言って私たちは戻ろうとしたら現れたのは
雷の精霊サンダーバードが現れ
「ほお～ここまでよく無傷でこれたな・・・」
と言ってユン君は
「やばいな・・これは・・伝説の雷の精霊
サンダーバードだ・・やっかいだ・・」
と言ってサンダーバードは
「ほお、俺のことを知ってるのか・・・」
と言って、ユン君は
「ああ・・この魔法の世界で伝説の精霊が
4属性もいるってことは知ってる・・
火属性、水属性、風属性、雷属性で
火属性の精霊がファイアーバード

水属性の精霊がウォーターバード
風属性の精霊がウィンターバード
そして雷の属性サンダーバードの伝説
精霊がいるっていうのは知ってたが
ウィンターバードが聞いた話では
もう他の属性は絶滅したっと聞いたが・・
まさか生きていたとは・・」
と言ったのでサンダーバードは
「ほお、おまえさんはウィンターバードの
契約者なのか？まあうちは絶滅したって
言うよりつかまって封印され・・ここに
閉じ込められただけなんだが・・・」
と言ったのでユン君は
「そうだったのか・・・えーとうちは契約は
してません。しかしウィンターバードとは
ウィンターバードが危険だったときに助けたので
契約っていうよりも仲良くなっただけかな？
ここにいる励っていう女性の契約させようかと
思ってるよ。」
と言った。そしてそれを聞いたサンダーバードは
「ほおウィンターバードがまだ生きてるとは・・
まあ・・お前が言ってることでファイアーバードと
ウォーターバードはつかまって逃げ出したのはいいが
殺されてしまった・・・まあ俺もいつここに出れるか
分からないがな。お～とお前らが部屋を出たら俺が
命令で攻撃してしまうから行く前に俺を殺してくれ・・」
と言った。そしてユン君は
「じゃあ俺らと一緒に行かないか？」
と聞いたのでサンダーバードは
「そんなことができるのか？」

と聞いたのでユン君は
「ああ、契約すれば自由の身になれるとおもうよ
契約だから助けを求めたら召喚で呼び出しを
すると思うけど・・・」
と言って、サンダーバードは
「それでも構わん・・ここを外に出れればそれで・・」
と言ってキャロさんがリングから出てきて
「サンダーバードさん私も氷遺跡に封印されて
この方に助けられて外に出られました。そして私は
この励を守ることに決心してこの方たちに協力をしています
サンダーバードさん一緒に行きませんか？」
と聞いたのでサンダーバードは
「俺と仲間になってくれないか？」
と聞いたのでユン君は
「俺に言われてもな・・励どうする？俺は自分で
言ったが、決めるのは励お前だ」
と言ったので私は
「もちろん、契約します。これからもよろしくおねがいします
サンダーさんって呼んでいいですか？」
と聞いたのでサンダーバードは
「ああ、呼び方は決めてもいい。よろしくなマスター」
と言ったので私は
「マスターは恥ずかしいし、何にも使えないから・・・
励って呼んでほしいかな？」
と言ったんでサンダーバードは
「ああ、分かったじゃあよろしくな励」
と言って私は、
「うん、よろしくねサンダーさん」
と言って私たちは新たな精霊の仲間サンダーバードと
仲間になって部屋を出た。　（第３７章終わり）

パージアスからの真実

雷遺跡を出た私たちでユン君は
「もう遅いから今日はここで野宿で
明日には次の遺跡に向かうぞ」
といい、私たちは疲れもあって
早くご飯を食べ、就寝をした。
そしてユン君とセイさんが
そろそろ寝ようとしたときに
気配がしたのでユン君とセイさんは
戦闘の準備をしていたら
「ちょっと待ってください。」
と出てきたのはパージアスさんでした。
そして、戦闘準備をやめたユン君とセイさんを
見てパージアスさんは
「すいませんいきなり現れて」
と言って、セイさんは
「まあ・・こちらもいきなり戦闘したら
川崎さん達が危険な目に会うから戦闘しない
人が来たので良かったですよ。」
と言って、パージアスは
「それを言ってくれると助かります。
それとあなたたちに報告がありまして・・」
と言ったので、ユン君は
「どうした？なにかあったのか？」
と言ったのでパージアスは
「前に話したように堕天使があなたたちを
襲うかもしれないっと言うことを話したと
思いますがもしかしたら・・近くにいるかも

しれません。気を付けてください。こちらも
何かあったらすぐ助けられるようにがんばり
ますのであなた方は回収の方をお願いします。」
と言ったので、ユン君は
「ああ、分かった、報告ありがとうな。」
と言って、パージアスは
「あ、それと・・もう1つ・・報告することが
ありまして・・それは元々ライト武器装備は
すべてが1つになっての発揮があるんですが・・
それが・・今我々の調べで分かったのは
堕天使はすべてじゃなくても1つの武器や
防具で力を発揮する力の持ち主を見つけたらしく
今後あなた方に襲いかかってくるかもしれません
気を付けてください。そして我々が何とか伏せぐ
手を考えますので・・もしそれもなく危なくなったら
今回収した武器装備を破壊してください。」
と言われたので、ユン君は
「パージアスはそれでいいのか？」
と聞かれたのでパージアスは
「我々はそのときは仕方ないと思ってます。
それと元々この武器装備は使わなく平和で
終わりたいので。気にせずに危ないときは
壊してください。では私はこれで、後少し
ですが・・がんばってください。集まったら
あの子の記憶は返しますので・・では失礼」
と言ってパージアスは姿を消した。
「ユンさんこれから大変だけど私はユンさんを
手伝いますので無理だけはしないでください。」
と言ってユン君は
「ああ、なるべく無理はしないようにするさ

俺たちも早く寝ようか」
と言ってセイさんは
「そうですね。明日も早いので早めに寝ましょう。」
と言ってユン君とセイさんも就寝した。（第３８章終わり）

現在のキャラ紹介４（前書き）

前と同じで紹介だけなので
見たくない方はスルーで。

現在のキャラ紹介４

クリス
魔法世界で珍しい弓魔法使い
しかも属性耐性の呪文を唱える
珍しいキャラ。しかし・・
彼女の真実を知らないユン君たちは
今後クリスの本当の真実を知ることに
なります。今後期待？
好きな言葉　ありがとう。

キャラロット
氷属性の精霊。前に普通の生活を
してたが・・誰かにつかまり氷遺跡に
封印され宝箱の守りとしてつかまって
しまった。そしてユン君たちが来て
頼みをしたところまさかの精霊の契約と
して川崎と契約することにびっくりしたが
ありがたさで契約をした。いまだに
キャラロットの力は分からないので
今後に期待。そして川崎さんはキャラロットを
キャロっと呼んでいる。

サンダーバード
伝説の雷属性。キャラロットと同じく
つかまり雷遺跡に封印され宝箱の守りとして
つかまってしまった。伝説の４属性で
火属性の精霊がファイアーバード
水属性の精霊がウォーターバード

風属性の精霊がウィンターバードがいましたが
ウィンターバード以外はつかまる時に
抵抗したので殺されてしまった。
そしてユン君たちが来て助けてもらって
川崎と契約して外に出れることができた。
今後どうなっていくだろうか？

パージアス
天界での上級天使らしい？詳しい情報は
まだわからないけどユン君たちの連絡役と
して時々会いに行っている。天使は人と
接触は禁止されているが緊急事態なので
仕方なく協力をしてもらうために川崎の
記憶を取るような行動をして、パージアスは
早く記憶を返したいつもりだけど・・
今後どうなることやら。もしかしたら
パージアスもユン君たちと一緒に
戦うのか？それともパージアスは
ユン君たちと戦うのか？今後の期待。

以上。今後の話は？
あと残り少ないが・・新たに武器装備を
狙ってくる堕天使の正体は？
そして・・・川崎の記憶を戻るのか？
魔王クンドンはまた復活して戻ってくるのか？？
どうなるのか？？？
っていうわけで・・・のんびりと・・
書きたいので・・遅くなったりしますので
そのときはすいません・・・。では。

クリスタル遺跡

私たちは新しい仲間
しかも伝説のサンダーバードさんが
仲間になり、次の遺跡クリスタル遺跡に
向かって歩いてたらサンダーバードさんが
「すいません。励少しの間私はずーと
狭い場所で封印されていたので
少しの間ちょっと気になる場所が
あるのでそこに言ってもいいでしょうか？」
と聞いてきたのでユン君は
「励お前が決めるといい。一応キャラロットや
サンダーバードのマスターは励だからな。
何かあったらこのリングに出て来て。っと
言えば召喚されるから心配いらないよ」
とユン君が言ったので私は
「うん、いいよ～サンダーさんも狭いところに
何十年もいたからね～1人で大丈夫？」
と言われたのでサンダーバードは
「サンダーさんか・・いいですね。はい、私なら
大丈夫ですよ・・。もし何かあったら私を
呼んでください。私はあなたを守る役目も
ありますので・・・では。」
と言ってサンダーバードは私たちから離れて行った。
そして私はキャロさんに
「キャロさんも行きたい場所などがあったら言ってね」
と言ったのですが、キャラロットさんは
「いえ・・もう私がいた場所は・・・誰もいないので
行っても無駄でしょう・・・だけど・・今私は

励さん達と行くのが楽しみのでここにいますね。」
と言って、私は
「分かった。」
と言ってクリスタル遺跡に向かって歩いて行った。
そして、着いた時には暗くなって今日はここで野宿
で私達は夕食の準備をして私はまえにセイさんから
肉じゃがを作ってほしいといわれたので作ってみた
そして
「みんな～夕御飯できたよ～。今日はセイさんが
リクエストしてみた肉じゃがを作ってみたから
食べてみて～」
と言ってみんなは食べてみてセイさんが
「川崎さんおいしいです。ありがとうございます。」
と言って私は
「でも・・肉じゃがはおふくろの味っていうけど・・
味は違うからね・・大丈夫？」
と言ってセイさんは
「いえ・・味は気にしませんが・・ただ・・こっちに
行くときは・・門の制限もあり・・もう二度と
母親の手料理が食えないので川崎さんのおかげで
懐かしい味が味わえました。ありがとうございます。」
と言って、私は
「そう。それはよかった。みんなもどんどん食べてね～
なんか食べたいものがあったら作ってみるから～」
と言って、私たちは夕御飯を食べて就寝をした。
そして朝、私たちはクリスタル遺跡に入った。
いつもどおりに歩いて、結界のところまで行って
結界を解除して中に入って行きました。そして
中に入っていたのはライトヘルムが入って行って
部屋を出ようとしたらクリスタル遺跡の守りシステムが

発動し、私たちに向かって攻撃を仕掛けました。
そして、ユン君は
「これはやっかいだな・・・」
と言ってセイさんも
「そうですね～土遺跡の敵もそうですが・・
土よりクリスタルは硬いから・・どうやって
行くかな・・・」
と言ってユン君は
「セイ。ファイアーストーム使えるか？」
と聞いたのでセイさんは
「ええ、使えますが・・あれは上級魔法なので
少し時間かかりますよ？」
と言ってユン君は
「了解、じゃあ・・それまで時間を稼ぐから
お願い。そして最後は俺が何とかするから」
と言ってユン君は呪文を唱え
「ファイアーウォール」
と唱えモンスターの周りを火柱で動きを止めて
セイさんが呪文を唱え終わって
「ファイアーストーム！」
と言って敵回りが炎の渦に巻き込んだ時
ユン君は魔力を練った
「チャージ1」
「チャージ2」
「チャージ3」
と貯めて行き、呪文を唱え
「ヘイスト」
「シャープネス」
そして、ファイアーストームの効果が消えると
一気にユン君が敵の近くに行き

「これで終わりだ～！」
と言ってユン君は
「粉砕烈火撃」
と言って殴って敵は粉々に割れてユン君は
「もう終わったよ。さて外に出ようか」
と言って私たちは部屋を出た。（第４０章終わり）

しばしの休憩

クリスタル遺跡に出た私たちでしたが・・
遺跡を出たとたんにユン君がふら～っと
してたので、私が
「大丈夫？ユン君」
と心配していたのでユン君は
「少し魔力使いすぎたかな？あはは・・」
と言って少し歩いていてセイさんが
「顔も悪いですね・・ちょっと失礼」
と言ってユン君の頭の額に手を当てたら
すごく熱くてセイさんが
「これはいけませんね・・・熱がありますね。
ユン君もう少しがんばれますか？もうすこし
したら町に着くので、そこで休みましょう」
と言ってユン君が
「ああ・・・すまない・・お願いするよ」
と言ってセイさんがユン君を乗せて私たちは
急いで行った。そして町について宿に向かった
そしてセイさんが
「私とユン君は同じ部屋で川崎さんとクリスさんは
同じ部屋でいいでしょうか？」
と言ったので私は
「私は構いませんが、ユン君の看病を手伝わせて
くださいお願いします。」
と言った。そしてセイさんは
「分かりました。」
と言って私とクリスさんは部屋に入って荷物を置いたら
私はユン君がいる部屋に向かって急いだ。そして

入った時にセイさんが魔法で医者を呼ぶ連絡をして
終わった後にセイさんが
「多分熱だと思いますが・・・私は医者ではないので
判断できないから私たちは今やれることをやりましょう」
と言って私は宿の人に氷と水を頼みに行き氷枕を作って
ユン君の頭の下にしいた。そしてユン君が
「気持ちいい・・ありがとう・・励、セイ。そして
迷惑かけてごめん。」
と言った。私たちは
「気にしないでください。早く元気になってね。ユン君」
「気にしませんよ。熱とかは仕方ないことですし、
困ったことがあったらお互い協力しあうのが普通ですので
今は休んでください。」
と言った。そしてユン君は
「ありがとう・・。」
と言って少し眠った。そして数分後医者が来て診断をした
結果は
「あなたが言うように熱ですね・・疲れといろいろ1人で
抱え込んだこともあったでしょう。2日は休んでたら
治りますよ。これは薬です。」
と言って医者は部屋を出た。そして夕食私はセイさんに
「ユン君の料理を作るから2人は食べて。私はユン君と
食べるから。」
と言った。それを聞いてセイさんは
「分かりました。お願いします。川崎さんしかし・・・
川崎さんも無理はしないようにしてください。
疲れもあるし・・・川崎さんもゆっくりしてくださいね」
と言ってセイさんは部屋を出た。そして私は宿の人に
頼みユン君にお粥を作って食べさせた。
「ふうふうは～いあ～ん」

と言って、ユン君は
「あ～ん。もぐもぐ・・おいしいよありがとう励」
と言って私は
「気にしないで～は～いあ～ん」
と言ってゆっくりだけどユン君と一緒に夕ご飯を
食べてセイさんが戻ってあとはよろしくお願いします。
と言って私は部屋に戻った。そして私は
「早く元気になるといいな～」
と言って私は早めに就寝をした。（第４１章終わり）

ユン君復活！

ユン君が熱を出して1日が過ぎた。
私は、セイさんと交代しながら
ユン君のお世話をして休憩をしていた。
「励、セイすまん・・お前らも
無理をせずお前らも休んでくれ」
と言ったので私とセイさんは
「私なら大丈夫だよ。ユン君には
毎回迷惑かけてるし・・・それに
お世話が好きだから・・気にしないで」
「私なら大丈夫ですよ？まあ・・川崎さん
と交代のときにゆっくりしてたりして
体は十分休んでるのでユンさんも早く
良くなってまた旅に出ましょう。」
と言ってユン君は
「ありがとう。」
と言って眠った。そして・・・食事のときは
私がユン君のお世話をしてそれ以外をセイさんが
ユン君のお世話をした。そして次の日
私が起きてユン君の顔を見に行こうとして
部屋を見に行ったらユン君の姿がなく
セイさんもまだ寝ていてたので私は焦って
宿の外に出た。そして歩きまわるとユン君の姿が
見えて私は急いでユン君のところに走った。
それを気付いてユン君は
「おはよう。励」
と言って私は
「はあ・・はあ・・おはようユン君・・探したのよ」

と言ってユン君は
「ごめんごめん・・・すっかり元気になったから町の
風景を散策してもう少ししたら宿に戻ろうかと
思ってたところだよ。」
と言って私は
「そっか～元気になって私もすごくうれしい～」
と私はユン君に抱きついた。そしてユン君は
「ありがとう励。励とセイのお世話をしてくれた
おかげでゆっくり休めた。励は疲れてはない？」
と言って私は
「うん。私はゆっくり休んだから大丈夫だよ～」
と言ってユン君は
「そっか。まあ復活してすぐに出発はやめとくから
明日には出発するから励はこの町でどこに行って
見たい場所とかある？」
と言って私は
「ん～・・・私は・・見てみたい場所はあるだけど・・」
と言ってユン君は
「どこ？」
と質問したので私は
「洋服と料理器具かな？こっちの洋服見た目がかわいいし
詳しく見たことがないから少し見てみたい。料理器具は
あるといろいろな料理ができるから・・少し見てみたいな
っと思っただけ～だけど私はユン君のそばだけでもすごく
満足よ？」
と笑顔で言った。そしてユン君は
「よし、1回戻って朝ごはんを食べたら一緒に回って行こう！」
と言って私は
「うん！」
と言い1回宿に戻って朝ごはんを食べ、準備をして私とユン君は

まず洋服に行きその後料理器具を見て私が見たものをユン君が全部買ってもらったのはびっくりしたけどその後旅に必要な材料を買って行って今日まで宿で過ごした。そして・・・朝

「みんな準備はいいかい？」

と言って私たちは

「大丈夫です！」

と言い、私たちは次の遺跡に向かって元気で楽しく旅を続けた。

ユン君復活！（後書き）

もしかしたら・・
毎日更新が無理な可能性が
あるかもしれません。
その時はすいません・・
なるべく毎日更新できるように
がんばります＞＜

泥遺跡

私たちの遺跡で回収するまで残り2つとなり
次の遺跡泥遺跡に向かって歩いて行った。
そして近くまで行ったので、毎回のことで
「今日はここで野宿して明日入るぞ！」
とユン君が言って私たちはここで野宿をして
私は町で買った食材で私のいる世界での食材では
ないけど魔法世界の食材を私たちのところの
料理をアレンジして作ってそれを食べて
私たちは就寝した。そして朝私たちは
泥遺跡に入った。そして泥まみれの道を
入ろうとした私をユン君が
「まて、励」
と言って私を止めました。そしてユン君が
魔法で少し長い棒を出して泥の中に入れてみて
棒の図りで調べた。そしてユン君が
「深いな・・どうするか・・」
と言ってセイさんは
「泥を氷などで凍らせばいいのでは？」
と言ってユン君は
「そうだな・・それが一番いい方法かもしれないな
　じゃあやってみるか」
と言って、ユン君とセイさんの魔法を唱えようと
したときにキャラロットさんは
「待ってください。ここは私に任せてください」
と言ってユン君は
「キャラロットいいのか？」
と聞いたんでキャラロットは

「ええ、ユンさんとセイさんはここで無駄な魔力は
しないほうがいいと思います。わたしなら精霊だし
魔力消費もあまりないので・・・」
と言ってキャラロットは魔法を唱えた
「絶対零度！」
と言ったとき泥が一気に氷に塊私たちはびっくりした。
そしてユン君とセイさんは
「す・・・すごい・・俺たちも絶対零度は使えるけど
こんなにも威力が違うとは・・さすが・・氷の精霊・・」
と言ってそれを聞いたキャラロットは
「ありがとうございます。助けてもらった恩はまだ
返せないからこれからも協力します。」
と言ってユン君は
「ああ、助かるよ。お願いします」
と言って私たちは結界がある所まで歩いていき結界を破って
部屋の中に入った。そして宝箱のアイテムを回収して
部屋を出ようとしたときにモンスターが出て来て
私たちを襲ってきた。そして・・・キャラロットさんは
「セイさんかユンさんどちらか私以外にバリアーを
貼れますか？」
と聞いてきたのでセイさんが
「私使えますよ」
と言ったのでキャラロットさんは
「今からこの部屋全体に絶対零度をしますので
バリアーを貼ってください。」
と言ってセイさんは
「分かった。お願いするよ。」
と言って私たちの周りにバリアーを貼り、
キャラロットさんは魔法の呪文を唱え
「絶対零度！」

と言ってこの部屋の泥をいっきに氷にした。
そして、キャラロットさんは
「今です！」
と言ってユン君は
「ありがとう。キャラロット」
と言い魔力を練った。そして
「チャージ１」
と力をためて一気にモンスターに狙って
「弾空弾」
と言ってモンスターになぐりモンスターは
絶対零度で固まってたので粉々になった。
そして私たちはそのまま部屋を出た。（第４３章終わり）

伝説の精霊

泥遺跡を出たとき私は少し震えていた
「大丈夫か？励？」
と心配してくれた。そして私は
「うん・・少し寒かった・・だけど
大丈夫よ。」
と言って、キャラロットは
「すいません・・励さん・・」
と言ったので私は
「気にしないで・・みんなをまもってくれて
ありがとう～」
と言ってユン君は
「励温まるまでこれを来てくれ」
と言ってユン君が上着を貸してくれて
「ありがとう～助かる。」
と言って私は上着を借りて少し歩いていたら
「ただ今戻りました～」
とサンダーバードさんが帰ってきて私のリングの
中に入って行った。そして私は
「おかえりなさいサンダーさん。久しぶりの
遺跡から出て」
と言ってサンダーバードは
「ええ。私は昔住んでいた場所に行ってまして。
私の知り合いがまだいたので少し話してきました。
本当にありがとうございます。これからは
自分もみんなの役に立てるように頑張りますので
よろしくお願いします。」
と言って私たちは

「こちらこそよろしくね」
と言って私たちは歩いて行った。そして歩いて
1日がたって着いたところは大きな森の前だった。
そして私たちはなぜここにいるのだろう？
と思ってユン君が言った。
「みんな、少し寄り道をしてしまうが構わないか？」
とユン君が言ったので
「私なら大丈夫ですよ？」
「ユンさんと一緒に行ければいいので」
「私はユン君と一緒にいればいいよ～」
と答えて、ユン君は
「ありがとうみんな。今からみんなに紹介をしたい
精霊がいるんだ。それまで付いてきて。」
と言って私たちはユン君の後ろを歩き森の奥まで
入って行った。そして・・・ユン君が
「お～い会いに来たぞ～どこにいるんだ～～？」
と言って私たちの前に現れたのは
「お久しぶりです。ユンさん5年ぶりでしょうか？
それと・・・今日は何の用事で来たのでしょうか？」
と言ったのは緑で美しい鳥さんが現れてユン君が
「ああ、5年ぶりですね。今回はお前の力が必要なんだ
ウィンターバード」
と言ってウィンターバードさんは
「ほお・・私の力が必要なのはとても重要なのですね。」
と言ってユン君は
「ああ、今回はうちの彼女・・川崎励が魔法使いじゃないから
ウィンターバードと契約してほしい。」
と言ってウィンターバードは
「まあ・・・ユンさんの願いはかなえましょう。
で・・一応私以外に精霊は居ますの？」

と聞いたのでユン君は
「ああ、今2回励と契約してるよ。励サンダーバードと
キャラロットを出してくれないか？」
と言ったので私は
「出てきて」
と言ってキャラロットさんとサンダーバードさんが
出てきてウィンターバードさんが
「サンダーバード・・お久しぶりですね・・
もう１００年ぶりですか？まだ生きてて
とてもうれしいです。」
と言ってサンダーバードさんが
「ユンさんから聞いてました。ファイアーバード
ウォーターバードはもうこの世にはいないですが・・
しかしあなたに会えて本当に良かったです。
これからよろしくお願いします。」
と言ってキャラロットさんは
「はじめまして私は氷の精霊キャラロットと呼びます。
これからもよろしくお願いします。」
と言ってウィンターバードさんは
「キャラロットさんこちらこそよろしくお願いします。
確か・・・あなたを会うのが初めてですが・・・
昔ウォーターバードからあなたの噂を聞きました。
こちらこそよろしくお願いします。」
と言ってウィンターバードさんは私に
「川崎さん私で良かったら契約してください。
よろしくお願いします。」
と言って私は
「こちらこそよろしくお願いします。ウィンターバードさん」
と言って私たちは新しい仲間ができて次の遺跡に向かって
歩いて行った。　「第４４章終わり）

無遺跡

私たちは新しい精霊の仲間
しかも伝説のウィンターバードさんと
契約をして最後のアイテムを回収しようと
私たちは無遺跡に向かって歩いて行った。
そして3日間かかって着いて、私たちは
準備をして無遺跡に入って行った。
入ってみると・・・周りが暗い・・私は
「暗いね・・・」
と言った。そして・・ユン君は
「無遺跡だからな・・何にもないのが
　危険もあるから・・気をつけてね」
と言って私たちの周りも私たちも
分かりずらいままで歩いて行って
今回はなぜか結界が貼ってなく
私たちは入って行った。そして
私たちは最後のアイテムを回収して
部屋に出ようとしたときに私たちは
空気のような攻撃を食らった。そして
ユン君は魔法を唱えて
「フラッシュ！」
と言って一瞬だけ明るくなって一気に
暗くなりユン君は
「っち・・なんとか・・相手の正体が
　分かれば・・・何とかなるだけどな・・」
と言いユン君が私を守りながら行った。
そしてサンダーバードが
「私が行きましょう。」

と言いリングから出て全体が一気に
明るくなり敵が見えたところで、サンダーバードは
「サンダーボルト！」
と言って敵に直撃を食らったが・・・
無傷だった・・そしてユン君は
「やっぱり無遺跡だから・・・属性魔法が効かないか・・
空間呪文をするから・・少し粘ってくれ」
と言ってユン君は呪文を唱えた。
サンダーバートさんが攻撃してる時にセイさんが私を
守ってくれて、クリスさんもサンダーさんの補助しながら
戦っていた。そして・・
「デジョン！」
と言い、敵は吸い込まれ消えていった。そしてユン君が
「ふう・・自信がなかったが・・・うまくいってよかった。
みんな大丈夫か？」
と言って私たちは
「大丈夫！」
と返事をして私たちは部屋を出た。（第４５章終わり）

クリスの正体

すべて私たちは回収してそして・・
現在城に戻って数日たった。
そして私とユン君はパージアスに
あった。パージアスは
「お疲れ様です。」
と言ってユン君は
「この中にライトウェポン、
ライトクリスタルソード、
ライトランス、ライトダガー
ライトシールド、ライトヘルム
ライトアーマー、ライトリストが
入ってるはず。受け取ってくれ。」
と言ってユン君はパージアスに渡して
パージアスは中身を出して、
「はい・・すべてあります。本当にありがとう
ございました。では・・約束通り彼女の記憶を
返しましょう。」
と言いパージアスが私に呪文をかけて私は気を失って
パージアスは
「これで彼女のすべての記憶を戻った。気が付いたら
彼女のあなた以外の記憶を思い出すでしょう。」
と言ってユン君は
「ああ、ありがとう。」
と言ってパージアスはすべての武器装備を戻そうとして
残り1個のとき・・・パージアスに攻撃をしかけて
ライトクリスタルソードを奪われた。そしてユン君は
「誰だ！」

と言ってみたときは・・・思わず・・ユン君が
「クリス・・なぜ？」
と不思議そうにしていてパージアスが
「やっぱりあなたが・・堕天使の監視役だったのですね？」
と言ってクリスさんが本当の姿に変わった。
「ああ、私の本当の名前はミカファール。うちらの堕天使の
クリスティア様の命令でお前らとの行動を命令されて
来た。だが・・・お前らといると・・」
と苦しい顔を出して・・・パージアスが
「じゃあお前ら堕天使は何のために我が武器防具を盗んだ？
答えてみろ！」
と言った。ミカファールは
「ああ、私も詳しく知らないが・・・聞いた話では
天使がこの武器装備をフル装備すると堕天使を
消滅するっという言葉を聞いてそれを阻止するように
命令されたのだ。」
と聞かれ、パージアスは
「いや！違う・・・この武器装備はお前ら堕天使を
消滅することに使うことではない。これは
大戦争などがあった場合のときだけに使われる
のだ・・・お前のクリスティアはそのために
お前を命令したはずがないだ！」
と言ってミカファールは
「そんなことはない！」
と言って、1人ミカファールの前に現れ
「御苦労だった。ミカファール」
と言ってミカファールは
「クリスティア様これをどぞ」
と言い渡しました。渡した時ミカファールは
「クリスティア様これで・・天使を消滅防げますね」

と行った時クリスティアは
「そうだな・・だが・・私は堕天使も消滅させる。
ていうかこの魔法世界と天界、魔界を私が征服する
そのために魔王クンドンを復活させる！」
と言ってミカファールは
「そうな・・・なんで？何でですか？クリスティア様」
と行ってクリスティアは
「もうお前らと居るのが嫌になってな全部ぶっ壊して
新しい世界を私と魔王クンドンで作るつもりだ。」
と言ってミカファールは落ち込んでクリスティアは
「さて・・・もうようがなくなったお前は用済みだな
お別れだ。」
と言ってクリスティアは呪文を唱え
「ダークジャッチメント」
と言ってミカファールに狙った。そしてミカファールは
ダークジャッチメントに直撃しそうになった時
「危ない！」
とユン君が駆けつけて直撃を防いだ。そして・・・
ミカファールは
「なぜ・・私を助けた？」
と言ったのでユン君は
「ん～・・・敵は敵だけどお前は励を助けてくれた。
そしてうちらも助けてくれた。だから・・助けたのかな？」
と言ってユン君は
「一緒に戦おう。」
と言ってミカファールは
「ごめんなさい・・」
と言った。そして・・・私たちは・・今後大きな事件が
来ることを知らなかった・・。　（第４６章終わり）

クリスの正体（後書き）

明日はちょっと時間がないと思いますんで
更新はしません・・・
なるべく火曜日にはできるように
がんばります＞＜

今までの話（前書き）

前の少しまとめた話なので
あまり関係ないです・・・

今までの話

今までの行動を説明します。
私川崎励は小さいころ男の子に
いじめられててそれを助けてくれたのは
フラユンス・メディアさんです。そして
私とユン君が出会って5年がたって
知らない人からユン君が魔王クンドンに
つかまったっという報告があり、私に
助けてほしいっと言うことで私は迷うことがなく
ユン君を助けに魔法世界に行きました。しかし
助けてほしい人はユン君との結婚をするはず
だった人でその人は私を頼むときに魔力を
杖に託して消えてしまいました。そして私は
魔法世界でユン君のお父様、そして・・・
ユン君の使いであるキトさんティオさんと
出会って私たちはユン君を助けるために
旅を出て、魔界に行くために必要なアイテムを
取りに行って最初のアイテムを取る時にことりさんと
出会っていろいろたすけてもらってことりさんが
仲間になってユン君を助けに旅を続けました。
しかし・・魔王クンドンの四天王と呼ばれる4属性が
私たちに戦いを挑んでなんとか振り切って最後に
魔界で最終対決でキトさんティオさんティオさんの師匠さん
ことりさんが私を守りながら戦ってくれました。
そして・・・魔王クンドンとたたかいでキトさんや
ティオさんが疲れてるのに戦って私はユン君を
助けたら二人を助け、クンドンとたたかいました。
杖が残り3回まで使えるので最後にクンドンを別次元に

封印をしたのはいいのですが・・・クンドンの攻撃を
私が食らいそうになったときにユン君が私をかばってくれて
重傷になりました。そして・・私は最後に私の中にある
全魔力をユン君に回復魔法をしてユン君は無事でよかった
っと思います。そして・・・私はユン君のことを思い
王様に頼んで自分がいた世界にもどり、普通の生活を
して、高校卒業後私は家の手伝いをして帰ろうとしたときに
私の目の前にユン君が立っており、告白され私たちは恋人になった。
しかし・・・その後に私がユン君の前に行こうとしたとき、
目の前にパージアスさんが現れ私の記憶を取られユン君に
条件を出し、私たちは新たな旅に出た。そして最初に仲間になった
のは
セイ・ライザさんで昔ユン君が私たちの世界にいてそこで知り合った
人で私たちと一緒に行動をすることになった。そして・・・
旅をしていくうちにクリスさん、キャラロットさん、サンダーバー
ドさん
ウィンターバードさんが仲間になって、全部アイテムを回収
したけども・・クリスさんの本当の姿は堕天使で監視役で
私たちの前にいたけども・・クリスさんも結局だまされて・・
クリスティアが・・魔王クンドンを復活させようとしているのを
私たちはそこで知ったのであった。

準備・・・

「ご苦労だった。ミカファール」
とクリスティアが行って空へ飛んで行った。
それを見た。パージアスは
「やつめ・・本当に魔王クンドンを復活させる
つもりだ・・ユンさん。まだ時間があります。
多分あいつはライトクリスタルソードで
魔力を練ってそれを次元を作って魔王クンドンを
次元から出すつもりでしょう。ですが・・・
すぐに次元を作る魔力を練るのは不可能なはず・・
ただ・・いつなってもおかしくないので私たちは
クリスティアを追います。もし・・魔王クンドンを
次元から出てしまったら協力をお願いできません
でしょうか？」
とパージアスが行ってユン君は
「ああ・・・魔王クンドンは前に励が次元に封印してくれた
おかげで・・俺たちは助かったんだ・・しかし・・・
今回はもう励は魔法を使えない。そして・・・次元魔法を
使える人はこの世にはもういないだろう・・・だから・・
今度は俺たちが励を守ってクンドンを倒さないといけない・・
この命を変えても・・・」
と言ってパージアスは
「ありがとうございます。では・・・お願いします・・」
と言ってパージアスはクリスティアを追いかけるように
空へ向かった。そしてユン君は一度城にもどって
キトさんたちが迎えてユン君は
「キト、ティオ、ことりさんすく準備できるか？」
と言ってキトさんたちは不思議そうにしてキトさんが

「どうしたのですか？ユン様」
と言って、ユン君は今までのことを話してみんな納得して
「わかりました。今準備をします。」
と言ってみんなは分かれて私は目が覚めてユン君は
「大丈夫？励」
と言って私は
「うん・・大丈夫だよ」
と言ってユン君は
「これから・・忙しくなるが・・励はどうする？
安全なところにいるか？」
と言ったので私は
「どうして？」
と聞いたのでユン君は
「魔王クンドン知ってるか？」
と聞いたので私は・・
「うん・・確か・・私が・・次元に封印したんだよね？」
と言ってユン君は
「ああ、そうだ・・んで遺跡を集めた理由は励君の
記憶を取られてしまったからパージアスに手伝ったが
その後にパージアスに聞いたのは今後俺たちの前に
武器装備を狙う監視役がいるっということを聞かされ
その監視役の敵もわかった。それは堕天使でしかも
魔王クンドンを次元から出して世界征服をたくらむ
のが目的でそれを聞かされた監視役は・・今・・
うちの部屋にいるよ。」
と言って私はユン君の部屋に行って光景見たのは
「クリスさん？」
と言って。クリスさんは
「川崎さん・・ごめんなさい・・・あなたたちを
だましてました・・・本当にすいません・・」

と言ってユン君は
「俺は堕天使は許さない。しかし・・クリスいや
ミカファールはクリスティアにだまされたので
一緒に戦ってもらうけどね」
と言って私は
「クリスさん。私は気にしないよ・・だって・・
クリスさんのおかげで・・いろいろ助かったことが
多かったもん。だけど・・戦うときは無理しないでね・・」
と言ってクリスさんは
「ありがとうございます・・ユンさん・・川崎さん」
といった。そのころ・・空は?
「追いついたぞ・・・クリスティア!」
とパージアスが言ってクリスティアは
「しつこいですね〜もう少しで完成するのに・・
邪魔をしないでほしいですね」
と言ってパージアスは
「だまれ!おまえの欲望で世界征服されては困る」
と言ってパージアスは魔法を唱えた。
「ジャッチメント!」
と言って光の十字架がクリスティアに向かって攻撃を
した。クリスティアは
「面倒ですね〜では・・少しの間あなたの大戦をして
あげましょう。」
と言ってミカファールは魔法を唱えた。
「ダークジャッチメント!」
とジャッチメントとダークジャッチメントを
ぶつかり技は消滅をした。そして
「ふう・・やっと魔力を練れました。」
と言ってクリスティアはライトクリスタルソードを
大きく振って呪文を唱えた

「ダークエックスカリバー！」
と言って空を切った。そして次元が現れ見た光景があった。。。（第４７章終わり）

魔王クンドン再び

「助けてくれたやつありがとな」
と言って魔王クンドンは私たちの前に現れた。
そして、パージアスは
「っく・・駄目だったか・・・」
と言って私たちは外に出てそれを見た魔王クンドンは
「ほお・・またあったな小僧、小娘お前らのせいで
俺は・・・長年の間俺は・・・次元の間に閉じ込められ
いつか出たいと思ってたが・・まさか早く出れるとわ
思ってもいなかったがな。俺を助けたやつはどいつだ？」
と言って、クリスティアは
「はい。私があなたを助けました。」
と言ったら、クンドンは
「ほお。お前の叶いたい夢は何だ？」
と言ったのでクリスティアは
「私は魔王クンドン様と一緒にこの世界、いえ。全世界の
征服を考えたいと思ってます。」
と言ったら、クンドンは
「ほお～俺と同じことを考えてたとは・・まあ俺の力で
よかったら一緒に夢を叶うか？」
と言ったのでクリスティアは
「よろしくお願いします。クンドン様」
と言ったとき、ユン君は
「絶対にお前らの夢をかなえることはさせんぞ！」
と言ってユン君は私たちに
「励は少し離れててくれ、セイとティオは二人で
魔法攻撃でクリスティアを倒してくれ。クリスと
キトは俺と一緒に魔王クンドンを攻撃するぞ！」

と言ってクリスさんは
「私も・・手伝っていいのですか？」
と言ったのでユン君は
「ああ、お前も俺たちの仲間だ！堕天使だけど
俺たちはお前の力のおかげでいろいろと助かったから
今回も協力してくれないか？」
と言ってクリスさんは
「はい！喜んで！」
と言ってユン君は
「キトリミッターを許可をする。だが・・無理はするなよ
それとサンダーバード、ウィンターバード、キャラロット
君たちはクンドンの全体魔法をなるべく止めてほしい。
それよりはまず励の無事だけが大切だから・・・励を頼む」
と言ってキャラロット達は
「分かりました」
と言ってパージアスが
「私も協力をします。」
と言ってユン君は
「ああ、頼むよパージアス。パージアスはクリスティアを頼む。」
と言ってパージアスは
「分かりました。」
と言ってユン君やキトさんは魔力を練ったそのとき私はユン君に
「ユン君・・無事で帰ってきてね・・・無理だけはしないでね」
と言ってそれを聞いたキトさんは
「大丈夫ですよ川崎様。ユン様は必ず私たちが守りますので・・」
と言って私は
「お願いねキトさん・・」
と言ってユン君は
「励・・・心配掛けるけど・・今回で決着をするよ。そうしないと
今後うちらがいなくなったりしたらこの世界、いや全世界の

平和がなくなる。だから俺たちは全世界を守らないといけないんだ
だから・・・待っててくれ励。そして終わったら幸せな生活を
送ろう。」
とユン君は恥ずかしそうに行った。私は
「うん！絶対だよ」
と言ってユン君たちは魔王クンドンとクリスティアに向かって
攻撃をしかけたのであった。　（第４８章終わり）

魔王クンドン再び（後書き）

最後の言葉は・・微妙かもしれないけど・・
気にしないでください＞＜
んで・・金曜日に書けなかったときは
すいません・・・なるべく更新できる
ようにがんばります。多分次は
クリスティア編で・・書こうと思います。

VSクリスティア（前書き）

お待たせしました・・・
1日遅れですいません・・
また遅れるかもしれませんが
よろしくお願いします><

VSクリスティア

魔王クンドン復活後私たちはユン君の指示で
クンドンはユン君キトさんクリスさんで
クリスティアはパージアスさん、セイさん
ティオさんで別れて攻撃を仕掛けた。
パージアスさんはセイさんティオさんに
「あいつの弱点は光属性ですので・・
私があいつの動きを止めますので
セイさんかティオさんは光属性の技を
使えますか？」
と聞いたのでセイさんとティオさんは
「はい、私は元々光属性の使いです」
「一応ユン様から光属性の技を教えてもらったので
大丈夫です。」
と言った。そしてパージアスは
「ではなるべく体力を消費しないでさっさと
クリスティアを倒しましょう」
と言ってパージアスはクリスティアに向かって
攻撃を仕掛けた。そして移動しながら魔法を唱え
「フォトン！」
と言ってクリスティアの周りに光の塊が
襲いかかった。そして直撃をしたと思えば・・
「ふふふ・・こんな攻撃は私には効かんぞ？」
と無傷でクリスティアが行った。そしてクリスティア
からの攻撃で
「これを受けてみろ！」
と言って魔法を唱えて
「ダークバースト！」

と言って大きな珠をパージアスに攻撃をして直撃した。
そして・・パージアスは
「っく・・・」
と行った時クリスティアが
「お前ら早く私を倒してクンドン様に攻撃をしようと
　しても私には倒せんぞ？」
と言って魔法を唱えた。
「ダークトルネード！」
と言って、次はセイさんティオさんに向かって攻撃を
仕掛けた。あたりそうな時に・・前に盾が現れ
ダークトルネードを跳ね返した。そして
それを見たクリスティアが
「誰だ！私の邪魔をしたやつは」
と言って現れたのは
「ふう・・危なかったですね」
と言ってことりさんが現れた。ティオさんが
「ありがとうございます。ことりさん」
と言って、ことりさんは
「いえいえ～でも私だけであのダークトルネードは
　反射できませんよ？」
といってことりさんの後ろにいたのは
「久しぶりだなティオ元気だったか？」
と言ってティオさんの師匠さんが現れて
「師匠！！お久しぶりです！」
と言ったら師匠さんが
「挨拶はあとじゃ。今はこいつを倒してクンドンを
　倒さないとな。ティオ今から合体魔法をやるぞ？」
と言ってティオさんが
「合体魔法ですか？」
と言ったので師匠さんが

「ああ、元々は魔法は単体だと強いがそれを一斉に
魔法を唱えると合体魔法が使えるようになるが
魔力の消費が激しいから使うのは1度のみ
できるか？ティオ」
と言ってティオさんは
「分かりました。やってみます。」
と言ってティオさんの師匠さんは
「ことりさんはあいつの動きを止めてくれるか？
それと・・そこの1人は天界から来た方
そしてあなたも協力してくれるか？」
と聞いてきたのでパージアスとセイさんは
「分かりました。」
「了解しました。」
と言ってティオさんの師匠さんは
「では2人はフォトンを唱えてくれ。私とティオは
インディグネーションを唱える」
と言って私たちは一気に魔法を唱えそれを見た
クリスティアは
「お前らの魔法を止めてやる！」
と言ったときクリスティアの動きが止まった。
「っく・・ディバインか・・こじゃくな・・・」
と言ってことりさんは
「あなたの相手は私です。」
と言ってことりさんは
「サイレス」
と言ってことりさんは
「これであなたは数分魔法を封じました。
今です。」
と言ってティオさんの師匠さんは
「今じゃ！」

と言ってセイさんパージアスは
「フォトン！」
打った後ティオさんとティオさんの師匠さんは
「インディグネーション！」
と唱え二つが合体してクリスティアに直撃をした
そしてティオさんの師匠さんは
「これが・・シャイニングネーションだ」
と言ってクリスティアはティオさん達の前で
姿を消滅した。　（第４９章終わり

VSクンドン　その1（前書き）

遅くなりました・・・
またがんばって毎日書けるように
がんばります＞＜

VSクンドン　その1

クリスティアとクンドンを戦うのに
私たちは二手に分かれお互いにがんばろう
として戦いに挑んだ。そしてクリスティアは
ティオさんセイさんパージアスさんで
戦ってキトさんユン君クリスさんは
魔王クンドンに戦いを挑んだ。ユン君は
「これが・・最後の戦いになるかもしれない。
クリスは俺とキトのサポートを頼む。
キトは俺と一緒に接近戦でクンドンの隙を
できたところで大技を出す。その隙ができたときに
リミッターを外すぞ。だが・・・リミッターを
外した時に最高3分までにリミッターを解除しないと
命にかかわるから・・気をつけろよ。むりだけはしなように」
とユン君は指示をしてキトさんとユン君は
「いくぞ！」
「はい！ユン様」
と一気に魔力を練って二人はクンドンに向かって攻撃をした。
まずキトさんから剣に魔力を練って魔法を唱えた。
「獅子十連覇」
と振り下ろした時獅子が１０等分に分かれクンドンに攻撃を
仕掛けた。そしてクンドンは
「ほお～強くなったかを見せてもらうぞ！」
と言いクンドンは魔力を練った。そして・・
「ダークコワ」
と言って黒い大きな珠とキトさんの獅子十連覇とぶつかり
消滅をした。そしてキトさんは
「なんと・・・」

と言ってクンドンは
「っふ・・この程度か」
と行った時ユン君は魔力を練っていて
「チャージ1」
「チャージ2」
「ヘイスト」（速さを上げる魔法）
「シャープネス」（力を上げる魔法）
「フェイス！」（魔力を上げる魔法）
一気に練って唱え終わったら一気にユン君は
一瞬でクンドンの前に来てユン君は
「貫け！獅子爆裂連撃覇！）
と殴ったときに獅子が多く現れクンドンに
直撃をした。そしてユン君は一時後ろに下がり
キトさんもうユン君のところに来て
「やったか？」
と言ったら、クンドンの声がして
「っく・・こんなに食らったのは初めてだ・・
だが・・これはどうだ！」
と魔力を練ってクンドンは魔法を唱えた。
「メテオストライク！」
と大きな隕石が現れ一気に粉々になり
私たち全体に攻撃を仕掛けた。ユン君は
「しまった・・・」
と行った時近くから声が来て
「サンダーボルト！」
「ハリケーンウィンドウ！」
「オーロラビーム！」
と3つの攻撃がメテオストライクと
ぶつかり消滅をした。そしてユン君は
「ありがとう、サンダーバード、ウィンターバード

キャラロット」
と言ってキャラロットさん達は
「いえいえ、私は氷遺跡で私を助けてもらい
そのお礼をしただけですよ～。」
「私も雷遺跡で閉じ込められたのをあなたたちに
助けられそしてウィンターバードと久しぶりに
会えて、いろいろお世話になった。」
「私はユンさんの役に立てるだけでいいのです。」
と言った。そしてユン君は
「よし・・もうリミッターを外すぞいいな？キト」
と言ってキトさんは
「はい。分かりました。」
と言ってユン君キトさんはリミッターを外す種を
食べて魔力を練った。　（第５０章終わり）

VSクンドンその2（前書き）

学校などで忙しく
更新遅れてすいません・・

VSクンドンその2

リミッターを外す種を食べたユン君とキトさんは
魔力を一気に練ってクンドンに向かって攻撃をした。
そしてまず始めにキトさんは
「魔剣爆裂連撃爆裂覇」
と剣を下しクンドンを攻撃をしてクンドンは
「っぐ・・・」
と大ダメージを負った。キトさんは休むことなく
次の技を繰り出して
「魔陣連撃覇」
「魔陣風撃覇」
と一気に技を繰り出しクンドンにダメージを
してキトさんは1回後ろに下がった。
そしてキトさんは疲れたように
「はあはあ・・・ユン様後は頼みます。」
と言って、キトさんは袋から種を取り出し、
口に入れて少しふらついてた。それをユン君が
「ああ、キトお前はよくやった。後は俺に任せとけ
　励キトを頼むぞ。」
と言いユン君が魔力を練って一気にクンドンに向けて
「爆裂覇」
とクンドンに向けて殴った。そして一気に吹っ飛ばされる
ようにクンドンは
「ぐは・・・」
と言った。それを見てユン君は
「まだまだ・・」
と言い魔力を練ってクンドンに向けて
「爆裂覇！」

とクンドンに向けて攻撃した。しかし・・・
打つ前にクンドンがユン君の動きを止められた。
そしてユン君は
「な・・・」
と唖然のように見てクンドンは
「危なかったぜ・・お前が打つ前に少し
封印術をかけておいた。お前はもう俺に近づくことが
できないぞ。」
と言ってクンドンは呪文を唱え
「ダークメテオストライク」
と唱え空から隕石が一気に城へ向けて攻撃をした。
それを見てキャラロットさん達は
「ここは私たちに任して！」
と行った時クンドンは
「俺の邪魔をするな！！！」
と言って呪文を唱えた
「サイレス」
と唱えたときキャラロットさん達は
「っく・・・魔法を封じられた・・・」
と言った。それを見てユン君は
「俺が何とかするから任せとけ」
と言って魔力を練った。そして
「チャージ1」
「チャージ2」
「チャージ3」
とリミッターを解除をして一気に解除して
ユン君は隕石に向けて攻撃をした。
「獅子爆裂覇！」
とこぶしで降って一気に隕石を粉砕した。
それを見てクンドンは魔力を練って魔法を唱えた

「お前は隙を見せてくれた。これは感謝をしないとな」
と言ってユン君は
「く・・・囮だったのか・・・」
とやばそうな顔を見せて、クンドンは
「そうだ。ありがとうな。」
と言って魔力を練ってキャラロットさん達ティオさん達に
向けて攻撃をした。
「ダークバースト」
と出してみんなはそれを逃げたかったが間に合わず
攻撃を食らった。そして私を助けたキトさんキャラロットさん
サンダーバードさんウィンターバードさんクリスさんそして
クリスティアからたたかいが終わったティオさん
ティオさんの師匠さん、パージアスさんセイさん
ことりさんが大けがをした。それを見て私は
「キトさん・・キャラロットさん・・・サンダーバードさん・・
ウィンターバードさん・・クリスさん・・なぜ・・
私を守ったの・・・」
と私は泣きそうにしてたらキトさんが
「あなたはユン様の大切な方です・・私たちは魔力抵抗が
少しあるので大丈夫ですが・・あなたは・・普通の女の子だ
これをくらったら・・あなたは大けがだけでは済まなくなる・・
だから・・私はあなたを守りたかったです。」
と言って私は・・
「ありがとう・・キトさん・・でも・・私は・・
何にも役に立たない・・どうしたらいいの・・
私に・・みんなを助ける力があったら・・・」
と行った時聞いたことがある声が私に行った。
「あなたはもう私の力なしでも魔法は唱えれますよ。」
と聞いて私は
「え・・あなたは・・・」

と言ってその声をした人が
「私の名前はテイアっと呼んでください。まあ・・もう
この世にはいないのですが・・しかし・・あなたは
私が作り上げた杖がなくてもあなたが今助けたい
思いがあれば・・きっとあなたの力になるでしょう。
さあ・・あなたの思いをあなたの心に行ってみて。」
と言ってテイアさんの声が消えて私は
「ありがとう・・テイアさん私・・みんなを助けたい・・
お願い・・みんなを・・みんなの傷を癒して！！」
と行った時私の体が魔力が練って一気に放出した。
「サークルナビゲーション！」
と言ってキトさん達がクンドンから食らった傷が
きれいに消えていってそれを見たクンドンは
「あの小娘・・・あいつが・・また俺の邪魔をするのか・・・
だが・・お前は俺が倒してやる！！！」
と魔力を練ってそれを見たユン君は
「お前には励を傷つけない！」
と言ってユン君は魔力を最大限練ってそれを見たキトさんは
「やめてくださいユン様！！チャージ４を解除したら・・
あなたの身がもちません！」
と叫んでユン君は
「大丈夫さ・・・すぐ片をつけるから気にしないで」
と言って魔力を練った。
「チャージ４」
とリミッター状態を解除しながら最終リミッターを外した
ユン君は一気に魔力を練って
「みんなありがとうな・・こんな俺を支えてくれて。」
と言ったので私は
「いや・・ユン君・・無事で帰ってきてね・・・・」
と言ってユン君は

「ああ、戻ったら結婚しようね励」
と言って私は・・・
「うん・・分かった・・・」
とユン君に返事を返してユン君は私に笑ってクンドンに向けて
「これで終わらせる・・行くぞ！」
と一瞬でクンドンの前に立ち
「これで終わりだ！！！！！！」
とこぶしをクンドンに殴り
「皇王天翔翼」
と一気にクンドンと一気に私たちから姿を消した。
（第５１章終わり）

そして未来へ

ユン君は最後に自分の魔力とリミッターを
最大限でクンドンに皇王天翔翼を使った後
私たちから姿を消した。そして・・ユン君を
捜索してもう3日がたった。私たちは
ユン君を探すためにいろんな場所を
探していたがいまだにユン君を見つけられなく
私とキトさんとティオさんの3人は城の周り
セイさんことりさんクリスさんは少し離れた
町の周辺で探していた。他もいろいろな場所に
行ってみんなでユン君を探していたが・・
いまだに見つからなかった。
「ユン君・・・どこ～」
と私は探していて・・ユン君の声がしなかった。
夜になってみんなは一旦城に戻って明日の捜索の
ために会議を開いていた。私は寝ずにユン君の捜索を
した。
「ユン君・・・どこ・・あなたがいないと・・
　私は悲しいよ・・・」
と泣きながら探していて石につまずいて転んだ。
そして・・私は疲れで立てなく
「どこなのよ・・・ユン君・・・」
と泣いていたら懐かしい声がして
「励・・ただいま・・」
と言って私が顔を上げたときユン君がいた。
「ユン君・・・よかった・・・もう会えないと思ったよ・・
　本当によかったよ・・・」
と私はユン君の前で大泣きをした。そしてユン君は

「ごめんな・・励・・あの後結構飛ばされて・・
魔力を回復するのに1日必要で・・・
魔力を回復品がら・・こっちに歩いてやっと戻れたよ・・」
と言って私は
「本当に生きててよかった・・・本当に・・」
と私はユン君を抱きついた。そして・・・
数年がたった。まず、セイさんから
セイさんはユン君が戻ってきた後魔法世界と私の世界の
遺跡を巡っていた。クリスさんはパージアスさんと
協力をして天使と堕天使を協力をし世界を平和を
すると決意をした。キャラロットさんサンダーバードさん
ウィンターバードさんは自分の故郷に戻った。いまでも
時々私たちの前に来てくれる。ティオさんの師匠さんは
また自分を鍛えるために旅をしていた。ティオさんと
キトさんは上級魔法クラスの中でも1位2位と争うぐらい
有名になりキトさんティオさんの部下に自分の技を
教えて楽しそうにしていた。ことりさんは歌がうまいので
私の世界に行って歌手をしていてすごく人気アイドルに
なっていた。そして・・私とユン君は・・・・・
「王様何か料理を作ってもいいでしょうか?」
と私が言ったら
「励・・王様はよしてくれ・・ユン君でいいよ。
うん、励の料理久しぶりに食べたかったから
すごくうれしいよ」
とユン君が言って私は
「分かったユン君。じゃあ作ってくるね〜」
と私は楽しそうに料理をした。なぜなら・・
今日は・・・大切な日ですから・・・
何の大切な日?それはね・・重なりすぎだけど
まず私とユン君が出会ったとき。そして結婚記念日

そして・・・今日は何と言ってもみんなが私たちと
会える特別の日ですから・・・そうそう・・
私はクンドン戦の後ユン君からプレゼントで
自分が思ったことを魔法が使える杖を開発してくれて
私は人が困ってるときだけそれを使いみんなが幸せに
なってくるのを楽しんでた。そう・・魔法は・・・
使い方によってみんなが幸せになるそ悲しいくなることも
あります。だから魔法は幸せになることが今の私の夢で
もう悪意がないことを信じてユン君とともにがんばって
行こうと思います。そして
「みんな～御飯できたよ～」
と私はみんなのところに料理を持って向かっていたので
あった。（最終回終わり。）

そして未来へ（後書き）

お疲れ様でした～
誤字脱字がひどいかもしれませんが
毎日更新を狙ってがんばって
行きました・・・どうでしょか？
っと言われても困りますね・・
でも・・・５，２０４アクセスは
すごくうれしいです＞＜
毎回見てくれた片
時々見てくれた方
いろいろいますが・・・
本当にありがとうございました～
今後は・・一応恋愛？でまた
書こうかと思いますが・・
いつになることやら・・・
学校の用事などがあって
すぐに新しいのは無理ですが
１１月には書きたい・・っと
思います・・一応予告で
学校生活に書きますので・・・
気になった方は・・・
そっちで見てください・・
今度は・・１００話越えてみたい
そして・・アクセス１万越えてみたい・・
まあ夢のまた夢ですがね・・
では～１１月の中旬に書けるように
がんばります＞＜では～ｍ（＿）ｍ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2664n/

魔法での幸せ

2010年10月23日10時10分発行